

よう実 最速Aクラス卒業RTA Aクラス綾小路籠絡ルート

月島さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最速Aクラス卒業を目指しスキップ連打するRTAはーじまーるよー。

操作キャラがAクラスとして卒業したらクリア。ということでも楽で手っ取り早い方法である、入学時からAクラス+綾小路君を籠絡するというルートを取ることでイベントをオートとスキップで流しまくるチャートを行います。

はつきり言って完璧なチャートを組んでしまったので、消化試合感が否めないよなー俺もなー、なRTAとなっています（フラグ）

出来たところまで一括投稿します。

それではどうぞ！

目次

番外編 1	2週目堀北鈴音の奮闘記 3	307
番外編 1	2週目堀北鈴音の奮闘記 2	293
番外編 1	2週目堀北鈴音の奮闘記 1	279
1 1	裏	266
1 1		255
1 0	裏	242
1 0		230
9	裏	216
9		203
8	裏	189
8		177
7	裏	156
7		143
5、6	裏	123
6		108
5		95
4	裏	81
4		71
3	裏	56
3		42
2	裏	30
2		19
1	裏	10
1		1

はぁーい、よーいスタート。

最速Aクラス卒業を目指すRTAはーじまーるよー。

計測開始はバスイベント発生、終了はAクラス卒業時とします。ちなみに、このルールでの先駆者はいないので私が世界一です。

名前は打ちやすさの関係で 怜山静香 れいざんしずか とします。性別は女です。そう、れずちやんですね。

では、本RTAの簡単な説明をしていきます。レギュレーションはいくつかあります。違いはスタートするクラスがAとDクラスのどれか、スタート地点が0歳時かバスイベント時か、つまり合計8つです。

今回は速度にこだわったので(リセしたら0歳からやり直しながらやってられない為)、バスイベント時、かつキャラクリのリセマラ地獄さえ超えれば最も手っ取り早いAクラススタートとしています。

Dクラスで呑気にドロップアウトボーイ共の相手なんかしてられないノーネ(KRNS先生並感)。

今回のチャートは、Aクラスルートで最も厄介な我らが主人公、綾小路君への対抗策として、リセマラ地獄を超えた極上のれずちやんの魅力で綾小路君を墮としてしまう方策で組んでいます。れずなのに男を墮とすのか……(困惑)

そうする事で、原作の様々なイベントの脅威を完全に取り除くことができるため、1年時以外のイベントはほぼ全てオートやスキップで短縮しまくって最速を目指します。

お、待てい。機械のような綾小路君を籠絡なんて無理だぞと思ったその貴方。

確かに、綾小路君は様々な計略を巡らせるとともに機械のような内面が強調されるようになりますが、原作開始時点では、外に出ることの出来たウキウキ感からか、友達が欲しくてウズウズしていたり、全科目50点とかいう明らかに目立つ馬鹿みたいなミス(嘲笑)をした

りする、穴だらけの穴小路君です。

それが、CBSR先生に脅されたり、自身が非道な策を取ったりすることで、徐々に昔と同じのホワイトルーム産機械小路君になって行くんですね、悲しいなあ。

それはともかく、つまりはリセマラを超え、何かしらの特化した能力のどれか一つがどうにか綾小路君とやり合えるような極上れずちゃん、原作初期段階、具体的には同じバスに乗り、初っ端からコミュを取りまくってしまえば、籠絡してしまうことが出来てしまうのです！

逆に言えば、極上れずちゃんですら開始時点を逃すともう無理ですし、リセマラを超えない平凡れずちゃんだと、そもそも能力不足で綾小路君の目に留まらず、攻略不可となっています。お前やっぱ機械だよ……（熱い手の平返し）

では早速、地獄のキャラクリを開始します。

何度も言っているように、Aクラススタートかつ綾小路君籠絡チャートを走るには、それはもう低確率に低確率を超えて極上れずちゃんを作り出す必要があります。必要なのは、ある程度以上の容姿と、何でも良いので綾小路君に対抗出来るステです。

まず、容姿ですが、原作初期綾小路君は割と一般思春期男子のような事を考えます。つまり、れずちゃんの容姿が一定を下回ると、Dクラスとかいう異常に美人揃いのクラスの女の子たちに目が行ってしまふため、籠絡不可能となります。逆に言えば当然、容姿が良ければ良いほど手間や時間の短縮になります。

基準は、最低限軽井沢さんや櫛田さんレベル、可能なら堀北さんレベル、理想は坂柳さんレベルとなります。まあ、坂柳さんレベルなんて目指すとただでさえやばいリセマラの数が更に地獄になるので流石にそこそこで妥協しますが（最低限が高すぎる）。

次に、何でも良いので綾小路君に対抗出来るステですが、ここで言うステとは、要は頭脳か身体能力になります。他のステとしては例えば芸術性等がありますが、そういうのが高くてもよう実世界では何の

役にも立たないので……（無慈悲）。

れずちゃんは女の子なので、当然高い頭脳を目指します。まあ頭脳といっても全てにおいて優れている必要は無く、例えば数学特化で他はゴミ、とか、勉強は出来ないが知恵はめちやくちや回る、とかでも大丈夫です。まあ、ゴミと言っても最低限総合的にAクラスに入ることの出来る基準は満たさないとはいけません。

今回は妥協せずに、学力、知力、判断力のどれか1つがA+、他2つのステも最低B以上、容姿も最低B-以上を基準にしてリセマラを行います。先程言った数学特化などの得能は、後述する理由から今回は狙いません。ちなみに、いくら最低基準があるとはいえ、全てが最低基準値だったりすると総合値が不足し過ぎるために不採用となります。例えば学力A+で他3つが全部Bとかだとリセです。ここまですらないと綾小路君を墮とす事が出来ません。彼、リセマラ無しの素で全ステA超え（容姿と協調性除く）の化け物なので。狂いそう……！

なら、頭脳に固執しないで肉体労働もイける男にすればええやん！
って思うかもしれませんが、ですが、Dクラスルートはクラスメイトの介護がロスでしか無いため論外、C、Bはそもそもタレント不足で勝ち目が無い。

つまり、Aクラススタート一択。で、スキップ連打のために綾小路君親友ルートとなる訳ですが、ムキムキほも君で行こうとすると、ムキムキに加えて頭脳もAクラス相当でないといけないとかいう馬鹿みたいな確率になりますし、親友ルートは籠絡ルートと違って依存させるまでかなり時間がかかるんですよね。

具体的には、親友ルートでは、ほも君第一にしてクラスを躊躇なく裏切るようにするまで最低1年と半年がかかります。よって最速を目指すならもつと早く仕留める（意味深）事のできる極上れずちゃんでないといけないわけです。

では、リセマラ開始、イクゾー。

学力B―、知性C、判断力C、身体能力C＋、協調性C＋、容姿B。
論外！

先天性心臓疾患？ 健康じゃないと無駄なイベントが挟まって口
スするからパス！

学力D……次だ次!!

少女リセマラ中……

リセマラ中……

リセ……

リ……

出ました!!!

学力A＋、知性A、判断力A＋、身体能力C―、協調性D、容姿A、
バステ：無表情、感受性―

文句無しの極上天才黒髪長髪美少女、れずちゃんの誕生です!!

これまでにデータの闇に消えたれずちゃん100000人以上も
喜んでいきます。ヤッターオワッター（ヤケクソ）。

容姿は原作には無いステですが、軽井沢さんがB―、一之瀬さんが
B、堀北さんがB＋、坂柳さんがAとなっているので、れずちゃんは

低確率を超えて坂柳さん級の超美少女となっています。

ちなみに、容姿A+となるともはやそれだけで特化能力になるため、他の能力が低くても綾小路君からの好感度はどうにかなるのですが、出る確率が天文学に近いのでほぼ死に設定となります。原作最強美少女の銀髪ロリを見た目は超えられんのじゃ。

バステについてですが、これは何れかのステがA+になる場合必ず付いてきます。学校で伸びた結果ならまだしも、入学時点でステA+つてのは人外レベルだからね、しょうがないね。作中でまだ鬼龍院先輩と2年時須藤君しかこのステを持つ人間は居ませんから。坂柳さんの学力がAなのがその異常さを示しています。これは極運だあ……（絶頂）。今回はA+のステが学力と判断力なのでバステも2個ですね。これが先天性心臓疾患などの、致命的な口スを生み出すようなものであれば即リセです。れずちゃんが無表情、感受性―の2つはかなりゆるゆるなバステですね。

逆に、Eのステがあるとプラス得能が付きますが、これAクラスルートなのでね……

無表情はその名の通り、表情の動きがかなり少ないこと、感受性―は、他人の気持ちに共感して分かり合ったりすることが少ない、というバステです。無表情は友人が作り難くなったり、初対面の相手に警戒をされやすくなったりします。感受性―も似たようなものですね。

これが影響してか、作中で、すぐキレて暴力を振るうヤンキー共より、友達を作ろうとしないだけで特に問題を起こさないし、集団行動も必要なものであれば特に文句を言わずに参加する堀北さんの方が低いという、完全に理解不能意味不明な評価基準（残当）における協調性がDとなっていますね。

もし、クラスのリーダーとしてみんなを引っ張るプレイをしたいとか、Aクラス以外のクラスを引き上げるプレイをしたいとかならりせ確定ですが、今回はモブは徹底的に無視するのでこのバステはもはや無いがごとしです。勝ったな。

リセマラが終わったため、バスイベント開始です。

れずちゃんは当然、我らが綾小路君と同じバスに乗ります。

流石に、ここでバスを間違えて長い長いリセマラを無にする走者は居ませんよね（1敗）

バスに乗り込むと……居た！綾小路君です!! 早速彼の隣に座ります。バス内には、明らかに意味不明で糞理不尽な基準でDクラスにされた堀北さんも居ました。黒髪和風美少女はやっぱいいっすね。堀北さんは綾小路君と多く関わる以上、このRTAでもそれなりに出番が多いです。まあ綾小路君はれずちゃんに墮とされるので、彼女は原作以上に苦労しますし、Aクラスに登る目標も絶対に達成されないんですけどね。ステも女子にはあまり必要ない身体能力以外リセマラれずちゃんには遠く及びませんし。

それはそうと、席に座る直前、綾小路君と目を合わせて会釈しておきます。こうすれば、超美少女のれずちゃんにこの頃の綾小路君が内心ウキウキになっているのがわかります。容姿A様々ですね。

オツスお願いしまーす！これから君を墮とす我らがれずちゃんです!!

そして、これからバスイベントですが……スキップだ!! 今チャートのれずちゃんは榎田さんや高円寺君と一切関わる気が無いのでね。単なる雑音に過ぎません。

バスを綾小路君と一緒に降ります。綾小路君とタイミングを合わせて歩き、早速コミュ開始です!!

まずうちさあ……屋上、あるんだけど、焼いてかない？

少女原作主人公とコミュ中……

成功です！ 綾小路君の連絡先をゲットしました！！

……まあ、この頃の綾小路君はチョコロ小路君ですし、れずちゃんは容姿Aなので、ゆるゆるバスステ等関係なく自分から聞けば100%連絡先が手に入りますし好感度も上昇します。

もう逃さないからな……！！

綾小路君と別れた後Aクラスに行き、脇目も振らずに着席。即寝ます。

そうでもしないと容姿Aのれずちゃんはクラスメイトに話しかけられまくるから、ロスするんですよ、しょうがないね。

真嶋先生が来たので起きて話を聞きます。ウホツいい男……。ここでされるのは学校のルールとお金代わりのポイントについての説明ですね。

これは聞いておかないとこれからの行動に差し障りますし、寝ること、いい男である先生の好感度をあまり下げってしまうのもまず味です。

なので、しつかりと起きて聞きましょう。

なにに？ 1ヶ月で10万!? 高すぎるやろ!!

簡単なこの学校のルール説明ですが、卒業か退学するまで敷地外に出ることはできず、外部との連絡も不可。代わりに、敷地内は学校だけでなく娯楽施設や商業施設もあります。要はデートスポットですね()。

寮では電気代や水道代等は全部タダで使えます。夜に他人の部屋に入ることはできないようですが当然、守らない生徒が多いようです。れずちゃんは今回どうするんでしょうね？ (暗黒微笑)

そしてこの学校最大の特徴が、Sシステムです。各クラスにポイントが与えられ、その多さを競います。進学率・就職率100%を謳っているこの学校ですが、恩恵を受けられるのはAクラスで卒業できた

生徒のみ。まあ、坂柳さんを超える天才であるれずちゃんには恩恵などどうでもいいことですが、RTAにおける目標なので絶対に達成します。

先生がSシステムについては何も説明せずに解散を言い渡し、教室から去りました。直後に、我らが銀髪美ロリ坂柳さんが早速Aクラスの皆の前で何か喋ってますが、ただのロスなので無視して即帰宅だ!!

……ちなみに、これからもこんな事を繰り返す予定ですが、極上れずちゃんの能力があれば坂柳さんからの好感度は下がりません。

むしろ、今のれずちゃんのように、リセマラを経て入学時の坂柳さん以上の頭脳を身につけて居たりすると、おもしろーやつ、ってな感じで好感度が高まりすらします。好戦的ロリ怖い……（震え）。

その代わり、葛城君のような義に篤い漢や、モブクラスメイト（特に女子）からの好感度は下がってしまいます……が、葛城君はいい漢のため悪辣なことさえしなければ好感度が一定ラインを下回ることはありませんし、キラクリの時に言ったようにモブはどうでもいいので（非情）。

そして、これからの行動ですが……生徒会に直行します。さつき即帰宅と言ったな？ あれは嘘だ。

学力A+であれば、入試で全科目満点とかいう化け物成績を叩き出しているため、名前を出すだけで生徒会室に入れて貰えます。

そして、居ましたね。歴代最高の生徒会長である堀北学会長です。オッスお願いしまーす！

堀北会長とするのは、Sシステムの話とその他この高校の制度についての話ですね。それらについては走者や読者の皆さんは知っている事で、天才を超えた化け物のれずちゃんもとつくに気付いてはいませんが、情報は裏取りしておくのが必須なので。

Sシステムや他の制度の詳細を教えて貰う代わりに、れずちゃんに堀北会長が貸しを作る、という取引をします。学力と判断力がA+の

化け物で、1日目から生徒会にカチコミに来る豪傑れずちゃんに貸しを作るなら、と堀北会長は嬉々としてSシステムについても、他の情報についても沢山教えてくれます。もつと欲しいのか……？ 欲しがりさんめ……。

ここでの目的は情報の取得もそうですが、堀北会長にれずちゃんが化け物だと認識してもらうことも大きな目的としてあります。

これが、後々に生きてくるんやなって。

堀北学くんから情報と連絡先をたっぷりと絞り取ったら、今度こそ帰宅しましょう。その後、綾小路君にSシステムについて教え……たりなどはせずに、今はただのおやすみなさいメールだけ送ります。彼女かな？

そうして、ウキウキの綾小路君の返信を見てから就寝します。

ではまた次回。サラバダー。

1―裏

綾小路清隆の独白

怜山静香という少女は、明らかにオレが昨日まで思い浮かべていたような普通の高校生像を反映した人物では無かった。

だが、そんな彼女はオレにとって生まれて初めての友人となった。

今でも鮮明に思い出せる、最初に彼女と出会ったのは入学式の日
のバス。

そこで、オレの隣に座ったのが怜山だった。

恐ろしいくらいに整った顔立ちに、黒く綺麗で長い髪。

そしてスタイルも抜群な完璧美少女である彼女が横に座ってきたので、オレは内心喜んでいと共に、とても緊張していた。

なにせ、この至近距離で異性と居たことなど一度もないのだ。そして、それがこれまでの人生で見た事が無いレベルの美少女。制服から、彼女は同じ学校に向かっていることがわかる。そして一度入学したら外出禁止の学校だということから、彼女はオレの同級生だということがわかる。そして、今日は高校入学初日。これはもはや緊張するの
が人として当然の反応と言える。

彼女が座る直前に軽く会釈を交わし、その後、オレは彼女に話しかけるべきか、何を話すべきか、を考えて悶々としていた。

そうしてひとしきり悶々としてから、ふと彼女の方を見てみると、
彼女は目をつぶって眠っていた。

入学式の日なのに席に座って即寝るのか……凄いな。

いや、本当に寝ているのかまではわからなかったが、少なくとも話しかける機会は失われて、オレは内心落ち込んでいた。

その後、バスの中で一悶着あった。

おばあさんに席を譲るかどうかのやり取り。

争っていたのは金髪と同級生と思しき学生と、社会人らしき女性。そこに茶髪の、これまた同級生と思われる、隣で目を瞑り続けている少女程ではないものの十分美少女の学生が乱入する。

かなり大声で争っていたのだが、そんな中、隣の彼女は騒ぎなど無いかの如く目を瞑ったままだった。

……本当に眠っているのだろうか？ 凄いな。

彼女が眠っている以上、奥側に座っているオレが動いて席を譲ることは不可能。悪いな、茶髪の子。

そんなこんなで、バスが目的地へと到着すると、彼女は目を普通に開けて、バスを降りた。

どうやら起きていたらしい。なら、あの争いに少しくらい反応しても良いと思うのだが……

そんなことを考えながら、オレもバスを降りる。

すると、

「ねえ」

そう、極めて短い言葉を発して彼女はオレの横を歩きながら話しかけて来た。

「え、あ、ああ。何だ？」

オレは緊張しながらもどうにか答える。

バス内で話しかけるかどうかずっと迷っていた相手側から来たのだ。返答出来ただけでも大したものだとオレは思う。

「私は怜山静香。あなたは？」

普通に自己紹介して来た。

何を言われるのかとビクビクしていたオレには逆に驚きであったが、普通の自己紹介なので、オレも倣う。

……しかし、自己紹介とはこんな風に全くの無表情でするものなのだろうか？という疑問はあったが。

「オレは綾小路清隆だ。よろしく」

よろしく、は少しやり過ぎだろうか、馴れ馴れし過ぎただろうか、そんな事を考えておろおろしたオレを他所に、怜山は無表情で話を続けた。

「よろしく。……あなた、面白い」

「え？ ぞ、どういうことだ？」

オレはこの短い会話の中で何か面白い事でも言っただろうか？そんな記憶は一切無いのだが。そして、面白いと言いながら怜山は全くの無表情だった。本当に面白いと思っっているのか？全てが謎だった。

そんな彼女は次に、

「普通、私と話す人はもつと動揺する。男子であれば尚更。あなたはそれが薄い」

なんて事を言ってきた。

いや、それ普通自分で言うか？確かに怜山は凄まじい美少女だから、男なら皆緊張して話すんだろうが……。

それに、

「オレも十分緊張しているつもりなんだけどな」

なんて言うと、彼女はそんなオレの言葉を一切相手にせず、

「それに。あなた、私の事を分析しようとしている。この、私の事を」

そう、言われて一瞬オレの思考は止まった。
バレている。

怜山の言う通り、オレは彼女の事を分析していた。

何故なら、怜山からはあのホワイトルームに居た人間たち以上の強者の気配がするから。

それは、バスに乗り込んで来る彼女を一目見ただけでわかった。彼女は明らかに普通の人間とは違う、と。

だが

「分析？ いや、そんな大層なことはしていないぞ。怜山はどんなやつなのかな、と何となく考えてただけだ。それくらい、誰でもするだろう？」

オレは、無駄とわかっていて誤魔化すことを選んだ。
すると彼女は、

「そう」

とだけ無表情で答え、オレたちは無言で歩き始めた。

それは気まずい緊張ではあった。

だが、誤魔化しをわかっているのに追及して来ない怜山に、どこか居心地の良さをオレは感じていた。

歩きを終え、クラス分けの掲示板を見る。

どうやらオレはDクラスで、怜山はAクラスのようだ。つまり、オレと怜山はここで別れることになる。

せつかく仲良く……は残念ながら恐らくまだなっていないが、ここまで一緒に歩いて来た仲の怜山と別れるのは少し寂しい。

何より、何度も言うが怜山は超絶美少女なのだ。男としては、こんな美少女とは出来るだけ長く一緒に居たいと思うものだろう。

それが例え、オレをして分析し切れない、強者の風格を漂わせる少女だとしても。

そんな事を考えてまた悶々としていると、今度も怜山の方から話しかけて来た。

「あなたとのお話、楽しかった。連絡先交換しましょう?」

「え、いいのか? というかさつきも言ってたが、楽しかったのか?」

超絶美少女からの思わぬ提案。本来ならとても喜ばしい事のはずだが、あまりにも予想外の発言すぎて、思わずオレが逆に聞いてしまった。

「ええ。だって私たち、もうお友達でしょう? 綾小路君」

それを言う彼女は、いつもの無表情に見えて、少し、本当に僅かです。オレの観察眼でようやくわかるレベルではあるが、微笑を浮かべていた。

そうして夜、怜山にメールを送るべきかどうか何時間も迷っていたオレに、

『今日は楽しかった。これからもよろしく。おやすみなさい』

と向こうからメールが来た時は、思わずガッツポーズを浮かべてから返信をした。

坂柳有栖の挑戦

怜山静香。

その名は、ある程度以上、上の世界で勉学を志す同学年の学生には有名な名前だった。

何故なら彼女は、受けたあらゆる模試で全教科満点を取り続け、TVの特集で『現代に現れた天才少女』として全国放送された事もあったのだから。特集では顔を隠されていたが、実際に会ってみるとその理由が良くわかった。

彼女、怜山さんは、頭脳面における才能で私を超えるだけでなく、美貌すらも私と匹敵するものを持つていたのだから。

そんな彼女の顔が放送された日には、問題が起きる事など容易く想像出来る。流石に、TV局もそこは配慮したのか、本人が顔を隠すように言ったのか……まあ、どちらでも良い。

私は生まれてこの方、父の職業の関係上数多くの優れた才能を持つ人々を目にして来た。その結果、一目見たらその人の持つ才能がある

程度測ることが出来る様になった。

だから、同学年で1番有名な人物である彼女を一目見て、その才能を測りたいと思っていた。

彼女がただ、勉強が極めて得意なだけ（それだけでも素晴らしい才能なのは間違いない）なのか、それとも……

そして、実際に彼女を目の当たりにして確信した。

彼女は、私を遥かに超える天才……いや、下手したら歴史に名を残すレベルの、怪物や化け物と称されるような存在である、と。

彼女の才能は明らかに異質。私自身、自分がいわゆる天才と呼ばれる人間だと思っているし、それだけの實力を持っていると確信している。だが、彼女のそれは私のものを明らかに超えている。

一体どんな両親のもとで、どんな環境で育てば彼女のような異常な存在が生まれるのか。

知りたい、と思った。何故なら、恐らく彼女こそが私の思想の体現者なのだから。ホワイトルームでかつて見た彼……彼ですら、彼女に勝てるかはとても怪しいと思わざるを得ない。

だから、私は直ぐに動く事にした。

真嶋先生の説明、あまりにも違和感の多いその説明についての話をすると同時に、彼女の性格、この学校におけるスタンスを理解するために。

先生の説明についての違和感は、当然彼女も気付いているだろう。頭脳面において私に思い付くような事は、恐らく彼女ならば即座に全て考え付くだろうから。

そして、私は先程まで先生が居た壇上に上がり、話し始めた。

「皆さん、初めまして。私は坂柳有栖といいます。まずは、親睦を深めるための自己紹介と……」

言いながら、私はクラスメイトの反応を見ていた。

ほとんど全員が帰る準備を一旦止め、私の言葉に耳を、私の姿に目を向けていた。

ただ、一人を除いては。

たった一人、彼女は音を立てず静かに教室を出て行った。

まるで、私の姿など、私の言葉など、ほんの少しの意識を向ける価値もないと言わんばかりに。

「……坂柳。一人、教室を出て行ったが……」

私に声をかけるのは一人の頭髪の無い男子生徒。

彼も優秀そうではあるが、彼女と比べてしまったら木の葉の如し。

そう、私と同じく。

「構いません」

「? いいのか? だが……」

一見当然のようで、決してそうではない疑問を述べる彼の言葉を私は遮る。彼は恐らく良い人なのだろう。だが。

「彼女、怜山静香さんにとって、私はまだその程度なのでしょう。そして、その認識はきつと正しい」

「怜山静香? まさか彼女がああ怜山だと言うのか? 知り合い……なのか?」

怜山さんの名前を聞いて、教室はざわつき始める。

このクラスには彼女の名前を知る、つまりはある程度以上勉学に励んで来た人間がそれなりの数居る、という事を意味している。そんな彼女を見て、微笑みながら。

「初対面、いえ、きっと彼女からすれば対面すらしていないのでしよう。ですが……」

私は貴女に挑戦します。貴女を、超えて見せる。

思わず蒸気を帯びてしまう自分の身体。頬の辺りが紅潮してしまうのを隠せない。そんな中、言葉には出さずに、坂柳有栖は自分の中だけで、そう、宣言した。

坂柳さんに強敵認定されたラブコメRTA、はーじまーるよー。

入学初日を終えました。

ここからは5月1日まで、初めての自由行動パートが始まるのですが、れずちゃんには好感度稼ぎのために毎日綾小路君にメールを送って貰います。

部活説明イベント……？ そんなロスイベにれずちゃんが参加するわけなんです(無念)。2000万ルートじゃないので、文化系部活を利用したPP(プライベートポイント)稼ぎも必要無いですからね。Aクラスなのでクラスポイントも高いですし、必須イベントなど他にも稼ぐ方法はいっぱいあるので、そこで調達すれば問題無いです。

限定クラス移動チケット？ ナンノコトダカワカリマセン。
基本的に私は2年生編は見なかった事しているので問題無いです。

……いや、だってクラス移動チケットって……物語の根本をぶっ壊すモン出しちゃいかんでしょ……。

メールの内容は、基本的にはその日の事を伝えるおやすみなさいメールですね(彼女並感)。1日1通で大丈夫です。それ以上はロスなので。

たまに、手料理弁当を作って一緒に食べたりもしましょう。妻かな？

この時期の綾小路君は色々飢えた思春期男子であり、ぼっちの暇人でもあるため、容姿性別に関わらず、何かしらのお誘いを断ることはありません。知性Aを活用した料理で存分に胃袋を掴むのだ。

ちなみに、当然ですが食堂はNGです。

食堂で綾小路君と一緒にご飯を食べてしまうと、一定確率でクラスメイトに見つかります。それだけなら良いのですが、Aクラスルート

のため、それは坂柳さんに繋がってしまいます。そうすると、綾小路君と坂柳さんには因縁があるので余計なイベントがれずちゃん目の前で発生してしまい、大幅ロスとなります。やるならお前達だけでやってくれ（懇願）。

そのため、好感度を手っ取り早く高めるためには手料理を作って人目につかない場所で二人で食べる必要があるのです。

場所の選定は試走で完璧に把握しているため、ミスはありません（2敗）。

休日は、クラスメイトの活動範囲を避けた場所でのデートに誘いましょう。個室のカラオケはかなり楽で便利な場所ですが、あまり使いすぎては好感度の上昇値が少なくなるため程々に。

この時期、まだ何も原作主要イベントが始まっていない段階ならば断られる事はありません。

スタートダッシュでスパートをかけてやるのです（スタートダッシュかける以外の攻略手段が無いとも言おう。やっぱあいつ機械だよ……）。

こうする事で、綾小路君の中でれずちゃんが居ることがほとんど当たり前の事になり、れずちゃんの存在は彼にとって、無くてはならないことになっていきます。

ああ逃れられない！

こうして綾小路君に付きつきりストーリーカーする理由は好感度稼ぎ以外にもう一つあります。それは、通称櫛田乳揉みイベントのブロックですね。

あのイベントを起こしてしまうと綾小路君の機械化が進んでしまうので、絶対に引き起こさないようにしましょう。通常、あれは5月に起こるのですが、キャラクリや行動、乱数次第で低確率で4月に起こる可能性もあります。そのため、普段から綾小路君に付きつきりで、彼の行動をある程度れずちゃんが誘導出来るようにすること、綾小路君が極力屋上に行かないように制御する必要があります。

バスイベントで綾小路君の隣の席に陣取り、イベントスキップし

て、その後付きつきりで会話したのも、櫛田ブロックを兼ねての行動です。

あのイベント、乱数やキャラクリ次第で内容が分岐して、綾小路君がおばあさんに席を譲らざるを得ない状況に陥り、綾小路君と櫛田さんの関わりが深くなる大事故が低確率で発生するのです。低確率とはいえ、そんなのでリセマラを無にする訳にはいきません。あのイベント、再三語るように綾小路君籠絡チャートにおいては馬鹿糞重要なんですよね。

やはり櫛田さんは害悪。早く転校させなきゃ……(チャートに無い行動)。

綾小路君関連以外のイベントは……スキップだ!!

貸しを作った生徒会長からの接触も1ヶ月の間に1回だけあります。

内容は、生徒会へのスカウトですね。当然ロスなので断ります。いくら初日に貸しを作ったとはいえ、流石に生徒会入会を強制されるようなレベルの貸しではありませんからね。学くんも素直に引き下がってくれます。

生徒会に入れなかった葛城君に一之瀬さん、見てるう？　これがリセマラの力よ(煽り)。

少女自由行動中……

さて、そんなこんなで5月1日となりました。

綾小路君の機械化は進行せず、好感度も十分稼げています。

100点満点だ!!

月末の小テスト？

あんなもの、学力A+の怪物れずちゃんの間違えるはずがありません。当然満点の語るまでも無いイベントに過ぎないのでスキップしました。

テストで高得点を取ることによって経験値を獲得し、頭脳関連のステが上がっていきますが、れずちゃんは毎回満点なので毎回最高の経験値を貰い、ただでさえA+のステが更に上がり続けるため、今後、試験という試験で誤答することは一切無いです。最終的に、というか割とすぐにステが表記上ではA+のまま数値が100超となります。それでも、上限値が決められているわけではないためずっとステが伸び続けるこのゲームは神ゲー（確信）。

優秀な人間が結果を出すことでその能力を更に加速的に上げていき、周りを突き放していく……現実世界かな？（目を逸らしたい事実）。

ロスなしで上げ続けることの出来る頭脳関連のステはやっぱりRTA向きなんやなって。

そして今日は嬉し恥ずかしクラスポイント制の発表の日ですね。
気になる各クラスのポイントは……

Dクラス：0

Cクラス：490

Bクラス：650

Aクラス：965

はい、こんなところですね。

原作ではAクラスは940ポイントだったのですが、これは極上れずちゃんの存在により、坂柳さんが対抗心をメラメラさせて原作より頑張ったことによる結果ですね。

これは、学力、知性、判断力のどれかがA+だと必ず起こることで、

今回のれずちゃんは、学力A＋、知性A、判断力A＋と坂柳さんの完全上位互換仕様となつているため、予定よりも坂柳さんは更に張り切っているようです。まあ、授業後の坂柳さん率いる会議にれずちゃんは例によつて一切参加していないんですけどね（二ート）。

これは嬉しい誤算ですね。せいぜいこの調子で頑張つて、れずちゃんと私を楽しんでくれよ（寄生虫並感）。

他のクラスは原作準拠。

変なイベントを起こしたりせずにひたすら綾小路君とデートしていた賜物です。Aクラスを選んだ利点がここにありません。綾小路君さえどうにかしてしまえば、もう余計な事は何もしなくても楽勝でAクラス卒業が出来るのです。

これがDクラスなんて選んだ日には……ドロップアウトボーイ!!!
いい加減にするノーネ!!! となります。

山内君などの足手纏いを速攻で退学させ、綾小路君の手綱を握り、須藤君や堀北さんや櫛田さんや高円寺君もどうにかする……こんなんじやRTAなんて成り立たないよー。

……これでも攻略の目があるだけまだマシなんですよね。B、Cクラススタートなんて、RTAどころかそもそもクラスを引き上げてAクラスとして卒業することすらほぼ不可能ですから。B、Cクラススタートだと、もうさつさとクラスに見切りを付けて2000万ポイントルートを進める事になります。クラスイドウチケツトナドナイ。

キャラクリで全ステA＋、バステもゆるゆるとかいうGO神みたいなのを引けたならクラス闘争での勝ち目も出てくるのですが、まあ無理です。

いい男の真嶋先生からSシステムについての説明がありました。
なになに………?

クラスポイント次第でAとDは入れ替わる。

進学就職の恩恵を受けられるのはAクラスのみ。

お前たちは歴代でもずば抜けて優秀。

あとは……テストで赤点は即退学、だがお前たちならば全員が赤点を回避すると確信している、だって？　ふーん（すつとぼけ）。

いい男からの説明が終わりました。

ざわついてはいますが、流星にAクラスなので原作Dクラスのように大声で喚き散らす人間は誰も居ません。

ここから、クラス間闘争が本格化していくわけですね。

早速、我らが銀髪美ロリの坂柳さんという漢の葛城君がリーダー争いを開始しました。

放課後に本格的な会議をさせていただきます。

れずちゃんはどうするのかと言うと……即帰宅です（当然）。

リーダー争いなんてどうでもいい、はつきりわかんかね。

放っておけば銀髪ロリが勝ちますし、逆にいい漢にれずちゃんが味方することで勝たせてあげることも出来ませんが、RTA的には何の意味も無いただのロス行動なので。いい漢を墮として土手で盛り合いたい方はぜひご自分でプレイしてみてください（露骨な布教）。

帰宅して、忘れずに綾小路君におやすみなさいメールをします。

クラス間闘争？　そんなの俺たちの友情には関係ねえだろルオ!?

オレタチトモダチ、ミンナトモダチ。

こうする事で、5月1日の茶柱堀北イベントのせいで少し進行してしまつた綾小路君の機械度を下げると同時に、れずちゃんへの好感度を高めることが出来ます。

どんどん依存していつてね！

ここからも、今まで通りに一部の必須イベント以外は怒涛のスキップ連打をします。このスキップ連発が許されるのが、Aクラス+リセマラ地獄チャートの最大の利点ですね。

必須イベントの中でも重要なものは、引き続き行われる綾小路君を墮とすためのコミュと、このSシステム発覚直後のタイミングで、もう一人れずちちゃんの手駒を作るためのコミュになります。

いくられずちちゃんが坂柳さん以上の化け物ステとはいえ、一人で出来る事には限界がありますからね。駒は必須となります。

その人物は、れずちちゃんのステによって分岐します。

今回のステにおける、れずちちゃんの手駒とは……来ましたね。橋本君です。

橋本君は、1番強い人間、最終的に勝つ人間の方に付いて、自らもその立ち位置を確保し、美味しい汁を吸うことをモットーにした漢。彼の立ち回りは卑怯に見えるかも知れませんが、これって人生を生きるに於いてめちやくちや大事なことなんですよ。例えば、入社する会社選びとか。極論ですが、株式投資にも同じ事が言えますね。1人で生きていける能力があるならともかく、それが出来ないなら強いものを選ぶ力は必要。

むしろ、この年で自らではトップには成れないと理解し、こういった立ち回りをする彼は非常に優秀な人材なのです。

そんな橋本君は、クラス闘争が明らかになり、Aクラスでリーダー争いが開始したこのタイミングで、れずちちゃんの学力、知性、判断力

の平均がAを超えていたら話しかけて来ます。

葛城君でも坂柳さんでもなく、れずちゃんをクラス最強と見做すんですね。やはり優秀な漢だ……。

おう、よく来たな兄ちゃん。もっと近くに来いよ。

少女コミュ中……

成功しました！ これで橋本君はれずちゃんの忠実な手駒です。

彼は適当なうまあじと、れずちゃんの強さを定期的に見せてあげたら決して裏切らない有能な駒です。

早速、第一のうまあじを差し上げましょう。

欲しいのか？ 欲しけりゃくれてやるよ。

橋本君に与えたのは中間試験2週間前にテスト範囲が変更されることと、過去問の情報ですね。みんな大好き学くんからしっかりと聞いた情報です。

学力A+で、クラスの誰ともツルんでいない様子のれずちゃんからしたら、そんな情報に大した価値はないだろうと判断して学くんは簡単に話してくれました。

5月もまだ始まったばかり。

この段階でいきなり試験範囲の変更だの過去問だのに思い至る人間は作中に居ません。

なので、れずちゃんにはその2つの情報は不要ですが、橋本君に

とってこれは非常に有用なうまあじ情報なんですよね。

下に付くと言った瞬間、いきなりの重大情報に橋本君は一瞬ビビっていましたが、れずちゃんに付いた判断の正しき、得たうまあじにご満悦なようです。一応、情報の裏取りはしつかり行っておくようにと命令して、橋本君とのコミユを終えました。

今橋本君にしてもらうことはありませんが、今後は馬車馬のように働いてもらいますので、コンゴトモヨロシク……。

橋本君を手駒にしたところで、自由行動パートです。

引き続き、綾小路君を墮としにかかりましょう。

DクラスもAクラス同様に中間対策の勉強会を行ったりするので、4月に好感度を上げまくった綾小路君は極力れずちゃんを優先してくれるので、お誘いが断られることは依然ありません。

少女自由行動中……

おや、綾小路君からのメールに変化がありますね。
なにになに……？

『生徒会長とクラスメイトから聞いたんだが、怜山って凄いな。全国模試一位でTVに出たこともあるんだって？』

ああ、これは学力A+の時限定で来るメールですね。

綾小路君が生徒会長の学くんとドンパチ盛りあって認められる。で、その時に生徒会長が1年生で綾小路君以外のおもしれー奴としてれずちゃんの名前を出すのですが、その時学力のステがA+だところな内容になります。

入学時のステA+は、坂柳さんを含めた天才を超えた人外の領域。そしてれずちゃん含めクリエイトキャラは得能：『ホワイトルーム出身』のようなものが無い限りは一般家庭出身なので、ホワイトルームのように隔離されてはいない。当然、模試を受けることになる。その結果、学力的に全国的な有名人となるのです。

適当に返信したところ、続きが来ました。

『オレと怜山が仲が良いということを知ったクラスメイトに、オレたちDクラスの勉強会に協力してもらえないか聞け、と言われたんだが、どうだ？ 無理ならいいんだが』

あーこれは……迷いますねえ。

これは、乱数次第で発生するランダムイベントです。ランダムイベは全スキップと言いたいところですが、そんなので難攻不落の綾小路君を墮とす事は出来ません。うまあじなイベントは適宜こなす必要があります。それを踏まえたチャート構築とリセマラキヤラクリをしているため、大体は問題無いです。橋本君も、ランダムイベに対する対応力を高めるためこの速さで手駒に加えた、という経緯があります。

綾小路君から依頼されることもあれば、学くんに生徒会関連の依頼をされる事があったり色々あるのですが、今回はDクラスの勉強会への手助け、ですか……。

これを受ける事によって得られるメリットは山ほどあります。

1つは、当然依頼を受ける事による綾小路君の好感度の上昇と、機械度の減少。そして必須ですがなかなか上げ難い依存度を上げることができること（1つとは言っていない）。本チャートではただ綾小路君と恋愛したいのではなく、れずちゃんにドロドロに依存させて忠実過ぎる駒にする必要があるのです、これはかなり大きいです。

次に、須藤君の成績を上げる事で中間後の綾小路君、茶柱先生、堀北さんの点数買い取りイベントを発生させなくし、綾小路君の機械度上昇を防ぐこと。

うーん、これはかなりでかい、デカ過ぎるメリットですが、その分デメリットもあるんですよ……

例えば、今までココソソしていた綾小路君とれずちゃんの関係が大っぴらなものになるとかですね。最初に言ったように、それが坂柳さんにばれるとロスイベントが発生します。

他にもあるんですが……ま、えやろ！

先程言ったように、このイベントのデメリットにもちゃんと対策があります。あらゆる状況を想定した完璧なチャートを組んでいるのでね（自画自賛）。早速橋本君に少し働いてもらって、デメリットの低減に役立って貰いましょう。さっきは何もしてもらおう事はないと言ったな？ あれは嘘だ。

メリットがデカ過ぎんだろ……（屈服）。

綾小路君に了承のメールと、橋本君に指令のメールを送ったところで、今回はここまでです。

ではまた次回、サラダバー！

2―裏

綾小路清隆の記憶

どうやら、よくわからないが好印象を与えたいらしい(?)とは思っていた。

だがまさか、ここまで怜山と関わる事になる……どころか、オレの高校生活の中心に怜山静香という少女が立つことになるとは思っていなかった。もちろん、嬉しい誤算ということではあるが。

オレたちは入学日から毎日夜に1通メールのやり取りをしている。最初は怜山からメールが来たが、2回目からはオレからも送るようになった。異性にメールを送るなんて当然の事ながら初めての経験で、高校生活とはこんなに目まぐるしいものなのか、と嬉しいことながらも少々の戦慄もしている。

入学前からこの高校に入ったら友達ができるのでは、とワクワクしていたが、まさか早々にあんな美少女とここまで仲良くなれるとは思っていなかった。常時無表情なのが少し気にはなるが、だとしても、不自然なくらい美人揃いのDクラスの誰よりも明確に可愛い美少女だ。男としてこれ以上無いほど喜ばしいことだろう。

メールの内容としては、大体その日あった出来事の報告だ。例を挙げると、

『今日は池や山内、須藤と仲良くなる事が出来た。これが青春、ってやつか』

『そう。私はいつも通り。強いて言えば生徒会に勧誘されたくらい。断ったけど』

という感じだ。

正直かなり気になる内容だった。部活紹介の時の、堀北の生徒会長に対する反応は記憶に新しいしな。

だが、ルールとして決めたわけでは無いものの、オレたちは基本的に何かしらの用事がある時以外は1日1通、夜にしかメールのやり取りをしないため、質問があれば後日に持ち越しとなる。

この間隔は、マメな連絡を面倒と思うオレからすると非常に好ましい。

オレと怜山はやはり気が合うのだろう。

やり取りを初めて数日。

怜山から驚くべき内容のメールが来た。それは

『明日、良ければ一緒に昼食を取りましょう。綾小路君のお弁当も作ってくる』

何かの間違いかと思って二度見した。

いや、だって女子からのお昼の誘い、しかも手料理弁当だぞ??
というか弁当派だったんだな。

しかも自炊。正直言って意外だ。

何というか、怜山は言葉も異様に短いし、メールも簡潔。

だから、わざわざ手間をかけて自炊などせず、もつと効率を求める人間だと思っていたからな。

勿論、提案そのものはめっちゃ嬉しい。言うまでもない当たり前過ぎる事だ。だがオレ、そこまで怜山にしてもらうようなこと何かしたか？ 全く記憶にないんだが。

まだ会ってから数日。

しかも、メールはともかく、直接会って会話したのは初日の物凄く短いあの内容のみ。

今時の高校生はみんなこうなのか？

何というか、進んでいるな……

と、内心少し戦慄しながらも、ありがた過ぎる話であるのは間違いない、当然断る筈は無いための承のメールを送る。

『ああ、わかった。ありがとう。怜山の料理、楽しみだ。食べる場所はどこにする？』

こんな所でいいだろうか？ せっかく弁当を作って貰えるんだから、もつと嬉しさを全面に押し出す文章の方が良かっただろうか？ いや、しかしあまりがつつき過ぎるのも良くないだろうし……

なんて考えて悶々としていたら、直ぐに返信が来た。

『良かった。場所は○○。現地集合で。私も楽しみにしている。おやすみなさい』

なんとというか、相変わらず簡潔すぎる内容。

だが、怜山も明日を楽しみにしてくれているらしいし、オレのメールはあれで正解だったようだ。

オレは思わずウズウズして、怜山はどんな弁当を作ってくるのだろうか、あの無表情でタコさんウインナーとかを作ったりするのだろうか

か。と、明日の事を色々妄想しながら眠りについた。

当日の昼休憩時間。オレは怜山の指定の場所に着いた。どうやら怜山はまだ来ていないらしい。

つい、急ぎ過ぎてしまったな。

まあ、それも当たり前過ぎる事だ。

正直言つて今日一日は昼の事しか考えてなかった。

隣の席の堀北の罵倒も一切気にならない。堀北には怪訝な顔で見られたが、そんなことはどうでもいいことだ。

そんな感じでウキウキしながら待つこと数分、オレの所に弁当箱を持った黒髪長髪の美少女……怜山がやってきた。

こうして見ると本当に美人だよな。Dクラスで最も容姿に優れた堀北のそれも相当なものだと思うが、怜山は明らかにその上を行っている。

こんな美少女の手作り弁当を今から食べるのか……。

オレは内心の動揺を出来るだけ隠してから、怜山に話しかけた。

当然、バレたら恥ずかしいからに決まっている。そんな情けない姿を見せてしまったら、無いとは思いたい。が弁当を没収されるかもしれないしな。

「怜山、久しぶり……って程じゃないな。数日ぶり」

「ええ。こんにちは」

初日と同じく全くの無表情でそう言った直後に、怜山はオレの隣に座り、早速バッグから弁当を取り出す動作を始めた。

バスでも感じた柑橘系のとても良い匂いがオレの鼻腔をくすぐる。

女子は良い匂いがするって本当なんだな……

オレは、絶対に怜山に悟られてはならないような事を内心で考えていた。

「今日は弁当を作ってきてくれてありがとう」

考えながらも、まずは感謝の言葉を言わなければならないと思い、そう口にする。人として当然のことだろう。

「ん」

怜山は弁当を取り出しながら非常に短い返事をした。

いや、『ん』って。

一言どころか一文字なんだが。

オレの言葉に気を悪くしたわけではない……と思う。多分。いつも通り、って言う程長い付き合いではない……どころかまだ会うのは2回目だが、なんとなくそんな気がする。

しかし本当に言葉が短いな、怜山は。入学初日は、今時の女子高生はみんなそうなのかと思いかけた。だが、Dクラスの女子を見る限りどうやら違ってみたいだし、彼女がきつと特別言葉が短いだけなのだろう。

軽井沢グループ辺りはむしろかなり騒がしいしな……絶対あいつらと怜山は相性悪いだろうな。

そんな事を考えていると、怜山が準備を終えて弁当箱を開いた。

「おお……」

オレは思わず感嘆の声を上げていた。
色取り取りの弁当。

鶏の照り焼きに、にんじんナムル、大根の漬物……などなど。
非常に豊かな献立だった。

オレの知識によると、全体的に保存が効く食べ物が多い気がする。
これ全部自分で作ったのか？

だとすると、怜山は相当な料理上手だと思っただが。普通の女子高生は多分こんな料理は出来ないぞ。少なくとも、Dクラスの女子にこのレベルの弁当を作れる人間が複数人居るとは考えにくい。

弁当を眺めながらそんな事をオレが考えていると、

「食べて良いよ」

なんて怜山に無表情で言われた。

……物欲しげに見えたのだろうか。まあ、あれだけ見てればそう思うだろうな。厳然たる事実だし。

怜山の前で恥ずかしいことをしてしまったな……。

オレは内心で先までの自分を恥ずかしがりながらも、目の前のご馳走を頂くことにした。

そして……

「う、美味しいな……正直言って驚いた」

弁当は見た目通りめっちゃくちゃ美味しかった。

ただ栄養素を摂取する為だけの無味無臭なものではなく、それぞれ

の品が適度に味付けされた料理。

何というか、意外だった。いや、別に怜山は料理が下手そうってわけじゃないんだが、ここまで上手とも思ってたから。

「そう。良かった」

怜山はそれだけ言って、自分も昼食を取り始めた。

「怜山は、どうして料理を？」

食べ始めて暫く経ってから、オレは気になった事を怜山に質問した。

さつきも同じ事を考えたが、実際、かなり意外だから。

ついさつきまで、怜山は、なんといかもつと効率重視で、料理なんかしないでその辺の惣菜で簡単に済ます、みたいなイメージがあった。

すると、いつもの無表情のまま、怜山は話し始めた。

「昔、家の近くにパン屋さんがあった」

「パン屋さんの横を通ると、パンを焼く匂いがする」

「その匂いを嗅ぐと、悪く無い気分になった」

その話をする怜山は、相変わらず言葉も短いいつもの無表情ではあったが、よくよく見てみるとほんの少しだけ、何かを懐かしむような顔をしていて。

「パン、好きなのか？」

「いえ、別に」

「そ、そうか」

いや、そこは違うんかい。

オレは思わず内心でツツコミを入れていた。
直接言えはしないが。

「ただ、気付いたら料理が私の趣味になっていた」

「料理をしていると、あの時のように……悪く無い気分になる」

「だから、あなたにも私の料理を食べて貰いたいと思った」

「? どうしてだ?」

オレは思わず怜山にそう聞いてしまう。

どうしてそれがオレに繋がるのかわからなかったから。
すると、

「友達とは、良い物を共有するものでしょう?」

初日と同じように、一見無表情に見える。

が、ほんの少しだけ微笑を浮かべ、怜山はオレにそう言った。

それから、たまにオレたちは怜山が作ってきた手作り弁当と一緒に
食べている。頻度としては、週に2回程か。

オレとしては毎日でも一向に構わない……どころか、むしろ望ましい
のだが、それは流石に弁当を作る側の怜山に悪いからな。
それくらいの分別はある。

そして、週末。

初めての週末に差し掛かる前、オレは怜山と休日に遊びに行きたくてウズウズしていた。

だが、どうしてもオレから誘う勇気が出ない。

もし断られてしまったら、オレの心はぼつきりと折れてしまうに違いない。いや、何よりもあの昼食の時間すら失われかねないからだ。

そうして何時間もベッドの上で悶々としていたところに、

『明日、良ければ遊びに行かない？』

なんてメールが来た瞬間。

オレは即座に。もう一瞬で。

持てる能力全てを全力で発揮して最速で返事をした。

『もちろん大丈夫だ』

と。

そんな感じで、オレは休日も怜山と一緒に過ごした。

様々な娯楽施設に行った。怜山は誰が見ても予想出来る通り人混みが嫌いらしく（むしろあの感じで賑やかな場所が好きとか言われたらビビる自信がある）、カラオケの個室など、他人の目に入らない場所を好む傾向にあった。それもオレと同じだな。

怜山と過ごすこの1ヶ月は、今までのオレの人生で、間違いなく最高に楽しかった1ヶ月だと断言できる。

あの場所を抜け出して来て正解だった。

これからも、オレはきつとこの常時無表情で、たまにオレにしかならないくらいに微細に表情を変える少女と一緒に高校生活を謳歌するのだろうか、と確信していた。

5月1日。

この日は激動の1日だったと言っていていいだろう。

クラスポイントによってクラス間の優劣が決まるSシステムの発覚。

振り込まれたポイントが0。

Dクラスは不良品の集まり。

試験での赤点は即退学。

そして、終いにはオレを唐突に職員室に呼んだ茶柱によって、堀北と茶柱の会話を聞かされ、堀北への協力を半ば強制される羽目となった。

堀北への協力は、事なかれ主義のオレにとってはあまり望ましい出来事では無いが、まあ仕方ない……というよりもどうでもいい。

何故なら、そんな事よりもオレにとっては余程重要なことがあるからだ。

クラス間闘争……その言葉を聞いた瞬間にまずオレが考えたのは、怜山との関係のこと。

確かに堀北に手を貸す事にはした。が、一旦今日は帰らせろと言って、オレは即座に寮へと戻った。

堀北がオレの背を見ているのを感じたが、そんなことはどうでも良かった。

何よりもまず、確認すべき必須事項があるのだから。

寮に戻り、オレは悩んだ。

今までの人生で屈指の悩み、と言っただろう。

そしてオレは

『これからクラス間で競争していくわけだが、これからも怜山と仲良くしてもいいか?』

と怜山へメールを送った。

内心オレは恐れていた。

文面もめちやくちやになっていたと、後になって見返した時に思った。

もし。いや有り得ないとは思うが、もし、怜山がクラス間闘争を理由にオレと距離を置くなんてことがあれば……

そんなことを考えていると、すぐに怜山から、

『クラス間闘争なんて私たちの間には関係ないこと』

と返信が来た。

オレは思わず胸が熱くなるのを感じた。

確かにその通りだ。

オレと怜山は友達……いや、もうただの友達などではない。親友だ。

まるで幼い頃からこうやって連絡を取り合ったり、休日に遊びに行っているような気さえする。

存在しない記憶が溢れ出る……初めて出会ったあの思い出の公園。あの頃のまだ幼いオレたちは沢山遊び、喧嘩もしたりもしたよな。楽しかった……。

オレは3時間程美しい記憶を思い返しながら浸っていた。

いや、時が許す限りもっと浸りたい。

この時間が永遠に続くというのなら、それは本望だ。

だが、親友……オレたちの関係を自分の中でそう定義した時、オレの胸に何やら小さな痛みのような物が走った。

この痛み。

その名称は、知識としてはある。だが、よりによってこのオレが。いくらなんでもそんな感情を抱くとは思えない。だから、きつと気の所為なのだろう。

オレは、今までの人生で圧倒的に一番の喜びと、しばらく続く少しの胸の痛みと共に就寝した。

どんどん奇行が目立って来るRTA、はーじまーるよー

今回は、綾小路君に頼まれてDクラスの勉強会への参加を決めたところでしたね。

今回参加するDクラスの勉強会は、平田君率いる大多数が居る方ではなく、堀北さん主導のどうしようもない馬鹿3人を介護する方の勉強会です。

色々文句を言いつつも、結局はクラスのためにわざわざドロップアウトボーイ共を救済しようとする勉強会の手間暇をかけ、更にわざわざ部活を考慮した行動予定表まで組んであげる……こいつ本当に協調性最低値か??

仮に本当に協調性がゴミクズ(特に問題は起こさないし授業は真面目に受けるし行事にも普通に参加する)だとして、他ステはトップレベル。対してCクラスの暴力ヤンキー共はC。犯罪者(学校側も勘付いている)の一之瀬さんはB。行事に影響したり他者からの介護を必要としたりするレベルで身体能力ゴミカス論外の坂柳さん(かわい)は普通にAクラス。これもうわかんねえな?

これ以上、協調性とかいう謎概念について話しても仕方ないので解説に戻ります。

平穏な生活のために力を隠すことに拘りを持つ綾小路君の代わりに、れずちゃんも堀北さんと一緒に講師役として3バカを見てあげます。

秘密は誰にも知られていないからこそ意味があるのであって、正直排除しようが無い茶柱先生(ついでに堀北さんや学くんやれずちゃん)に知られている以上、もうさっさと力を開示した方がいちいち気を揉まなくて済みますし色々やり易いと思うんですが、そこは私のような凡人には思い付かない何かがあるのでしょうか。

れずちゃんとかいうクツソ目立つ怪物美少女と一緒に居る以上、目立たないなんてもう相当な注意を払わなければ無理なのに。それにも気付かない、あるいは気付いたとしてもどうでも良いと見做すくらいに綾小路君は籠絡されています（順調）。

それはともかく、れずちゃんが依頼を受けてくれて嬉しそうにする綾小路君以外の、まさか本当にれずちゃんが来るなんて全く思っていなかった堀北さんや3バカ、ついでに3バカを呼ぶための餌として居る、本RTAで一切関わる気の無かった榊田さんが非常に驚いた顔をしています。

何でお前ここに居るのかって？ 私にもわかりません（すつとぼけ）。

綾小路君に頼まれたからに決まってるんだルルオ!?

榊田さんとの関わりを持ってしまったのですが、まあこのくらいであれば大丈夫です。れずちゃんのこれまでの綾小路君ストーリーカー行為によって榊田乳揉みイベントはもうブロックする流れが完成していますし、れずちゃんとの頭脳関連のステが一定以上であれば、必要以上にならなければかけたりしない限り榊田さんはあまり自分から積極的に関わろうとしないので。

見透かされるのが嫌なんです。プライド高い女の子は好きだよ（大胆な告白）。

早速3バカに知識をぶち込んでやりましょう。

ここではまだ試験範囲の変更や過去問については知らせません。そもそもまだ試験まで約3週間あるので、Aクラスにも範囲変更は知らされていませんね。知っているのは橋本君だけです。

範囲変更が知らされるのは試験の約2週間前、Dクラスがそれを知るのが試験の約1週間前となります。

感受性―で他人の気持ちがあまりわからないれずちゃんですが、知

能と判断力はぶつちぎりで高いので、3バカのわからない場所、その理由、解決法、指導法を瞬時に分析し、とてもわかりやすく効果的な指導を行うことができます。

ほら、遠慮するなよ。

指導完了です……

3バカは堀北さん以上の超絶美少女であるれずちゃんにわかりやすく教えて貰えて嬉しそうにしています。れずちゃんはいつも通り無表情ですが、丁寧で的確な指導ではありませんしね。

堀北さんは自分とれずちゃんの差に悔しそうにしていますね。櫛田さんもニコニコした笑顔の内側は絶対に勝てない才能への嫉妬でドロドロでしょう。2人ともかわいいなあ、好き（ハート）。

綾小路君、れずちゃんのことしつかり分析出来たかー？

れずちゃんの知能と判断力を活かした授業の評判が良かったため、また来てくれないかと言われました。

あまり頻繁に行つてもうま味が少なく、ロスになるので試験直前になったら3バカの介護にもう一度行くと約束して帰りましょう。

こうする事で、Cクラスのヤンキーと盛り合うと同時に試験範囲の変更がDクラスだけ知らされていないと判明するあのクソ長いイベントに巻き込まれたり、一之瀬さんに絡まれたり（意味深）する大幅ロスを避けるようにします。

明日れずちゃん無しで勉強会をして、堀北さんが須藤君に胸倉を掴まれる例のあのイベントが発生するのが楽しみですね。

れずちゃんが上手く3バカを指導出来たという事実を真横で見ていた堀北さんは、自分の失言や態度等について原作以上に深く反省するわけです（実際、あのイベントで誰が一番悪いかと言うと、学生の

本分を投げ捨てて連立方程式すらわからないレベルのせいでクラスに迷惑をかける自分のために勉強会を開いてもらっているのに、集中力0で堀北さんを苛立たせた須藤君なんですけど。

毎度の事ながら、相手側の問題ガン無視で自分の非だけやたら強調され、明らかに理不尽に責められて素直に反省する堀北さんかわいい……かわいくない？

まあ、我らがれずちゃんはその頃当然のように自室で寝ているわけですけどね。

櫛田さんにみんなで食事しないかと誘われましたが、当然断って即帰宅です。あたりまえだよなあ。

食事会にれずちゃんが参加しないなら、と綾小路君も帰るようですね。

原作と違ってれずちゃんがいる以上、綾小路君は櫛田さんにあまりデレデレしていないようです。いい傾向であるな。

堀北さんに怪訝な顔で見つめられながら綾小路君と一緒に帰りましょう。もうれずちゃんと綾小路君の関係は大っぴらなものとなったため、気にする必要はありません。

これで、前回言ったように綾小路君の好感度上昇、機械度減少、依存度上昇と、中間試験後の点数買い取りイベントのブロックによる機械度上昇を防ぐ事が確定しましたね。

ついでに、デート資金となる綾小路君のPP節約も出来ます。

まあ資金については、足りなくなったら綾小路君がどこから勝手に調達してくるので誤差なんですけどね。

資金抜きにしても一石四鳥。

うん、美味しい！

では、また自由行動パートを消費していきましよう。

引き続き、綾小路君とのデートと櫛田ブロックですね。

綾小路君との関係が大っぴらになったとはいえ、まだ食堂に行ったりなどはしません。休日デートも引き続き場所を選ぶ必要があります。その理由は後述します。

本来、明日の須藤君の胸倉イベントの直後に櫛田乳揉みイベントは発生することが多いのですが、勉強会が崩壊したくらいのタイミングで綾小路君にメールを送る事で、大分籠絡されて来た綾小路君はすっかりウキウキになって寮に直帰してくれるために櫛田乳揉みイベントは発生しません。

なんて完璧なチャートだあ……（絶頂）。

少女自由行動中……

等速に戻りました。

放課後、れずちゃんやんが教室でいい漢の葛城くん絡まれている（ウホッ）様子が映されています。

来ましたね。前回言ったランダムイベントのデメリット消化です。

なにになに……？

どうしてAクラスの会議や勉強会には一切参加しないのに、敵であ

るDクラスの勉強会には参加するんだって？

完全なる正論で草。

このように、Aクラスの会議や勉強会を全てボイコットした上で先程のランダムイベントに参加すると、何で自クラスじゃなくてDクラスの勉強会に協力してるの？ という当然の疑問がクラスメイトに発生し、彼らからの好感度が著しく減少してしまいました。

いつも言っているように、モブの好感度はどうでもいいですし、既に手駒となった橋本君からの好感度は変わりません。

が、葛城君や神室さんといったネームドキャラの好感度をあまりに下げすぎてしまうのはよろしくありません。

彼らには何かあつた時のリカバリー策として、れずちゃん第二第三の駒となつてもらおうチャートも組んでいるので、普段の会議ボイコット以外の要因であまり好感度を下げたく無いんですね。

まあ最悪、これは放置してもどうにかなるっちなやります。そもそもリカバリー策を採用するような状況を作らなければいいだけですからね！ 走者の腕の見せどころさんです。

とはいえ勿論、これには対策がちゃんとあります。

橋本君、例のブツをお出しなさい。

出て来たのは去年、一昨年、一昨々年の合計3年分の中間試験の過去問ですね。

橋本君は有能なので、情報を与えさえすれば直ぐに3年分の過去問を集めて来ます。

ほら、見ろよ見ろよ。

いい漢が3年全て同じ問題だということに気付いて驚いていますね。他クラスメイトも同様に。教室がとてもざわついています。

ん？ よく見ると範囲が少し違う？ あと少し待ってみな！

過去問をDクラスに見せたりなんかしてないから安心しろよ

当然、いくら過去問があるからといって自クラスの会議や勉強会をボイコットしながら他クラスの勉強会に参加するという、利敵行為にしか見えないれずちゃんの行動は正当性に欠けます。

なのでいい漢は未だに少し苦い顔をしています。圧倒的な結果を示されてしぶしぶ去っていきます。

世の中、過程で何をしようが結果が全てなのでね。未だ特に何も出来ていない今のいい漢がれずちゃんに何か言っても説得力が皆無なのです。

これで、クラスメイトからの好感度減少は微々たるもの。むしろ有用な過去問の取得や、れずちゃんはいいい漢よりも明確に格上なんだという実力を示すことが出来て、一部生徒からはプラスにすらなっています。

マイナスをプラスに転換する。所要時間も非常に少ない。

やっぱり完璧なチャートだあ……（絶頂）

早速、橋本君が過去問を使って他陣営からPPを得るための交渉をしていますね。当然の権利なので好きにして、どうぞ。

おや、まだ等速が解除されませんね。

次にれずちゃんに絡んで来たのは……来ました。我らが好戦的銀髪美ロリ、坂柳さんです。

なになに……？

仲良くしてるのか……？ 私以外の奴と……

ヒエツ、これはヤンレズ（恐怖）。

坂柳さんがクレイジーサイコレズと化してますね……

一体何があつたのでしょうか？

冗談は置いておいて、解説に戻りましょう。

これは頭脳関連のステが坂柳さんを超えていて、なおかつ今まで坂柳さん主催の会議等は一切参加していないのに、他の誰かと頻繁にコミュを取っていることがバレると起こる（怒る）現象です。

自分に一切構っていない癖に、一体誰と遊んでるんじゃない！ ってことですね。

一見ガバに見えるでしょ？

そうでもないんだなくこれが（ニチャア……）

この反応ということ、まだ坂柳さんは我らが綾小路君と直接ご対面はしていないみたいですね。

その場合は他の手段でも彼女の怒りを鎮めることが出来たのですが、まあ構いません。

最悪なのは、れずちゃんと綾小路君と一緒に居る時にこの状態の坂柳さんに食堂辺りで出くわすことなので、それさえ注意していれば口スは最小限に抑えられます。

怒り心頭の銀髪ロリを見て、

やべえよやべえよ……どうやってコレ解決すんの？

とお思いかもしれません。でも奥様、ご安心ください！ 答えは坂柳さんのセリフにあります。

要は、坂柳さんとれずちゃんが少し遊んでやれば（意味深）いいのです。

橋本君、例のブツをお出しなさい（天井）。

出て来たのは、チェス盤です。

前回の橋本君への指示はこの為のものですね。

過去問はまあ放っておいても手に入れてくれますが、流石にチェス盤なんて指示無しで持つてる筈が無いので。

れずちゃんがこれを買うに行く、あるいは借りに行くなんてロス行動は当然する筈がありません。

橋本君、コレカラモヨロシク。

早速これを使って、坂柳さんといつちよ遊んであげましょう。

どこでやるの？　ここでしょ！

はい。当然教室で、つまりクラスメイト全員の前でやります。

場所移動なんてロスなんでね。

それにこのイベント、実はクラスメイトにれずちゃんの实力を見せ付ける事でこれからのれずちゃんの奇行を許容してもらおう、という役割があります。

そのため、坂柳さんをクラス全員の前でボコボコにするのは、遅かれ早かれやっていたことです。

なのでこの一連の流れは全然ガバではないんですよ。

綾小路君と一緒に居る場面を目撃されさえしなければ、そして5月以降で橋本君を手駒にした後であれば、こんな風にリカバリーは容易なのです。

ガバかと思ったかあ？　その気になっていたお前の姿はお笑いだったぜ！　（PRGS並感）。

坂柳さんとのチェス勝負ですが、楽なのは極上れずちゃんに全てを任せるオートプレイです。れずちゃんのリセマラスペックがあれば何の問題も無く勝つ事が出来ます。

が、最速決着を狙うなら走者の手動の方がいいです。

え、そんなこととして大丈夫？　あの坂柳さんだよ？　とお思いかも知れませんが、ゲームのバランス上、序盤のこのタイミングでの坂柳

さんとのチェス勝負は難易度がかなり低く設定されているんですね。

そのため、私は坂柳さんとの序盤でのチェス勝負を試走で何度も何度も練習し、今となつてはもうノータイムで指すことが出来る様になりました。

原作のような天才坂柳さんとチェスで盛り合いたい方は是非プレイして、3年目の後半に挑んでみてください。

その場合、頭脳ステを鍛えまくったキャラのオートじゃないとまず勝てないので（絶望）。

少女チェス中……

はい、勝利しました。

練習を重ねた今の私がガバる筈がありません（1敗）。

これで坂柳さんは満足してくれましたし、全員の目の前で葛城君が凹まされ、坂柳さんが叩き潰される姿を立て続けに見たクラスメイトは、今後れずちゃんの行動にほとんど口を出さなくなります。

みんなビビってるうゝ（煽り）

そんなクラスメイトを十分眺めて満足した後は、また自由行動ですね。相も変わらず、綾小路君とのコミュ以外はスキップ連打です。

少女自由行動中……

中間試験直前となりました。

約束していた3バカの介護にまた向かいましょう。

試験直前で、Dクラスが過去問を入手した以上もうれずちゃんはお役御免かと思いきや、彼らは範囲変更の伝達や過去問入手が遅かったり、須藤君たちかられずちゃんの評判が最高レベルだったりしたため、わからない場所の解説を的確にしてもらったり、モチベを上げたりするために招集されます。

お、綾小路君がれずちゃんを見て非常に嬉しそうにしていますね。

もう5月も終盤。

この時期になると、彼はもうほとんどれずちゃんにメロメロになっているはず。逆に、そうなっていないければリセなんです。

それに、いくら既にメロメロとはいえ、本チャートでは綾小路君とれずちゃんをただ恋愛させるだけでは駄目なので、もう少し色々する必要があるのですけどね。

堀北さんが、もう試験直前だし、れずちゃん自身には過去問など何の意味も無いとはいえ、一応工夫して過去問を使っているという事実をれずちゃんから隠そうとしてきます。

普通に問題を解いているように見せかけて来るんですね。過去問は少なくとも2年分は無いと全一致には気付けない筈なので、この策は本来なら普通に有効なものです。

ですが当然れずちゃんにはバレバレですし、綾小路君もそれを理解して内心で苦笑しています。ここは武士の情けで（ロスを防ぐため）知らないふりをしてあげましょう。

れずちゃんにメロメロな綾小路君は、既にれずちゃんがクラスに過去問を配った（実際に配ったのは橋本君）ことを知っています。ここで堀北さんにそれを言うのはマイナスと判断して伝えていません。せつかく過去問に希望を見出した堀北さんに、れずちゃんとの格の違いを知らせることで、必要以上に打ちのめしても仕方ないですからね。

少女指導中……

指導完了です……

最初と同じように3バカは非常に満足した顔をしています。須藤君が原作のように1点だけ足りずに赤点になることは最早無いでしょう。

この時期だと堀北さんも自分の態度や発言を反省したり、トラブルに見舞われるも過去問に希望を見出したりしたためか、れずちゃんへの嫉妬より3バカがちゃんと勉強していることへの安堵の方が大きいようです。これが成長系ヒロインというやつですね。かわいい。

櫛田さん？ 何一つとして変わっていません。かわいい。

中間試験そのものは、例によってスキップです。れずちゃんは問題無く満点を取り、経験点もばっちりです。

これで、ランダムイベント関連の全部と、5月の行動は終わりですね。

くうく疲れしました（まだ2ヶ月／36ヶ月）。

ではまた次回、サラバダー!!

3―裏

橋本正義の戦慄

俺は自分の事を良くわかっていて、反して大抵の人間は自分の事を良くわかっていない。

まあ、当たり前前の事だ。

誰だって、内心では自分を特別な何かだと思っているし、俺にだってそう思いたいという気持ちはわかる。

だが、実際は違うのだ。

世の中には、強い奴と弱い奴が明確に存在していて、そして俺を含めて大抵の人間は弱い奴の分類に入っている。

そんな弱い奴に出来る事はただ一つ。

実際に存在している強い奴ら。その中でも一番の奴に付き、勝者の立ち位置を確保する事。

それが出来ない奴から落ちていく。たまたま、運で強い奴に付く事が出来て、運良く生き残る奴も居るには居るが、俺はそんな運否天賦に身を任せるつもりは無い。俺は自らの意思で強い奴を見出す。

無論、強者とは常に移り変わるもの。だからこそ、俺は沢山のツテを作る事で、いつでも付く先を乗り換える事が出来る様にしている。

こうする事で、俺はずっと勝ち続けてきた。

それこそが俺の強みであり、だからこそ今までも、そしてこれからも正しい立ち回りをしていくことが出来る。

誰がリーダーなのかという拘りなど一切ない。

そいつに付けば自分に利があるのか、勝者になれるのか。

それが判断基準。俺にとって大事なことは、最後に勝つ事のできるポジションを取り続けることだ。

東京都高度育成高等学校。

進学率、就職率100%の触れ込みに惹かれて入学したが、5月になって、その恩恵を受ける事が出来るのはAクラスで卒業した生徒のみと判明した。

つまり、これからはクラス間闘争が始まる、ということだ。

集団闘争には、何よりもまずリーダーが要る。

俺の所属するAクラスにおいて、学校のルールを聞いてから直ぐにその立ち位置に名乗り出た人物が2人居た。

一方の名は葛城康平、もう片方は坂柳有栖。

どちらも非常に優秀で、文句無しに強い奴に分類される人間だ。

葛城の方は非常に固い頭をしているものの誠実な人格による人望と、堅実な策を立て、それを実行するだけの能力を持っている。

要は攻めよりも守りを重視するスタンスってことだ。

対して坂柳の方は、その圧倒的な才能と、リスクをある程度支払ってでもいいからひたすら攻めのスタンスを取るとい印象がある。

両方とも決して悪くは無いが、2人の内どちらかを選べと言われたら、より優秀な……いや、俺がこの高校に入るまで見た事がないくらい優秀であり、所謂天才と呼ばれるような実力を持っている坂柳……姫さまの方を選ぶだろう。

実際に、姫さまの方はいち早くSシステムに勘付いていたらしく、4月の段階で既に俺たちに授業態度を良くした方がいいなどのアドバイスをそれなりの頻度で行われる放課後会議でしていた。

それによつて、俺たちは965ポイントという、全クラスの中でダントツで高いCPを得る事が出来た。

その実績から、現時点での支持者の数としては葛城よりも姫さまの方が若干多いように感じる。

実際、俺から見ても姫さまは下に付く相手としては実に申し分ないように映るしな。

だが、俺は葛城どころか、天才である姫さますら選ばなかった。

このクラスには、2人より明らかにもつと強い奴が居たからだ。

そいつの名前は怜山静香。

俺たちの世代で最も学力の高い人間として、中学の頃から有名だった人物だ。

そいつはどう見ても異常だった。

4月にあった姫さま主催の会議に一切参加せず。

5月になつてSシステムが判明してからも、葛城も姫さまも全く眼中に無いと言わんばかりに放課後になつた途端即帰宅する。

普通の人間は、周囲に合わせようという同調の意識が多かれ少なかれ存在する。それは人間社会において、自らが生き残るための手段だ。

だが、そいつにそんな意識は一切存在しない。

自分1人の力で全てをこなせるから、そんなもの一切必要ない、と言わんばかりの行動。そしてそれが許される圧倒的な能力。

実際、俺の作ったツテから聞いた話によると、入試で全科目満点

だったら嬉しいし、4月末の小テストも当然のように1人だけ満点。生徒会長に目を付けられて、葛城や一之瀬が落とされた生徒会に勧誘されているとの噂も耳にした。

何よりも、何が起きようが、Sシステムの詳細が判明した時ですら、全て分かりきった事と言わんばかりに一切表情を変えないそいつから漂う圧倒的な風格。

俺には、他の奴よりも強者を的確に嗅ぎ分ける嗅覚がある。

その嗅覚が言っている。

姫さまが天才だとしたら、そいつはまさに怪物、という言葉が相応しい存在だと。

だから俺は、

「なあ、怜山サン」

「……………」

話しかけて来た俺にそいつは一言も発さずに視線だけを向けてくる。

これは賭けだ。一世一代の賭け。

手に汗が滲み、背中にほんのりと冷たいものが染みる。

俺は今までの人生で一番緊張していた。

「今、葛城くんと坂柳がクラスのリーダー争いをしてるってのは知ってるよな?」

「……………」

相変わらず言葉は発しなかったが、頷いていた。

一応、話を聞いてはいると理解したため続ける。

「俺は、あの2人じゃなくてあんたの下に付きたい。だって、このクラスで一番強いのはあの2人のどちらかじゃなくてあんただろ？」

「……あなたを下に付ける利点は？」

当たり前前の質問。

こう返ってくるということは、少なくとも一切取り合わずに断る、なんてことは無いことを意味している。

いやむしろ、この質問ということは、割と前向きに考えてすらいるんじゃないか？　いくらこいつでも使える駒は必要と思っていたか？

俺は高揚を隠せなかった。

もちろん、その質問に対する回答は用意している。

「いくらあんたが強いからって、物理的に手はあつた方がいいだろ？　その分、俺は沢山のツテを作ったからその辺の奴よりは役に立てると思うぜ」

俺はボールを投げた。

実際、あんたにとつても有用な話の筈だ。さあ、どうする？

そいつが思考に割いた時間は一瞬。だが、俺にはその一瞬がとても長い物に感じられた。良く小説等でこう言った表現を見るが、まさか自分にそれが当てはまる日が来るとは思っていなかった。そして、

「そう。わかった。あなたの望みは？」

俺は歓喜の笑みを隠せなかった。

こいつが俺を下に付ける気になった事、そして即座に俺の望みを聞いてくるその話の早さに。

「今後、多分何らかの形でポイントが増減する機会が増えるだろう？」

その時、あんたのおこぼれを頂戴したい」

「そう。なら、早速情報をあげる」

俺は驚いた。

いくらなんでも話が早過ぎる。

まさか、俺が話しかけてくるタイミング、俺の望み、その全てを読んでいた？

いや、そんなはずはない。こいつは俺の事など眼中に無かったはず。

俺は自分を落ち着かせて問いかけた。

「情報？ 一体どんな……」

そしてそいつがくれた情報は、俺を更に驚愕させるのに十分すぎる内容だった。

中間試験2週前に範囲が変更される事、そして過去問と全く同じ問題が出題される事。

そいつ自身は範囲や過去問など関係なく満点が取れるから必要な情報だが、俺にとって、いやこいつ以外の全員にとっては重要過ぎる情報だった。

どうやってこの情報を手に入れた？ いや、それはどうでもいい。俺が考えるべきこと、やるべきことは決まっている。

「ハ、ハハッ。やっぱあんたとんでもねえな。これからもよろしく頼むよ、女王様」

こいつが強いことはわかっていた。

だが、ここまでの奴には今までの人生で会ったことが無い。

だから、俺は一瞬ビビってしまった。

だが、直ぐにこいつの下に付くことにした俺の判断が正しかったこと、得た情報のあまりの旨みを理解し、それは喜びへと変わる。

この女王様に付いていれば、俺は絶対に勝てる。そう確信出来た。

俺が女王様の下に付いてすぐ、早速こんな指示が来た。

『過去問数年分、出来るだけ早く確保して。あと、チェス盤も用意して』

過去問数年分は、まあわかる。

だが、チェス盤？ 何に使うんだ？ まさか、俺とチェスで遊びたいなんてことは無いだろうし……

へとはいえ、特に反抗する理由はない。

俺はツテを使って過去問3年分を確保し、ついでにチェス盤もいらないと言う人がたまたま居たため、譲ってもらった。

女王様が言った通り、過去問は3年全て同じ問題だった。範囲はやはり少し違うが……これも例年数日後に変更が知らされると先輩から裏取りが出来た。

女王様の言った通りだな。後は、どうやってこれを使って利益を得るか……

そんなことを考えていたある日の放課後。

葛城が聞きたい事があると言って、女王様に話しかけていた。

「怜山。聞くところによると、Dクラスの勉強会に協力したようだな？ どうしてAクラスの会議や勉強会には一切参加しないのに、敵であるDクラスの勉強会には参加するんだ」

それは俺もツテから聞いたし、葛城と同様に疑問に思っていた。女王様は誰にも何にも興味が無いものだと思っていたのだが、違ったのか？ しかも、なんでよりによってDクラス??

まあ、変に詮索をして竜の尾を踏むことも無いと考えて、直接聞いたりはしなかったんだが。

他のクラスメイトも、全員が2人の様子に注目していた。みんな、やはり疑問に思ったのだろう。

だって、普通に考えて女王様の行動はあまりにも意味不明過ぎるから。

そんな中それを言われた女王様は、葛城ではなく俺の方を見て、

「橋本君、過去問」

とだけ言ってきた。

まったく……ほんつとに言葉が短いし、無視された葛城くんが青筋立ててるぞ？

とはいえ、逆らう意味もないから、過去問3年分を2人の前に出す。

「見て」

女王様が葛城に言う。

葛城は物凄く怪訝な顔をしていたが、とりあえず言われるまま、過

去問を見ることにしたらしい。
そしてすぐに、

「これは……3年全部、同じ問題、か？ 一体これは……」

葛城は過去問が全年度において全て同じ問題であることに直ぐに気付いた。

それを聞いたクラスメイトがざわつき始める。

まあ、そりやそうだ。

だって、もしそうだとするなら、中間試験はもはや終わった様なものなのだから。

そんな中、葛城はあの事にも気付く。

「いや、だが……少し範囲が違う……のか？」

気付く速度はまあ、流石と言ったところだな、葛城。

だが。

「数日後に範囲変更の知らせがある」

女王様がいつもの様に簡潔に述べる。

もう、葛城が何を言うかなんて全てわかっていると云わんばかりに。

「そうか……いや、だからと言ってお前の行動は……」

「クラスの事を思うなら、あなたのやるべき事は他の事だと思っけど」

それでも食い下がろうとした葛城の言葉を遮ってトドメの一言。

葛城は顔を歪めて悔しそうにしている。

残念だったな、葛城。女王様はお前より明確に格上だ。

さて、じゃあ俺も今から稼がせてもらいますか。

そうして俺は、他のクラスメイトからPPを得るための交渉を始めた。

俺が葛城を始めとしたクラスメイトからPPと過去問を交換するための交渉をしていたところ、今度は別の人物が女王様に声をかけた。

それは、もう一つの陣営の長である、坂柳……姫さまだった。

「怜山さん。聞くところによると、私の開く会議などを完全に無視しているながら、別クラスの生徒と親交を深めているようですね？」
「ええ」

女王様のいつも通り短い返事を聞いてから姫さまは続ける。
俺たちも交渉を止め、全員で2人の美少女の話に耳を傾ける。

「会議に参加しないことはわかります。ですが、他クラスの生徒。よりによって怜山さんは、この私とその生徒に劣っている……そう、言いたいのですか？」

あ、これめっちゃくちゃキレてる。

俺は姫さまの表情を見てそう思った。

姫さまからしたら、女王様がクラスに貢献するしないはどうでも良く、まるで姫さまがその生徒に劣っているかのような扱いをされるのが許せないらしい。

それに対して女王様は、全くの予想外で一見斜め上に見えるが、本質を的確に突いた発言をした。

「あなたの本当に聞きたい事、やりたい事はそれじゃない筈」

「……………？ それは一体……………」

姫さまも、その返事は流石に予想外だったらしく、怒りを忘れて困惑しているようだった。

それは俺たちも同じ。全員がはてなマークを頭に浮かべていた。

一見、ただ会話を逸らしたいだけの発言に思える。だが、さっきの葛城とのやり取りを考えると、何かまた深い意味があるのではないかと全員考えざるを得なかったのだ。

「橋本君、あれを」

女王様が俺に指示を出してくる。

あれ……………あれ、ね。

ほんつと、一体どこからどこまで見透かしているのやら。

俺は心当たりがあるもの、つまりは指示されたもう一つの品であるチェス盤を取り出し、2人の前に置いた。

「これは……………フ、フッフ……………」

それを見た姫さまは笑い出す。

それは決して嘲笑の笑いではない。

それは、歡喜の笑みだった。

……いや、これはきつと歡喜だけじゃない。

俺にはよく分からない。だが、まるで生物的本能をくすぐられるかのような、明らかにおかしな雰囲気を姫さまの笑みは宿していた。

きつと、これを理解出来るのは同格以上の相手だけなんだろうな、と思った。

「フフフ……確かに。確かにその通りです。色々お聞きしたい事もありました……貴女との対決が叶うならば全ては些細な事」

「……………」

「ああ、なんて、なんて素晴らしい日なのでしょう。きつと、この日のことは一生私の記憶に残る、人生の岐路とすら言える出来事となるに違いありません」

姫さまは頬を赤く染め、それはもう大層嬉しそうにし、よくわからないが何やら圧倒されるような雰囲気を強く宿しながらそう語った。

そうして、俺たち1ーA、いや、1学年における2トップの対決が、クラス全員の前で唐突に幕を開けた。

チエスつてのは統計上先手有利と言われている。

それは実力が高い指し手であればある程顕著のようで、俺もそこまで詳しくは無いが、先手勝率約40%、後手勝率約25%、引き分け35%と聞いた気がする。

ゲームでそこまで勝率が偏るつてのはなかなか聞かない。

例えば、俺も少し嗜んでいるデジタルカードゲームでそんなに勝率の差がある場合、余程バランス調整が難しいとかじゃなければまず間

違いなく運営によるテコ入れが入るだろう。

そんな風に、チエスは明確に先手有利なゲームで。

そして、今俺たちの目の前で繰り広げられている光景は、異常なものだというのが良くわかる。

先手を取った姫さまは、側から見てそれはもうめちやくちや必死に頭を使っていて、長考することがとても多かった。

何というか、頭から湯気が出る、って表現がこれ以上無くふさわしいくらいに。

反して女王様は、自分の手番が回ってきた瞬間に、全く表情を変えずに完全にノータイムで駒を動かしていた。

それは、どう見てもおかしな光景。

まるでこれは勝負などではなく、大人が子供に合わせて遊んであげているかのような。そんな光景。

「ここまで差があるものなのか……」

思わず口に出したのが誰なのかはわからない。

だが、それは俺たち全員の総意だった。

もちろん、姫さまが弱いわけじゃない。

見てる観客の中で、姫さまとまともに勝負出来る奴なんてまず居ないだろう。

ただ、女王様が異常に強すぎる。

その一言に尽きる。

2トップの対決？

一体何を馬鹿な事を俺は考えていたんだ。

そして

「Resign。……流石、素晴らしいです」

降参して自らのキングを弾いたのは、もちろん姫さまの方だった。

歓声など上がる筈がない。

Aクラスに蔓延っていた感情はただ一つ

恐怖だ。

全員の目の前で葛城を軽くあしらひ、そして、あの姫さまを簡単に叩き潰す女王様への恐怖。

このクラスで誰が一番強くて、誰に逆らってはいけないのか。

どんな馬鹿でもわかる。

「負けた私にはもう何も言う資格はありませんね。これから先、怜山さんの行動に口を出す人間はこのクラスに誰も居ないでしょう」

敗北した姫さまは、負けたにも関わらず何やらとても嬉しそうな顔をし、周りを見渡してからそう言った。

当然、反対意見などある筈が無い。

「そう」

「ただ……負けた身で申し訳ないのですが、一つだけお願いを聞いてもらってもよろしいでしょうか？」

「何？」

「私は、いずれまた貴女に挑みたい。その時はまた挑戦を受けてもらいたいな、と」

「……もう少し強くなつてからなら」

もうこれ以上無いほどの侮辱の言葉。

だが、その言葉を聞いた姫さまはさつきよりも更に嬉しそうな顔をしていた。

……姫さまはSだと思っていたが、実はMなのか？

そんなどうでもいいことを考える俺を他所に姫さまは、もはや蕩けてしまったかの様な表情で言う。

「フ、フフフ……ここまで格下扱いを受けるのは生まれて初めてです。ですが、わかりました。私はこれから強くなりましょう。そしていつか必ず、貴女を打倒して見せます」

そんなやり取りを交わす天才2人、いや、天才と化け物に口を出せるような勇者はこのクラス、いや学年には存在しなかった。

「しかし……先程は興奮で見えていませんでしたが、冷静になつて考えると、怜山さんは私がチェスを嗜む事や、勝負に拘る私の性格をご存知だった？ だとしたら……」

何やら小声でぶつぶつ呟く姫さまを横に、俺は自分の判断の正しさを心の底から再認識すると同時に、女王様の機嫌は絶対に損ねてはならない、無意味な詮索などは決してしない、などといったことを改めて心に誓っていた。

本格的に依存が始まっていくRTA、はーじまーるよー

前は、ランダムイベントを越えて5月を終えたところでしたね。

原作だと、6月はヤンキー介護イベントその2が起きる時期です。

一之瀬さんや龍園君の初顔見せもある、いわゆる『タメ』のイベントとも言えるやつですね。

堀北さんがあまりにも問題を起こし過ぎるヤンキーに完全に呆れ果てて見限ろうとする(残当)ところを須藤君に利用価値を見出した綾小路君がどうか説得したり、佐倉さんをストーカーから救ったり、生徒会長と対峙したり、正面からやり合うんじゃないかと裏で訴えを取り下げさせる策を取ったり、事なかれ主義を謳う割には随分と積極的に動く綾小路君の闇が垣間見えたり……タメとは言っても様々な見せ場がちゃん存在するイベントです。

そんなこの時期、我らがれずちゃんが何をするのかと言うと……何もしません(ニート)。

こういう風に、長い原作イベントだろうと簡単にスキップ出来るのがAクラススタートの利点ですね。

まあ、介入しようと思えばいくらでも出来ます。

例えば、綾小路君が榎田さんに連れられて佐倉さんのカメラを修理に行く日に綾小路君をデートに誘うと、れずちゃんにメロメロな綾小路君は当然のようにデートを優先するので、佐倉さんがそのままストーカーの魔の手に遭って転校することになったり。後は、Cクラスに手を貸すことで須藤君を普通に退学させたりすることも可能です。

佐倉さんは居てもいなくても何も変わらない(無慈悲)のですが、須藤君は普通に強キャラで厄介なので、ここで退学させると今月に動くことで発生するロスを帳消しにするどころか、結果的に若干のプラス

にする事も出来ます。

とはいえ、本チャートにおいてこの時期にあまり原作を大きく変えてしまうと少し面倒なことになるんですよ。

なぜかという点、夏休み直前にとある爆弾イベントがあつて、それは確実に的確な処理をする必要があるのですが、それまでにDクラスに大打撃を与えてしまうと時期が少し前倒しになつて計算が難しくなつたりしてしまいます。今のところ、それをやっても問題ないくらい順調に進んではいるのですが、念には念を入れる必要があるのです。行動によるロスを考えると、須藤君を退学させることによるメリツトは微々たるものですからね。リスクリターンが釣り合つていません。

それに何より、この時期にある一之瀬さんと白波さんの告白イベントを綾小路君にこなして貰うと、れずちゃんは特に何もしていないのに勝手に綾小路君が恋愛について色々考えてくれるんですが、佐倉さんをストーカー被害に遭わせたりすると告白イベントが消えてしまう事もあるんですよ。そのため、特に何もしない事が最適解となるのです。

綾小路君に協力を持ちかけられた時には、CとDの争いにれずちゃんが絡むと事態が面倒になるとかなんとか言つて誤魔化してしましましょう。今の綾小路君は、余程おかしな事を言わない限りはれずちゃんの言葉を即信用してくれるので。

実際、れずちゃんが須藤君を助けるために動くなつてこと、Aクラス組や龍園君からしたら大事件なのは間違いないですからね。

たまにはれずちゃんも常識的な事を言うんやなつて。

よつて、6月はいつも通りの自由行動パートのみとなります。

引き続き、綾小路君とのコミュですね。

とはいえ、6月になつて今まで以上に綾小路君と行動を共にする堀北さんに絡まれるのはロスなので、6月は綾小路君を昼食に誘わないようにします。4、5月のスタートダッシュのおかげで、好感度に関してはメールと佐倉さんストーカー事件日以外の休日デートさえし

ておけば問題ない筈。

更に言うと、それもまた依存度上昇に役立ちます。

面倒事が起きるとれずちゃんと一緒に居る時間が減ってしまうという認識と、れずちゃんと一緒に過ごすことは幸せなんだ、無くてはならないことなんだ、という認識を綾小路君に改めて植え付けるわけですね。

それに白波さんの告白イベントが合わさることによって、れずちゃんは何もしていないのに綾小路君が勝手に重い想いを募らせていくことになります。

キャラがイキイキして自分の意思で動くゲーム、神ゲーだな!!

では自由行動、イクゾー!

少女自由行動中……

お、綾小路君から来るメールが普段のもの比べて少し変わりました。

なにになに……?!

『須藤の件だが、訴えを取り下げさせることに成功した。これからは昼が空くから、また一緒に食べないか? 弁当を作ってもらっている俺から言うのもおかしい話かもしれないが……』

うーんこれは青春ですねえ。

もちろん了承します。

良い返事をあげることによって、色々あつて色々考えた綾小路君のれずちゃんへの依存度がぐんぐん上昇していきます。

恋愛したいだけなら、こちらから告白してしまえば5月から既に可能なのですが、再三言うように本チャートでは綾小路君をれずちゃんに依存させる必要があるのですね。

現実世界でも同じだと思うのですが、感情の振れ幅は付き合う前の方が圧倒的に大きいのです。

え？ もう付き合つてるとしか思えない行動してる？ 何を今更（ハート）。

では、自由行動に戻ります。

少女自由行動中……

はい、6月が終わりました。

4月5月と比べて特に何もありませんでしたね。

しかし何もしていないのに、むしろそれによって都合の良い事が起きていく。この期間を見るだけでも、再三言っているスタートダッシュの重要性を示せたと思います。ご都合主義を自らの手で作り出していくのです。

そして、問題の7月。

この時期は、原作では夏休みの無人島イベントまでの、とある1つの会話イベント以外全く何も無い時期です。

強いて言えば期末試験があるのですが、原作のキャラたちにも、そして満点が確定しているれずちゃんにとっても大したイベントではありません。

原作ではさらりと流される時期。

ですが、勘のいい兄貴ならもう察しているとは思いますが、先程述べた1つの会話イベントこそが本RTAにおいて最大級に重要なイベントとなります。

そのイベントとは、通称茶柱脅迫イベントです。

具体的に何が起きるか解説します。

まず、茶柱先生が自分の夢であり、過去に失敗してしまったAクラスへの下剋上が現実的なものとなったと理解します。そして、それには綾小路君の協力が必要不可欠だと考えます。しかし、綾小路君はあまり積極的にAクラスに上がる動きをしてくれません。よって、茶柱先生は綾小路君の鬼畜父親の件を引き合いにして、協力しないと退学にするという脅しをかけるのです。

自分の夢の為に生徒を脅迫するなんて、教師の屑がこの野郎……!!

一応フォローすると、茶柱先生自身脅しながら自分は今一体何をやっているんだろう……と自省するくらいには焦った末の行動であり、2学期の綾小路父との対面以降はこのことを悔やんで綾小路君の心強い味方となり、綾小路君の父という日本有数の権力者から彼を守ることを決意するくらいには良い人ではあるんですね。

ただ、自分がかつて高校3年生だった時の失敗といい今回といい、極稀に感情に任せて動いてしまい、その結果大失敗を引き起こしてしまうことがあるという、起こした行動の結果だけ見てしまうと無能そのもの。

そのため、私個人は茶柱先生は大人の含蓄があつて好きなのですが、ヘイトが集まっても仕方ないキャラだろうなあ、とは思いますが。

なお、そんな大事な綾小路君がれずちゃんに墮とされる本RTAで

の夢の結果は（察し）。

ちなみに、原作の櫛田乳揉みイベントで綾小路君を脅した櫛田さんですが、あのイベント発生時には悪い顔をして綾小路君を脅すはいいものの、その後特に無茶な要求をしたりとかしないのでイベントブロックに成功さえすれば後は放置です。もう少し出番あげたら軽井沢さんの立ち位置を確保出来るようなヒロインにもなれたでしょうに。

解説に戻ります。

このイベントの何が問題かというと、脅しに加えて綾小路君が父のことや昔自分がいた施設のホワイトルームを思い返す事で、機械度が爆発的に進行する、まさしく爆弾イベントな点です。

このイベントそのものには介入の余地はありません。どういうプレイをしても確実に発生しますし、綾小路君と鬼畜教師の会話に割り込む事も不可能。

強いて言えば、時期をずらす事なら可能ですが、本チャートにおいてそれをするのは先程述べた様に計算がずれるマイナスでしかありません。

なので出来る事といえば、イベント後の綾小路君の精神ケアだけなのですが、そこで今までの行動の集大成が出ます。

このイベントまでに一定以上好感度を上げ、極力機械度を進行させないようしなければ、綾小路君は機械小路君になることが確定し、もはや修復不可となるのでリセット確定です。

ですが逆に、このイベントは上手く行けば依存度を爆発的に増加させるという、良い意味での爆弾イベントとなります。

ほんとに良い意味か？

どうすればそうなるのかを解説します。

ここまでに先の条件を達成していた場合、イベント後に綾小路君か

ら連絡が来るのですが、そこでれずちやんのステが一定以上あれば綾小路君が脅迫を受けた事、ホワイトルーム関連の話こそは語らないものの父との確執があること、までを相談してくれるのです。れずちやんをただの一番仲が良い女の子としてだけでは無く、誰よりも頼りになる女の子とも見做すんですね。

そこで可哀想な綾小路君に温かい言葉をかけてやることで、これまでの依存度が高い倍率がかかります。加算ではなく倍率なので、このイベント前に依存度もしっかりと上げておく必要があったのです。

その結果、綾小路君はもはや何をすることも最初にならずちやんに報連相をするようになります。例えば、無人島イベントにおける策の全貌を事前に語り、Aクラスの獲得するポイントが減るがやってもいいか、等の許可を求めるようになったりします。更に、余程綾小路君が不利益を被らない限りはほとんどの指示に従ってくれるようになります。

では、自由行動をしながら、茶柱脅迫イベントの発生を待ちましよう。

少女自由行動中……

お、来ましたね。

綾小路君からのメールに変化がありました。

『いきなり悪い。怜山に相談したい事があるんだが、今から少しだけ会う事は出来ないか?』

無事に(?)茶柱先生に脅迫されたみたいですね。時期もバツチリ。

そしてご覧の通り、既に無意識的にれずちゃんを頼る綾小路君になっっています。

まずは第一関門突破といったところ。

もちろん、了承します。

『ありがとう。可能なら人目に付かない場所がいい。個室のカラオケはどうだ？』

もちろん、了承します（天井）。

ちなみに、ここでれずちゃんの部屋に呼ぶか、綾小路君の部屋にしようかと提案することでR18展開にすることも出来るのですが、このゲーム全年齢版なのでね。やりたいならR18版を購入してください。

そして、その展開だともちやくちや爛れた高校生活を送ることになるために当然RTAとしては成立しないのですが、綾小路君ガチ恋プレイヤーにはお勧めです。

綾小路君は性への好奇心旺盛な思春期男子ですからね。何せ不意打ちで放たれたオレンジジュースを完璧に避けられる異次元の反応速度と身体能力を持ちながら、櫛田さんになすがまま胸を揉まされたわけですから。あの時の綾小路君は胸を揉みたかつたとか考えられません。

RTAプレイヤーの私は普通にカラオケ屋に行きます（当然）。

少女移動中……

カラオケ屋に着きました。

綾小路君が、愛しのれずちゃんが自分の相談のためにここまで来てくれた事実に対して嬉しそうではありますが、幸せ絶頂高校生活の最中にまさかの教師に脅迫されたことに加え、退学はれずちゃんとの別

離も意味していることを察して暗い雰囲気を出してもいます。

さて、今から待ちに待った重要コミュをする訳ですが、まさかここで血迷って冷たい対応を取る走者はいませんか？（0敗）

まあ、冷たい対応を取った時の綾小路君の絶望の表情と、その後の闇堕ちは一度見ておく価値が十分あるものですが。

今回そんなことをする筈がありません。

ではコミュを開始します。

ほら堕ちろ！

少女コミュ中……

堕ちたな（確信）

綾小路君がそれはもう幸せそうにしています。

機械から人の道に引き摺り込む……れずちゃんはいいい奴だな！

これで、本チャートにおける目標達成のための第一段階、綾小路君の依存化が達成出来たわけですね。

とはいえまだ完璧ではありません。

その後更に色々する事で、綾小路君が何よりも、具体的にはクラスのみならず自分の自由や安全等よりもれずちゃんを最優先するようになり、れずちゃんにだけは絶対に危害が加わらないように、不利益を被らないように、何も指示しなくても自分で勝手に動いてあらゆる物を排除し尽くしてくれる、完全依存自発的傀儡化綾小路君が誕生す

るわけですが、それは今後のお楽しみに。

ではまた次回、サラバダー！

4―裏

綾小路清隆の誕生

きつかけはいくつかあった。

その1つは、白波千尋というBクラスの生徒が、須藤暴力事件に關してオレたちの協力者である一之瀬帆波に告白するという出来事。

……いや、きつかけも何も、オレ自身本当は理解していたことだ。だが、改めてそれを突き付けられた。そう感じさせるような出来事だった。

オレは、白波の告白を誰も傷つける事なく切り抜きたいと考えた一之瀬に彼氏のフリをするように頼まれた。

はつきり言って、全く気乗りしない。

だが、オレは一之瀬に押し切られる形で現場に連れていかれた。

そして、白波が一之瀬との待ち合わせ場所に現れる。

「あの……一之瀬さん、その人は？」

当然、白波は何故かここに居るオレについて聞いてきた。

「じ……実は、綾小路君は、その私の――

「ただの友達だ」

言った瞬間、一之瀬がまるで話が違うと言わんばかりの表情でこちらを見てくる。

別に、偽彼氏を了承したわけじゃ無いんだけどな。

……いや、今のオレは、たとえどんな理由があろうとそんなことを

するわけがない。

「……一之瀬。オレをここに呼んだのは間違いだったと思うぞ」
「告白されたことがないオレが言うのもどうかと思うが、誰かに告白するってそんな生易しいものじゃないだろう」

もし仮に、オレが告白する際に、今の一之瀬のようなことをされたら……想像するだけで全身に身震いが走る。

今のオレには、誰に告白するか、どういった光景になるか、が具体的に想像出来てしまうだけに。

「毎日のように悶々とした時間を過ごし、何度も何度も頭の中でシミュレートして。それでも告白できなくて」

それは一体誰の事を言っているのか。

「告白しようと思っても『好き』の言葉はなかなか出てこない」

その一言を言う為に必要な勇氣はどれ程の物なのか。

「その必死の想いに一之瀬は応えなきゃならないんじゃないのか？
でないと互いに後悔するだけだと思う」

仮に高校入学前のオレだったとしても、同じような状況下になった場合一之瀬に同じような事を言ったと思う。

だが、それは単に聞き齧った知識から導き出される何の意味も無い言葉に過ぎない。

今のオレならば、その言葉に重みを、何よりも想いを込めながら言うことが出来る。

そしてオレは2人の元を去り、しばらくして白波が泣きながら走っていく姿を確認した。

少しして一之瀬が現れる。

「……私が間違ってた。千尋ちゃんの気持ちを受け入れようとしなくて。傷付けない方法だけを必死に考えて……」

「……………」

「……恋愛って難しい。明日から……いつも通りやっていけるかな」

「それは……2人次第だな」

言いながら、オレはこの状況を自分に当て嵌めて考え、悩んでいた。オレはどうすべきなのか……

まさかこのオレがこんな、普通の人間のような悩みを抱くことになるとは思わなかった。

これも全て怜山のおかげだ。

確かに、悩むことにより胸は苦しくなるし、時間も随分と食われる。だが、ホワイトルームに居たオレからすればそれすらもまた幸せと言えるのだ。

一之瀬と協力して須藤の一件を終わらせ、佐倉のストーカー問題も解決した。

そのため、全てを終えたと判断したオレは怜山にメールを送った。

もう厄介事は終わったから、前みたいに一緒に昼食を取らないかと。

送ってから、オレは緊張していた。

休日には普通に遊びに行っているし、メールも毎日続けている以上、断られる事はあり得ないとわかってはいる。

だが、それでもオレの感情は理性に反して揺れ動いているのを止める事は出来なかった。

返事は、直ぐに来た。

『さよ』

と。

いつも通り非常に短い文章。

だが、オレはそのたった三文字に、高校に入るまでは決してあり得なかった喜びの感情を抱いた。

これで、オレの何にも代え難い日常がまた戻ってくる、と。

オレは、須藤の一件で勝ち取った勝利の美酒などよりも遥かに大きな喜びを怜山との日常の復活に感じていた。

この世は『勝つ』ことが全て？ 過程は関係ない？ どんな犠牲を払おうと構わない？ 最後にオレが『勝って』さえいればそれでいい？

昔のオレは一体何をくだらない事を考えていたんだ。そんなの今のオレにとつては最早どうでも良いこと。

いや、むしろオレに取つての勝利とは、怜山と一緒に過ごす平穏な高校生活だと言える。それ以外の事など全くのくだらない些事だ。

そう考えると……いくら須藤の身体能力は利用価値が十分にある物だとはいえ、これ以上面倒事を起こしてオレと怜山の至高の時間を奪うならば排除も考慮に入れなければならないな。

堀北への協力に関しても一旦再考しなければならぬだろう。今後オレはどういうスタンスで過ごすべきか……

だが、そんな風に普通の高校生のような、普通の喜びや悩みを抱いたりして生活していたオレの高校生活が、全く予想外の人物によって崩壊させられることになる。

ある日、オレは唐突に茶柱先生に職員室に呼び出される。

「急に呼び出して一体何の用ですか、茶柱先生。……呼ばれた理由が全くわからないんですけど」

「中で話す」

そう言って、先生は指導室の中に入り、オレを招いてきた。

「指導室と聞くとイメージが悪いがここは都合がいい。なぜなら、監視の目がない。個人のプライバシーに関する話をすることが多い故の配慮だ」

「それで話って何です？ 今から夏休みの予定を立てるんで忙しいんですけど」

それは本当の話。

オレは怜山とどこに遊びに行くかの計画を立てようと思っていたのだから。無論、怜山の予定と好む場所こそが最重要事項なのだが、それを聞く前にオレだけでもある程度の当たりを付けておきたかった。

「友達……か。まさかお前がああ、の怜山静香と仲良くしているとはな。全くの予想外だったぞ」

「それってどういう意味ですか」

オレは思わずジト目になって茶柱先生に聞いた。だす。

「いや、全ての意味で意外でな。お前が友達を作ること、あの誰も必要としていないようにしか見えない怜山が友達を作ること、そしてそんなお前たち2人が友達になること」

「……………」

まあ、それはそうなのだろう。

怜山がクラスメイトに興味を示していない、という噂は嫌でも耳にする。そしてそれが許される、オレですら勝てるかどうかわからない程の圧倒的な実力。

隣人の堀北と違って真の意味での孤高。

それが怜山静香という人間だ。

だが、そんな怜山がオレにだけ興味を持った理由。オレにはわかる。

怜山は最初に出会ったあの日に、その高すぎる判断力と、未来予知じみた凄まじい観察眼にてオレの力を見抜いていたのだから。

「まあ、いい。これから話すのは私の身の上話だ」

そうして茶柱先生が話したのは、かつて先生がこの学校のDクラスで、自分の失敗のせいでAクラスに上がれなかった、という身の上話だった。そのためAクラスに上がる夢を未だに持っていて、それには

オレの力が必要なのだ、と。

そこまでは正直言っただうでもいい話だ。

だがその後、茶柱先生は信じられない話をオレにしてきた。

「数日前、ある男が学校に接触してきた。綾小路清隆を退学にさせろ、とな」

一瞬、一体何を言っているんだ？ と思った。

だがオレは、即座に状況を理解して返答する。

「退学させろって……それが誰だか知りませんが、本人を無視して退学なんてさせられませんよ。ですよね？」

誰だか知らないなんてのは嘘だ。

そんな事を言ってくる男など1人しか居ないのだから。

とはいえ、あの男が直接出てきたのかまではわからない。部下にやらせている可能性は十二分にある。

それに、この学校は政府の手が入った学校。本人を無視して退学させるなんて不可能だと見込んで入学したのだから。

だが、またしても茶柱先生は信じられないことを言ってきた。

「もちろんだ。この学校の生徒は全てルールによって守られている。しかし……問題行動を起こせば話は別だ」

「いじめ、盗み、カンニング……お前の意思は関係ない。私がそうだと判断すれば……全て現実になる」

「もしかして、オレを脅してるんですか」

オレは思わず怒りによって立ち上がり、茶柱先生の胸倉を掴んだ。自分でも、ここまでの怒りを感じるとは思っていなかった。オレに

はこんな感情は無かった筈なのに。

「これは取引だ、綾小路。お前は私のためにAクラスを目指す。そして私はお前を守るために全面的にフォローする」
「つまりAクラスを目指すか退学するか……だ」

およそ教師とは思えない脅迫をしてきた茶柱先生から解放され、オレは1人考える。

Aクラスを目指す。

それはつまり……怜山を本格的に敵に回すということの意味している。

退学する。

それはつまり……自由な高校生活が失われると同時に、怜山との永久の別離を意味している。

どちらを選ぶべきなのか。

オレにはわからなかった。

まさか、こんな風に悩む事になるなんて思っていなかった。以前までのオレならば、躊躇なく自分のためにAクラスを目指すことに決めていただろうから。

そんなかつてのオレが今の自分を見たら一体どのように思うのだろうか。

そうして永久にも思える長い時間を迷った結果、オレが頼り、メールを送ったのはやはり怜山だった。

ほんと、我ながら無様だな……

自覚はあった。オレは心が弱くなっている、と。

送ったのは、相談したい事がある、という内容。

すぐに了承の返事が返って来た。

恐らく、オレの並々ならぬ状況を察してくれたのだろう。だが、彼女は何があったのかを聞かずに、直ぐに行くとだけ答えてくれた。

お前がそんな風にしてくれるからオレは……

きつと、オレは怜山のおかげで感情を手に入れることが出来たのだろう。それはとても喜ばしい事だ。

だが今だけは、かつての機械のように淡々と判断していたオレの精神が少しだけ羨ましくなっていた。

カラオケ屋で怜山と合流する。

普段、怜山は放課後に何処かに行ったりはしない。

これはAクラスでは有名な話のようで、基本的に彼女は放課後になった途端直ぐに寮へと直帰し、その後出てこないらしい。

それにも関わらず、オレのいきなりの呼び出しに何も言わずに来てくれて、本当に嬉しい。

だが……退学というのは、そんな怜山と2度と会えないという事も意味している、ということはどうしても考えてしまい、オレは素直に喜び切る事が出来なかった。

「こんにちは」

「あ、ああ……来てくれてありがとう」

普段通りの怜山とそうではないオレ。

怜山はいつも通り無表情でありながらも、何やら心配しているかのような色をほんの少しだけ浮かべていた。

怜山にそんな顔をさせた事実を恥ずかしく思う自分と、彼女の表情をそんなふうに変えられるのは恐らく自分だけで、自分のために彼女はこんな顔をしてくれた、という事実嬉しさを感じる自分……

思わずそんな事を考えてしまうオレ自身に驚く。

オレってそんな奴だったんだな……

思わずそうやって自嘲してしまう。

個室に入り、早速本題に入る。

怜山はいつも通り無表情で、オレの話を正面から聞く体制を取っていた。

「オレには、父親との確執がある。この高校に入学したのも、政府の手にあるここならば父も手を出せないと考えたことが大きい」

まさかこれを誰かに、しかも同級生に自分から話す日が来るとは思っていなかった。流石にホワイトルームについて今ここで話す気は無いが、怜山になら、必要になったら話しても構わないとすら今のオレは考えていた。

「目論み通り、オレは平穏な高校生活を送る事が出来た。……いや、怜山のおかげで、入学前に考えていたよりもずっと楽しい時間を過ごすことが出来た」

そう。

オレの高校生活は、怜山と過ごす時間は、あまりにも幸せ過ぎてもうオレという1人の人間にとって必要不可欠なものとなっている。だが。

「だが、そんなオレの日常が崩れ去ろうとしている」

「茶柱先生に、オレを退学させるためにとある男が接触してきたと言われた。父が直接来たのか、部下にやらせたのか……そのどちらかはわからないが」

「先生はオレのことを守ってくれるかと思いきや、それどころかAクラスに上がるために尽力しなければ退学させる、と脅迫された」

Aクラス……つまりは怜山の居るクラス。

「Aクラスを本格的に目指すということは、Dクラスのポイントを稼ぐだけじゃなく、Aクラスを蹴落とすような真似をしなければならぬ」

「それはつまり……怜山の居るAクラスと本格的に敵に回らなければならぬことを意味している」

言いながら、オレは再び焦りや悲しみ、怒り……様々な負の感情を抱いていた。感情はあれほど欲しい物だった筈なのに、今だけは邪魔な物でしか無い。

そんなオレの言葉を、怜山は特に口を出す事なく黙って聞いてくれている。

「かつてのオレならば躊躇なく自分の為はその選択肢を取っただろう。だが、今のオレは……どうすればいいのかわからない」

「オレは、怜山の敵になんてなりたくない。だが、退学は怜山との別れも意味している。オレは……」

そうやって思い悩みながら自分の現状を相談すると、いきなり怜山は立ち上がり、オレのすぐ隣に来て、

何も言わずにオレの頭を撫でてきた。

「!? お、おい、怜山……」

「うるさい。黙って」

それは、字面だけ見たら隣人の堀北を彷彿とさせるような罵倒の言葉。

だが、そんなことを言われたのに、怜山の言葉からは、その手からは、オレは茶柱先生に脅されたせいで冷えてしまった心がまるで急速に溶かされていくかのような温かさしか感じなかった。

怜山から感じる温もり。

高校に入学するまで感情が無かったオレの胸から形容し難い何か
が込み上げてくる。

オレは……

もう、認めよう。

オレはこの怜山静香という少女に恋をしてしまったのだと。

そして、しばらく撫でられた結果、オレの心はすっかり落ち着き
を取り戻す事が出来た。

「ありがとう。もう、大丈夫だ」

「良かった」

怜山はいつもの無表情ではあったが、やはりほんの少しだけ、とても穏やかで優しい表情を読み取る事が出来た。

「怜山のおかげで、オレは今後どうすべきかがわかったよ」「そう」

茶柱先生から、クラスはPPを2000万ポイント支払う事で移籍出来ること、しかし歴代最高でも1200万までしか貯めた生徒はならず、それに詐欺がバレて退学になった、という話を聞いた。

つまりそれは、その気になれば沢山のポイントは稼げる事、そして2000万ポイント支払うことさえ出来れば、茶柱先生の手から離れることが出来る上に、怜山と同じクラスになるという夢のような状況が完成するということを示している。

それ以外にも方法など幾らでもある。

例えば、一旦時間さえ稼ぐ事が出来れば、その内茶柱先生の弱みを握ってしまう事も出来るだろう。

他の先生を味方に付けても良い。ベターなのはAクラスの真嶋先生か。少し面倒だが茶柱先生と何やら因縁があるらしい星之宮先生でもいいだろう。

こんな風に、落ち着いてほんの少し考えるだけでいくつも方法が浮かんでくる。

オレは本当に冷静さを失っていたんだな……

だが、もう大丈夫だ。

オレには怜山がいる。

彼女さえいれば、今後何があっても切り抜ける事が出来るとオレは確信している。

オレはもう1人じゃない。

もはや恐れる物など何も無い。

想いの力は無限大なのだから。

……しかし、実はさつき撫でられた時、怜山は隣に座り、後ろから手をまわしてオレの頭を撫でてきたために、オレの背中には何やら柔らかな感触が……

いやいや、一体何を考えているんだオレは。

オレを救ってくれたかけがいの無い少女に対して余りにも恥知らず過ぎる。

だが。

……怜山って着痩せするタイプなんだな。

原作代表イベントのRTAはーじまーるよー

今回は、綾小路君をれずちゃんに依存させることに成功したところですね。

夏休みを迎えました。

数日後にバカンスという名の特別試験が始まるわけですが、それまでは綾小路君とのデートを楽しみましょう。

無論、こちらからの誘いが断られる事などある筈がありません。

どんなにめちやくちやな時間だろうと、当日で集合10分前のお誘いだらうと二つ返事で了承されます。

まあそんな意味不明なことはしないんですけど。

バカンスの為に一緒に水着を買いに行つて、綾小路君をどきどきさせているれずちゃんは悪女ですね〜

れずちゃんは容姿Aの上にスタイル抜群ですからね。これ見よがしに水着姿を見せびらかすくらい自信があるのも当然といったところ。

クール系の見た目をしていながら意外と胸も大きいですしね。

……まあ、異常に巨乳だらけのよう実世界なら普通サイズなのかもしれないが。何故か貧乳扱いの堀北さんですらDカップですし（挿絵やアニメやコミックだとGはあるように見える）、一之瀬さんに至ってはあれ一体どうなってるんですかね？ 人体の構造上、体型と比較してあそこまで不自然に大きいと運動どころか最早日常生活に多大なる支障をきたしそうなものですが。

胸に興味深々なスケベ小路君に対してあまりやりすぎるとR18展開になるのですが、この程度であれば何の問題もありません。

そんな青春の1ページを眺めたところで、場面は船に移りました。

これから、原作2大イベントと言っても過言ではない2つの特別試験が連続して始まるわけですね。

特別試験の期間は2週間。

最初の1週間は無人島、残りを船で過ごします。

船は施設も非常に充実している豪華客船で、一流のレストランから演劇が楽しめるシアター、高級スパまで完備。

しかもそれが1週間＋α。しかも全部無料。

いくら何でもお金かけ過ぎイ！

私も無料ですつとレストランとスパの往復をしたい……（羨望）

96

船内の出来事は全スキップ……と言いたいところですが、試験開始直前に無人島の外周を一回りする際に目ぼしい物を一通り見ておく必要があるため、その時になったら自室から出しましょう。

そこまでは自室でスキップして大丈夫です。

逆に、不用意に甲板に出て綾小路君とコミュを取ろうとしたりした場合、当然のように堀北さんや一之瀬さんを始めとした色々な人に絡まれて（意味深）大口スする羽目になるため、ここは大人しくしておきましょう。

『お時間がありましたらぜひデッキにお集まりください。しばらくの間、非常に意義のある景色をご覧頂けるでしょう』

とかいう意味深なアナウンスを確認したら甲板に出て、島を眺めま

しよう。判断力A+のれずちゃんなら、有意義な物を沢山発見してくれる筈です。

当然、ロスを防ぐためにDクラスはもちろん他生徒には近付かないようにしましょう。

れずちゃんは孤高な黒髪美少女なのでね。

無人島に上陸しました。

いい男の真嶋先生からの説明を受けます。

特別試験なんて予想だにしていなかった他生徒はざわざわしていますね。

なになに……？

最初に各クラス300ポイントが与えられる。

1週間の生活物資は与えられたポイントで購入可能。

けれど試験終了まで保持したポイントは2学期からの学校生活にプラスされる。

体調不良などによるリタイアはマイナス30ポイント。毎日午前午後8時にある点呼に不在の場合、1人につきマイナス5ポイント。環境汚染はマイナス20ポイント。他クラスへの暴力、略奪、器物破損をした場合、クラス全員即失格に加えて対象者のPPは没収。

Aクラスは坂柳さんが欠席するため最初からマイナス30ポイントのペナルティがかかります。

1人身体機能に問題がある生徒が居るとそれだけで1試験につきクラス全員月額3000円のマイナス。

銀髪美ロリの能力が高いからいいものの、もしそうじゃなければヘイト対象にしかならないんですがそれは。まあ、実力主義的に考えたら妥当っちゃ妥当ではあるんですが、ここ一応高校の筈なのでは？

キャラクリで身体能力に異常がある場合リセなのは、こういうことが定期的にかかるから、というのがあります。特にAクラスルートの場合、野外試験がある度に毎回マイナス60ポイント、つてことですからね。

足手纏いには徹底的にヘイトが溜まるシステム……2次元だからこそ楽しく眺められるシステムですな。

無人島試験のように、頭脳だけで無く身体能力を求められる試験は、今後も出てきます。

そこは当然身体能力に優れた男子のほぼ独壇場となります。

ならやつぱり男キャラで走った方がいいのでは？ とお思いかもしれませんが、最初に言ったように綾小路君籠絡まで時間がかかるといっただけではなく、どんなに身体能力が高かろうがホワイトルーム生に武力で勝つのは厳しい、というのがあります。

なにせホワイトルーム生であれば、手にナイフを刺されている状態で身長も体格も圧倒的に上の人間に力で勝てる世界ですからね。常識的に考えて、仮にオリンピック選手並みの身体能力を持っていようがそんなのは不可能です。

よって、暴力で綾小路君や八神君に勝つのは最初から不可能と考えた方が建設的でしょう。

だからこそ、男キャラよりも女キャラを選んだ方が利点を活かしかれることが出来るため、結果的には最速で走れるのです。

男キャラだと状況次第で八神君を相手にしないとイケなくなったりしますからね……もしそこで大怪我して再走なんてなったらコントローラーをぶん投げる自信があります。

それに、ホワイトルーム生は基本的に無敵ということは、つまり……いえ、これは後々のお楽しみという事です。

クラス別に分かれてから、いい男からの追加説明がありました。

追加ルールとして、無人島の各所には『スポット』と呼ばれる場所が数ヶ所ある。スポットは各クラス一人選ばれるリーダーによって占拠することができる。有効期限は8時間。よって1日に3回更新することが出来る。占有できれば、一回につき1ポイント獲得する。他クラスのスポットを無断利用したらマイナス50ポイント。7日目の点呼で他クラスのリーダーを当てたら50ポイント、当てられたらマイナス50ポイントに加えて占領ポイントも没収、外したらマイナス50ポイント。

ふーん、そーなのかー(すつとぼけ)

ではイベント開始です。

Aクラスは派閥の違いはあれど初動の重要性は理解しているようで、一先ずいい漢の葛城君に従って行動開始したようです。

サバイバル開始直後に拠点すら決めずに争い始めたDクラスはどう考えてもやばい。

まあ争いが全く無いというのは、何も言わずにいい漢に従うれずちゃんの影響が大きくあるんですけど。

クラスメイトは皆食料確保や探索等を行っています。

派閥毎に分かれていて、少人数行動を基本としていますね。

橋本君に、今回はどうする？ と聞かれますが、れずちゃんは身体能力は平凡ですし、何よりRTAでこんなクソ長いイベントをまともやってなど居られないため、このイベントでは基本的に何もしない予定です(ニート)。

こいついつも何もしないな？ これそういうRTAなので……

RTAでさえなければ、せめてチャートが別のものでさえあれば、神イベントではあるんですけどね。実際、これと次の特別試験が面白かったからよう実にハマったという冗貴は多いでしょうし。二次創

作兄貴たちも、その2つの試験を書きたくて始めたという人がかなりの割合を占めるのではないか、と思います。

解説に戻ります。

もし何もしなければいい漢と戸塚君が、事前に目を付けていた洞窟に行き(やはりいい漢は普通に優秀)、そして逸った戸塚君が先走ってスポット占有をしてしまう。そして洞窟から出たところを綾小路君に見られてしまう、という原作の流れが踏襲されます。

いい漢が戸塚君のミスをリカバリーする偽装工作をしますが、我が綾小路君はそれを普通に見抜くんですね。とはいえ証拠は何も無いため結局はただの予測のギャンブルでしかない筈なのですが、きっとそこは私にはわからない綾小路君の何かがどうにかしたのでしよう。

争いこそはしないものの、派閥の違いにより集団行動を取れず、2人でしか居れなかったという弱点を突かれるわけです。

とはいえ、既にれずちゃんに依存している綾小路君に見抜かれるだけなら問題無いので放置します。

今の状態だと、前回言ったように綾小路君はれずちゃんにAクラスのリーダーを指名してもいいか、と許可を求めるようになっていて。

それより、問題なのは……

来ましたね、Cクラスのリーダーである龍園君です。

彼は、洞窟を拠点としたAクラスに絡んできて(ウホッ)、物資を提供したり、他クラスのリーダーを教えたりするからPPを寄越せ、という取引を持ちかけてきます。

ポイントに余裕がある。厄介な坂柳さんが不在。葛城君がリーダーなために堅牢な策を取ることが予測され、リーダー当てが困難だと思われる。そんな今のAクラスを狙った作戦。悪くない策だと思

います。スパイ関連のガバガバ作戦を除けば、ですが（一番肝心な所）。

流石にBとDの両方に1人ずつスパイ派遣するのはね……しかもスパイの成功が前提の作戦はなあ……

まあその取引自体は好きにさせればいいのですが、問題なのは、低乱数でいい漢が甚大なるミスをしてしまうことなんですよ。

何をするかというと、リーダー当てに失敗した場合はPPの取引は白紙、という条文を付け忘れてしまうことがあるのです。

他クラスルートだとそんなミスはしないのですが、どうやられずちゃんの活躍や戸塚君のミス等が重なった結果、いい漢が焦ってしまふことがあるみたいなんですよね。

というわけで、取引の時は2人の横で話を聞いておきましょう。

少女取引横見中……

!?

やっぱ忘れてるねえ！ 失敗したときの備えをねえ!!

大切な条文が入ってないやん!!!!

いやー危なかつたです。まさかこんな事で今まで完璧だったチャートを崩すわけにはいかないのです。

PP自体は別にどうにかなるのですが、これを放置したらいい漢が失敗した自分を責めすぎてしまい、クラス内での立ち位置も完全に失ってしまうというもう完全に使えない人材になってしまふんですよ。

彼にはまだ、色々な役割があるので。

ということを取引に口を出し、いい漢に落ち着けと言い付けて、龍園君の舌打ちを聞き、橋本君が何やら嬉しそうな顔をしているのを眺めてから自由行動パートに入ります。

このパートは、基本的にスキップで大丈夫です。

試験5日目にのみ操作を入れて、綾小路君が作戦を立てた直後を見計らって接触しましょう。

少女自由行動中……

5日後の午後になりました。

拠点を抜け出して綾小路君に会いに行きましょう。

Aクラスは拠点をガチガチに固めては居ますが、拠点を抜け出す事を自体を禁止されては居ません。まあ、そうじゃないと物資の確保が難しいため当然ではあります。それに、以前の行動のおかげでれずちゃんには自由が許されているため、誰も何も言ってきたません。

少女移動中……

居ました、綾小路君です。

5日目は、綾小路君がDクラスに発生した数々のイベントを経て本格的に作戦を決定したものの、まだ具体的に行動には移していない状態なため、今が接触するベストタイミングとなります。

早速彼の考えた作戦を搾り出しましょう。

なになに……？

わざとスパイの伊吹さんにリーダーの堀北さんのカードを見せた上で、堀北さんを体調不良にさせてリタイアさせる。それによってリーダーを自分に変える事でC、Aクラスに誤答させる。

更に、Cのリーダーは龍園君で、Aのリーダーは戸塚君だと看破しているため、結果的にDクラスが1位になるという作戦を立てた？

そして、それをやるとAクラスのポイントが減るがやってもいいか？

一旦ここは1位になって茶柱先生を満足させる必要があるから、だつて??

クツ、好きにしろ！ (女騎士)

ここでは、彼の言うように一旦綾小路君に華を持たせてあげましょう。

何故なら彼の計画では、ここで結果を示しさえすれば茶柱先生をある程度抑えられる、と踏んでいるからです。

走者視点では、仮にれずちゃんが綾小路君の計画を破壊してDクラスを最下位にしたとしても茶柱先生は綾小路君を退学にしたりなどしない事はわかっていますが、ここは従っておくことでれずちゃんは綾小路君の絶対の味方なんだと示すことが出来ます。

実は、本イベントにおける行動とその目的ってほぼこれだけなんですよね。いい漢のミスは本来は無い筈のものです。ただ、こうする事で綾小路君の依存度が更にぐんぐん高まっていくため、このイベントは全スキップをしてはならないのです。

綾小路君が嬉しそうにしながら感謝の言葉を述べていますね。

次、何らかの特別試験が開催された場合はれずちゃんの好きにしている、と言っています。

ん？ 今、好きにしているって言ったよね？

一応、小遣い稼ぎと想定より心が弱い葛城君のメンタルケアのためにDクラスの指名をやめさせるとだけ言っておきましょう。そうしてもAクラスのポイントが170ポイントになるだけなので、未だDクラスがダントツ1位だから大丈夫な筈。

綾小路君は了承しました。

では、もうれずちゃんの前では能力を隠す事をやめた綾小路君とお別れして拠点に戻りましょう。

これから6日目の怒涛の展開が待っているわけですね。

まずは綾小路君が堀北さんを徹底的に虐めて体調不良にするわけですが、女の子のメアドを手に入れるために堀北さんを泥まみれにするとかいう完全に頭のおかしい行動(そんな頼みが了承されると思って頼んだ綾小路君もおかしいよ……)をする山内君は退学させられて当然だな！

綾小路君を含め、みんな堀北さんを虐めたいんですかね？ その気持ちは私にも良くわかります。

綾小路君は原作の機械化こそ防げましたが、その副作用なのかれずちゃん以外どうでもよくなりつつあるため、原作準拠の非道な行為も普通にするようになっていきます(順調)。

後に、綾小路君からこんな事をされたのが彼の口から判明しても特に怒らない堀北さんは聖人だと思うの。利用された事は必要な事と割り切れるのはわかりますが、気絶するレベルの体調不良にされたのは怒っていいと思うんですが。初期と人格変わりすぎィ！

そうして綾小路君や堀北さんが頑張る中、我らがれずちゃんはいとうと……特に何もしません(ニート)。

これが綾小路君籠絡ルート of 醍醐味です。彼が一人で(一人とは言っていない)勝手に頑張ってくれるんですね。

綺麗な手だ……(恍惚)。

7日目になりました。

最後の点呼の際に、他クラスのリーダーを記入する時間がありません。

そこでいい漢に、Dクラスのリーダーの名前は書くな、と言っておきましょう。当然その理由を聞かれますが、もしこちらの意見が間違っていたら今後はいい漢の下に付いてもいいから今は従え、と言ってここは無理に押し通します。

チラチラと真嶋先生の方を見ていい漢の視線誘導をすると、先生が驚いた表情をしてれずちゃんを見ている事に気付いたいい漢が、れずちゃんのもう確信しているかのような物言いも合わさり自らのミスを探して素直に従うことにしました。

真嶋先生からすれば、何で試験中特に何もして居なかったれずちゃんが6日目の夜のリタイアによるDクラスのリーダー変更を知っているのか完全に理解不能なので、いくら1年生の教師陣で最も優秀な先生であつても驚きを隠せないのは仕方ない事なのです。

そうして、船の前に全クラスが集まっている場面に移ります。

今から面白いものが見れる、と龍園君が言っていますが、彼の言う通り1人でサバイバルを頑張ったのに自分のクラスが0ポイントとかいう身体を張ったギャグを見せてくれます（原作でもこうなりませぬ）。

まあ龍園君はこれから頑張ってくれるので……

実際、よう実で恐らく最も人気や評価が高いのは、彼が色々と頑張った末に綺麗さっぱり敗北する7巻か、今回の無人島編の3巻、次の特別試験のある4巻のどれかでしょうし。イベントの完成度自体は3巻4巻の方が明らかに上ですので、やはり彼の頑張りが人気を呼んでいるのでしょう。私も龍園君は好きです（大胆な告白）。

そして嬉し恥ずかしポイントの発表ですね。
気になる各クラスのポイントは……

Dクラス：225

Cクラス：0

Bクラス：140

Aクラス：170

でした。

いい漢にDクラスのリーダーを書かせない以外は特に何もしなかったため、原作からの変化はAクラスがプラス50ポイントになっているだけです。ロス短縮と綾小路君の依存度を上げるためには仕方なかったんや。

龍園君は『0……だと……?』と言っています。ICGさんかな？

Dクラスの、仲間内で争うばかりで特に何もしていなかった人々が何故勝ったのかを理解もせずに喜んでいきますね。

喜ぶ資格があるのは綾小路君と堀北さん、後はせいぜい平田君くらいなものでしょうに。

……まあ、こんなことを神目線で偉そうに語ってはいるものの、仮に私がDクラスに居たとしたら彼らと似たような貢献度で似たような反応になってしまうのでしょうか（凡人）。

Aクラスはしくじった葛城君を責める人……より、Cクラスが0ポイントである以上、試験中何もして居なかったはずのれずちゃんの突然の発言が見事正解だったという事実を理解してビビっている人の方が多いです。

ほんと、側から見たら完全に理解不能ですからね、今回のれずちゃんのムーブ。とはいえこれで、想定よりミスに焦っていたいい漢への

ヘイトを減らすことも出来ました。やはり完璧なチャートだあ……

毎回意味不明な行動だった？ そうだね（ハート）。

一体何をどうしたんだ？ と内心ビビりながらも話しかけてくる橋本君を横目に今回はここまでです。

ではまた次回。サラバダー！

こいつ遂にやりやがったよ……なRTAはーじまーるよー

前は、無人島試験で特に何もしなかった所でしたね。

無人島試験が終わり、船上バカンスを楽しむ学生たちの姿が散見されますが、そんな中我らがれずちゃんは当然部屋に居ます（二ート）。

無人島サバイバルで疲れたからね、しょうがないね。

綾小路君が寂しそうにしている姿が目には浮かびますが、れずちゃんに部屋で休んでいると言われたら彼は何も言えないので（主導権無し）。

一緒に遊んで友達に噂とかされると恥ずかしいし……（SOR並感）。

そうして自由行動パートをいつものようにスキップしていると、無人島試験3日後の午後4時30分に生徒全員にメールと、メールの記載に各自従うように、というアナウンスが来ました。

このメールで、まずは次の特別試験における所属グループが判明するわけです。

れずちゃんがどのグループかと言うと……

はい。20時40分組、つまり竜（辰）グループですね。

まあ、これは最初からわかっていたことです。

れずちゃんはAクラスで誰が見ても明らかに一番優秀なので、各クラスでも優秀な面子が集められる竜グループに配置されるのは必然なんですネ。

リセマラの怪物れずちゃん程じゃなくても、キャラクターで頭脳関連のステが一定ラインを超えていると竜グループに配置されます。

それを示すように、このグループにはれずちゃん以外にも葛城君や龍園君、堀北さん等の優秀な面子が揃っています。

集合場所に向かうと……居ましたネ。堀北さんといい漢の葛城君が口論で熱く盛り合っています。平田君と、別グループですが付き添いの綾小路君の姿も見えますネ。綾小路君はれずちゃんの顔を見て嬉しそうな顔をしています。

いい漢と堀北さんの2人はれずちゃんの姿を見た瞬間に口を閉ざしてこちらを見てきました。平田君も緊張しているようです。それを横目に綾小路君に軽く手を振ってから部屋に入ります。

めちやくちや幸せそうな顔をする綾小路君と、既に関係を知っていた堀北さんや櫛田さん以外の人々、特にいい漢はめちやくちや驚いていますネ。

みんな、れずちゃんがDクラスの誰かと仲良くしているらしいという話は知ってはいるものの、実際に見るまではとてもじゃないけど信じられない情報なため未だ半信半疑だったのと、具体的な人物が誰かまでは一部の人以上はあやふやだった筈なので。

今までのれずちゃんの所業を思えば当たり前だよなあ。

ここで綾小路君との関係が本格的に葛城君たちにはばれてもみんな試験を優先してくれるため、色々聞かれることによる口スは抑えられます。面倒な坂柳さんも居ませんしネ。

逆に、ここからは更に周りの目を気にせず綾小路君とコミュを取れるようになります。

勉強会以降、関係そのものを隠してこそはいませんが一之瀬さんや

葛城君などのロスを生む人物からは相変わらず逃げ回っていたのが無くなるわけですね。

坂柳さんは食堂さえ避ければ基本的に出くわす事はありませんし。

少し遅れて来た龍園君はみんなが驚いている姿を見て、はてなマークを浮かべています。早く来ないからイベントを逃すのだよ、ドラゴンボーイ。

最初は一旦竜グループの自クラスのみで集まり、いい男の真嶋先生からルール説明を受けます。

なにになに……？

AとDクラスの全ての学生を干支になぞらえた12のグループに分け、各グループごとに一人だけ存在する『優待者』を見つけてるのが主題。

試験当日の朝8時に生徒全員に一齐にメールを送信。

優待者を選ばれた人間には同時にその事実も伝えられる。

試験の日程は翌日から4日後の午後9時まで（1日の完全自由日を挟む）。

1日に2度グループだけで指定された部屋に集合して1時間の話し合いを行う。

話し合いの内容は自由。

試験の解答は試験終了後午後9時30分から10時までのみ優待者が誰であったかの答えのみを受け付ける。

解答は一人一回。

優待者にはメールで答えを送る権利がない。

自身が配属された干支グループ以外への回答は全て無効。

試験結果の詳細は最終日午後11時に全生徒にメールで送信。

結果1

グループ内で優待者及び優待者の所属するクラスメイトを除く全

員の解答が正解の場合、グループ全員に50万PPを支給（優待者のクラスメイトも同様のPP）。

結果1に導いた際、優待者には50万PPではなく100万PPを支給。

結果2

優待者及びクラスメイトを除く全員の内1人でも未解答や不正解があった場合、優待者には50万PPを支給。

以下の結果に関してのみ、解答を24時間いつでも受け付ける。

結果3

優待者以外の者が、試験終了を待たず答えを学校に告げ正解した場合、答えた生徒の所属クラスはCP50獲得と同時に正解者に50万PP。

また優待者を見抜かれたクラスは逆に―50CP。更にグループの試験は終了。優待者と同じクラスメイトが成功した場合、答えを無効とし試験続行。

結果4

優待者以外の者が試験終了を待たず答えを学校に告げ不正解だった場合、答えが間違った生徒が所属するクラスは―50CP、優待者は50万PPを得ると同時に優待者の所属するクラスは50CP。更にグループの試験は終了。優待者と同じクラスメイトが不正解だった場合、答えを無効とし試験続行。

竜グループメンバー

Aクラス：葛城康平	西川亮子	的場信二	怜山静香
Bクラス：安藤紗代	神崎隆二	津渡仁美	
Cクラス：小田拓海	鈴木英俊	園田正志	龍園翔
Dクラス：櫛田桔梗	平田洋介	堀北鈴音	

クツソ制約の多い（そしてルールが長い）試験ですね。

しかし長いルールの割に、いざ実際にやってみるとめちやくちやシ

ンプルという、まさに神ルール。各クラス優待者が3人ずつになるような法則と配置といい、物凄くちゃんと考えられた完成度の高いイベントですよ。これを自力で考えた作者様には頭が上がりません。

当然、前回の無人島試験と同様に、よう実の中でもトツプクラスに人気のあるイベントとなっています。

実際、新規の方にはとりあえず1巻、無人島試験のある3巻、今回の試験がある4巻だけ読んでそこで終わって貰い、よう実って神小説だったなあ……と余韻と記憶を残して頂くのが1番いいのではないかとまで私は思っているくらいです。

無人島試験同様、ここが書きたいと思って2次創作を始めた兄貴は多いはず。その2つの試験は他と比較しても手を入れられる余地がめちやくちやありますしね。

これがRTAでさえなければなあ……（無念）。

原作だと軽井沢さんがクソ長ルールを見て意味わからんと騒いでいましたが、この部屋に居るのはAクラスでも優秀と判断されたメンバーのため、みんな理解しているようです。

いい男の真嶋先生からの説明が終わりました。

いい漢の葛城君は早速作戦を考えるために自室に戻ろうとしましたが、ここでストップをかけます。

君、れずちちゃんにたくさん借りあるよね？　ここで返すんだよ！

ということ、まずはいい漢の連絡先だけ入手しておき、他の人に聞かれたくないから指示は後ほどメールで出すと言って自室に戻ります。

自室に着いたら、いい漢に指示を出します。

内容は、明日午前8時に優待者が発表されると同時に自派閥だけでもいいから優待者を判明させて、いい漢かられずちゃんにメールで教えるように、というものです。

本来使おうと思っていた中間試験過去問の貸しに加え、本走では無人島での貸し2つの合計3つ貸しがあるため説得の手間が省けました。

これで、2人の優待者の情報がわかります。

ついでに、橋本君に全グループのメンバーのリストを寄越す様に命令し、加えて無理でもいいけど坂柳陣営の優待者も可能な限り集めておくように、とも命令しておきます。後半部分は文面だと一見ダメ元なんです、橋本君は有能なため、1回目の会議が始まるまでに1人の情報は必ず集めてくれます。今回集めて貰いたい情報は坂柳陣営の1人分だけなので、それで完璧なわけですね。

更には綾小路君にも可能な限り情報提供して欲しい、と言っておきましょう。こっちは何の心配もありませんね。原作以上に張り切る綾小路君は、自分勝手なDクラスであろうと1回目の会議が始まるまでに確実に1人分は優待者の情報を提供してくれます。

葛城君は今回限りとはいえ、学年トップクラスに有能な3つの駒を持つれずちゃん……最強かな？

メールを送り次第、今日は寝ましょう。

朝になりました。

早速、橋本君からリストが届いていますね。

やはり有能な手駒だあ……

これが神室さんや鬼頭君とかだところはいかないですからね。ここまで早くリストを手に入れる事ができるサポートキャラは彼か榎田さんくらいなものですよ。

それはそうと、早速れずちゃんはリストを眺めています。

この段階で分かる事はまだ何もないため、記憶するだけになっているみたいですね。

とはいえ、学年全員分のグループを軽く見ただけで覚えられるれずちゃんはやはり化物。

そうして自室で過ごしていると、午前8時になり、優待者を知らせるメールが届きました。

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれませんでした。』

グループの1人として自覚を持って行動し試験に挑んでください。

本日午後1時より試験を開始いたします。

本試験は本日より3日間行われます。

竜グループの方は2階竜部屋に集合してください』

はい、これも決まっている事ですね。

竜グループの優待者は榎田さんなので（ネタバレ）。

では、このまま自室で手駒たちからのメールを待ちましょう。

少女待機中……

お、来ましたね。

まずはいい漢の葛城君からです。

彼から来たのは自派閥の2人の名前。

ふむふむ、了解です。
ではまた待機しましょう。

少女待機中……

また来ました。

今回は綾小路君からですね。

Dクラスの、櫛田さんでも軽井沢さんでもない優待者1人の情報です。平田君から聞き出したのでしょうか？

全グループのリストと、別クラス1名を含めた3人の優待者が明らかになったこの時点で怪物れずちゃんは優待者の法則を導き出しましたが、一応念の為に橋本君の連絡を待ちます。

少女待機中……

はい、来ました。橋本君からです。

坂柳陣営の1人の情報で、想定通りの人物でした。

これで優待者の法則をほぼ確定出来ました。後は一応午後1時の会議で対象人物の様子をお得意の知力ステを存分に使って観察し、判断すれば大丈夫です。

ここでいう優待者の法則は、簡単に言うと十二支の順番Ⅱ優待者の名字の順番です。

竜（辰）グループなら辰Ⅱ5番目の干支。つまり50音順で5番目の人物が優待者。

つまり、安藤↓小田↓葛城↓神崎↓櫛田 という順なので、竜グループの優待者は櫛田さんとなります。

他には、たとえば卯グループなら 卯Ⅱ4番目の干支で、綾小路↓一之瀬↓伊吹↓軽井沢という順なので、軽井沢さんが優待者となります。

こうして、有能な駒とれずちゃんの化物ステにより、会議が始まる前にほとんど試験を終わらせることが出来ました。

戦いは、始まる前に終わってるんやなって。

橋本君と綾小路君に導き出した法則を教えてから会議に臨みます。

二人には、まだ確定じゃないから指名はれずちゃんが櫛田さんを指名してからにするように、という命令をしておきます。綾小路君のグループは優待者が軽井沢さんである以上指名できませんしね。

更に綾小路君と橋本君には両方ともれずちゃんの協力者であること、法則を教えたこと、そして互いの連絡先を教えておきます。

これで、2人が連携を取ってくれるようになります。

更に綾小路君には追加で、弁当を作ったり、休日デートをしたりするのは綾小路君だけだと教えておきます。れずちゃんはやはり悪女（確信）。まあ事実なので問題無いのですが。

こうすることで、我らが綾小路君がほとんど完全体に近づいていきます（手遅れ）。

そうして、ほとんど茶番と化した会議が始まりました。

原作通り、自己紹介の後Aクラスはいい漢が立てた作戦である、話し合いをしない体制を取っています。

我らがれずちゃんは無言で櫛田さんを観察していますね。当然、化物ステのれずちゃんが櫛田さんを観察していることに気付く生徒は居ません。

原作でも高円寺君が直ぐに優待者を見抜く事が出来たように、高円寺君以上のステを持つれずちゃんなら簡単に優待者の櫛田さんを見抜く事が出来ます。櫛田さんは嘘が非常に上手い女の子なのですが、流石に優待者の当たりを付けられた状態で判断力A+を1時間の間誤魔化し続けるのは無理があります。

これで確信が得られましたね。

即座に竜グループを終わらせてから綾小路君と橋本君に法則がほぼ確定したとメールで伝え、後は好きにさせます。

いい漢の葛城君がみんなの前で堂々と優待者を指名したれずちゃんに詰め寄って来ます。が、橋本君にも法則を教えたから後は君たちで好きにして、どうぞ。と言ってあしらいます。

そもそも法則なんてものがあるのか、そしてもう見つけたのか、とみんなビビっていますね。

何せまだ1回目の会議の時間が終わってすらいませんから。とはいえ、これで残り時間は自室でスキップ出来ます。

部屋を眺めてみると、ビビる生徒たちの他に、悔しさを隠し切れない堀北さん（かわいい）と、動揺をどうにか誤魔化そうと頑張る櫛田さん（かわいい）、そして何やら楽しそうに笑ってはいるもの冷や汗を隠し切れていない龍園君（不審者）の姿が見えます。

冗談は置いておいて、無人島に加えて今回の試験で龍園君に改めて目を付けられますが、綾小路君を手駒にした以上もう彼がれずちゃんに出来る事は何も無いのでどうでもいいです（無慈悲）。

いざという時は我らが原作主人公に処理して貰えばいいのですか

ら。

では、自室に戻ってスキップしましょう。
「れずちゃん」の船上試験はこれで終わりです。

少女待機中……

おや？ まだ1日目なのに特別試験が全て終了したようですね。
一体何があつたんでしようねー

というわけで、余った時間は綾小路君と堂々とコミュをします。
残り2日と少しは、ここ最近一緒に過ごせなかつた分もうずっと彼
にべつたりしてやりましょう。

映画に演劇にスパにレストラン。

夏休み前に購入した水着の使い道がようやく出来て良かったです
ね。

綾小路君は余りの幸せぶりとれずちゃんの水着姿の魅力にやられ
て完全に緩み切った顔になっています。

陰から見ている佐倉さん？ もう君のルートなんてある訳が無い
よ？

この段階まで来たら、面倒な坂柳さんが居ない以上周りの目など最
早一切気にする必要はありません。

仮に話しかけられても適当にあしらえばロスはほとんど無い為大
丈夫です。絡まれる確率自体かなり下がっている筈ですしね。

少女バカンス中……

最終日になりました。
嬉し恥ずかし結果発表の日ですね。

原作での結果は、結果1が1グループ、結果2が4グループ、結果3が5グループ、結果4が2グループです。

それがどうなったかというと……

なんと、全グループ結果3になりました。

あつれーおかしいねー何が起こったんだろうねー（棒）

ちなみに、CPとPPの推移は以下の様になりました。

Aクラス：CP 300	裏切り者9名：各50万PP
Bクラス：CP 150	PP 0
Cクラス：CP 150	PP 0
Dクラス：CP 0	裏切り者3名：各50万PP

一体何が起きたんでしようねー（天井）。

開始1時間足らずでAとDだけが全優待者を知ってたらそりやそ
うなるんだよなあ。

この結果ということは、既に綾小路君は隠れる事を止めています

ね。まあ、れずちゃんに依存してしまった今となつては暗躍に拘る理由は皆無なので当然ではありませんが。

言い訳としては、堀北さんと一緒にれずちゃんや橋本君と取引をして、指名による150万PPを全て渡すことを引き換えにどうにか法則を聞き出した、といったところでしょうか（マッチポンプ）。

一応クラスの為にはなっているため、れずちゃんに全面的に協力しているという裏切りがバレたりはまだしない筈です。それどころか、完全に詰み状況から被害を最低限に抑えたヒーロー的な扱いを受けるでしょう。

橋本君は、それはもう大量のPPを手に入れているでしょうね。後ほど役に立ちます。

ちなみに、綾小路君が軽井沢さんを手駒に加えているかどうかは、れずちゃん視点だとわかりませんが、まあ初日はあれで2日目からはれずちゃんと付きつきりですからね。望み薄でしょう。そもそもれずちゃんと橋本君が居る以上、軽井沢さんの存在価値はほぼ無いです。とはいえ、綾小路君の性格上、駒に出来るならとりあえずしておくかの精神で何処かのタイミングで取り込んでいる可能性もあるにはありますが、別にどうでもいいです。

ここまで言ってしまうえば勘のいい兄貴もそうでない兄貴もみんなお気付きでしょう。

はい。原作破壊ですね。

ここまでは基本的に原作準拠だったので、この試験からは割と自由に動いて大丈夫です（動くとは言っていない）。

1年生時の特別試験の残りは体育祭、ペーパーシャッフル、林間学校、退学投票、クラス間対決になるわけですが、ここまで来てしまつたら後はもう余程の事が無い限りほとんど問題無いですからね。綾小路君の依存度も2度の特別試験で十分跳ね上がったため、これから

はそこまで注意しなくても1年時終盤には完全体に出れます。

龍園君の暗躍もれずちゃんには無意味ですしね。軽井沢さんとれずちゃんとは流石に能力が違い過ぎる上に、身体能力が平凡な以外付け入る隙は皆無。その唯一の弱点も綾小路君が完璧に守ってくれるのでね……

一応、ここでCクラスとDクラスが入れ替わらないように調整はしています。何もしなければ無人島試験終了時点でCPに180差があるため、ここで150詰めてしまっても体育祭までに入れ替わることは防げます。

現時点でのCPはというと、

Aクラス：CP1525

Bクラス：CP653

Cクラス：CP342

Dクラス：CP312

となっています。これももう無理ゾ。

ここでぶつちぎってしまえば、1年時の残りの試験はCPを一気に詰められる様なものでは無いため、2年以降の全スキップに大きく役立つ訳です。

他クラスの心を完全に折ってしましましょう。

B、CクラスとDクラスの差は大きく縮まっているため、茶柱先生も文句は言えないはず。明らかにれずちゃんが化物過ぎるのが悪いので文句の言い様があるはずが無いのですが。

先生たちの目線を含め、側から見てれずちゃんは今まで碌に出ず、ほとんど動かなかった筈なのにいざ動いたら爆発的な結果を出す。まさに機をうかがう獣の究極系。これはどう見ても怪物さんだあ……。

他クラスの生徒からすれば（Aクラスから見ても）突然の急展開ですが、この為に夏休み前まで色々してきたわけですからね。敗者はいつとも、手遅れになってから自分の惨状を振り返って後悔するのです。

まあ、既にどう見ても手遅れなこの状況でも諦めない人は未だ一部いる為、もう少しこのRTAの解説は続くんですけどね。

ここからどんどん不幸になる人が出てくるため、お楽しみに。

とりあえず、あの人たちを退学させる、または全く使い物にならない状態にするまでは解説を続けます。

一体誰だろうねー（すつとぼけ）。

もうほとんど消化試合と化したところで今回はここまでです。

ではまた次回、サラバダー！

5、6―裏

葛城康平の結論

俺は、昔から学問に力を入れて励むと共に人の前に立つ仕事を率先して行ってきた。

誰かに認めて欲しいという気持ちも無い訳ではない。そもそもその気持ちで行動することが間違っているとも思わないが。

だが、それ以上に俺自身が、皆を率いて一致団結して事を成すことに大きな意義と喜びを感じる人間だからそのような行動をしている。リスクの高い策は好まない。

何故なら、それで失敗してしまった場合自分だけでなく俺に付いて来てくれる仲間にも代償を与える事になってしまうから。

クラスメイトに坂柳という人物がいる。

彼女は非常に優秀で、人の上に立つだけの才覚を持った人間ではあるが、俺とは真逆の方針を取る。

別に、彼女が間違っているという訳ではない。

ただ、彼女のやり方だと今は成功しているかもしれないが、それを続けているといずれ仲間が傷ついてしまうのではないかと考えてしまおうとしても俺は坂柳の案に同意する事が出来なかった。

だから、俺は坂柳とクラス闘争に向けたクラス内リーダー闘争などという、側から見たら極めて愚かな行動をしている。

本来なら他クラスと競い合うことに注力すべきにも関わらず内々で争うという愚行。更に言えば、クラスで一番優れた人間は俺でも坂柳でもない事など明らかだというのに。

そのリーダー争いにあたって、夏休みに俺は大きなチャンスを得た。

無人島試験と船上試験という、2つの特別試験だ。

何故なら、対立候補の坂柳が体調の問題でその2つの試験に参加する事が出来なかったのだから。

ここで実績を残す事が出来れば、俺のリーダーの座は確約されたも同然と言ったところだろう。坂柳の身体的ハンデを利用するよう得心苦しいが、この機を逃す訳にはいかない。リーダー争いなどさっさと終わらせてしまえばいいのだ。

だが、俺はその1つである無人島試験でしくじってしまった。

俺は、無人島試験において、Aクラスの拠点に取引のために訪れて来たCクラスの龍園と手を結ぶ事にした。

契約内容は、Cクラスがサバイバル物資とB、Dクラスのリーダー情報を提供する代わりに、Aクラスが龍園に莫大なPPを支払うというもの。

PPの額は高いとはいえ、無人島試験で大量のCPを獲得出来れば十分ペイ出来るため、俺はその内容に署名する事にした。

龍園が取引しに来る前、試験中のリーダーにしていた弥彦が逸つて周囲を確認する前にスポット占領をしようというミスをしてしまい、慌てて俺がカバーするための偽装工作をした。

が、内心の不安が拭い切れなかった。

何故なら、俺にはあの偽装工作など簡単に見破れるであろう人間に心当たりがあるからだ。そいつは一応Aクラスの味方ではあるが、優秀な人間であれば見破れるであろうという事実を具体的に想像出来てしまうと、どうしても心中にしこりが出来てしまっていた。

そのため、龍園が契約書に仕込んでいた罠……仮にリーダー当てを失敗してしまったとしても龍園に明け渡すPP取引はそのまま実行されてしまう、という罠に気付く事が出来なかった。

それを助けてくれたのは、先程偽装工作を見破られる姿を想像してしまった人物、怜山静香だった。

怜山は龍園との取引の際、何も言わずに俺の横に立ち、俺たちの契約内容を見ていた。まあ、それ自体は構わない。別に俺に害を成す行為では無いし、好きにさせていた。こいつには取引に口を出す事が許される程の実力がある事は既に確認済みなのだし。

そこで、怜山は龍園の罠と、それを発見出来なかった俺のミスを指摘して来たのだった。

そして、

「葛城君、落ち着いて。あなたは十分優秀なのだから」

と言って、その場を去った。

その時の俺の顔は、側から見たらとても面白いものだっただろう。何故なら、あの怜山が。

誰にも興味を示さず、あの坂柳だろうと片手間に一蹴する程のずば抜けた実力を持った人間が。まさか俺を励ましてくるとは思わなかったから。それに、怜山から見て俺が優秀と見做されていることも驚きだった。

俺は取引内容を改めて確認してから契約書に署名し、無人島試験を本格的に迎えることにした。

龍園はやはり気の抜けない相手ではある。だが怜山の言う通り、落ち着いて対処しようと思えば出来ない相手ではない。俺は恥ずかしさを感じると同時に、怜山への感謝の気持ちを抱いていた。

怜山はあれから特に動く事は無く、基本的に拠点に居るか、物資の

補充の為に外に出るといふ普通の生徒と同じ事をしていた。

彼女は知能こそずば抜けているが、身体能力は普通の女子生徒と相違無い為、この手の試験だと流石に出来る事はないか、と俺は思っていた。

しかし、俺はその考えが間違っていたと最終日に知る事になる。

最終日、俺は龍園から知らされたDクラスのリーダー、堀北鈴音の名前を記入して提出しようとしていた。

そこに

「葛城君。Dクラスのリーダーを指名するのは止めて」

などと怜山が言って来た。

「……何を言っている？俺はリーダーカードに堀北の名が書かれていたのを確認したんだぞ？」

そう。

龍園にリーダーを口で教えられたというだけでなく、俺は実際にこの目でそれを確かめたのだ。

だから、リーダーの名前が間違っている筈がない。

それにも関わらず

「リーダーは変更されている。もし私が間違っていたら、今後私はあなたの下に付いていいから」

「一体何を言ってる……」

そこまで口にしてから、ふと何かを感じて視線を少し横にずらしたところ、真嶋先生が怜山に驚愕の表情を向けている事に気付いた。それは、何を言っているんだ、という呆れや困惑の顔ではなく、何故それを知っているんだ、と言わんばかりの驚愕の顔。

それを見て、俺は自分のミスと怜山の正しさを察した。

リーダー変更は、確かやむを得ない理由が無ければ出来ない、と説明された筈。つまり、逆に言えば何かしらの事情さえあればリーダー変更は認められるということを指すと今になって理解出来た。

試験中、特別な事は何もして居なかった筈の怜山が何故Dクラスが俺でも今まで理解出来ていなかったその制度を利用し、リーダー変更を実際に行ったのかを知っているのかはわからない。

だが、俺はDクラスのリーダーの名前は記載しない事にした。

その結果、龍園はしくじってCクラスが0ポイント、Dクラスがトップとなり、Aクラスは2位。怜山の言葉が正しい事が証明された。

俺は、自分の失敗を恥じていた。

龍園の策に乗っかり、自分では特に何も動かなかった末の敗北。ルールの穴を考慮しなかった故の敗北。それはクラスメイトから詰られても仕方ない、無様な敗北だった。

だが。

「一体何をどうやった……?」

その言葉が誰から出たのかはわからない。だが、皆の意識はしくじった俺の責任より、どうやってリーダー変更を見抜いたのかさっぱりわからない怜山への驚愕と畏怖の方へと向いていた。

まさか、怜山はクラスメイトの反応がこうなることすらも読んでいたのだろうか？

……一体彼女には何が見えているのだろうか。

俺に怜山のような能力さえあれば、もつと皆を正しく率いる事が出来たのだろうか。

俺はそのようなことを考えてしまっていた。

無意味な仮定とわかっていながら。

その怜山からついさつき、

『明日の午前8時、優待者のメールが送られ次第、葛城君の派閥だけでいいから優待者を割り出して、私に伝えて欲しい』

という指示が来た。

俺はそのメールを見て、先程真嶋先生から船上試験の説明を受けた直後の出来事を思い出す。

『葛城君。あなたは私に借りがある筈。返して貰うから、連絡先を教えてください』

『……連絡先だと？ ……いや、構わない。確かにお前には恩が沢山ある事は事実』

本人が言っていた通り、俺は怜山に多数の借りがある。

中間試験、無人島試験での契約書、無人島試験でのリーダー当て。更には俺の失敗に対するヘイト逸らし。

ここまでの借りがある以上、俺は怜山に恩を抱きすらしていた。

だから、今回の指示には素直に従うことにした。

そもそも、クラスで優待者を共有するというのは至極当然の事。

俺と坂柳の派閥争いでそれが難しくなっているだけで、本来ならば
怜山に優待者を教えることは当たり前前の事ではない。

俺は午前8時になった直後、派閥の人間2人から知らされた優待者
の情報を怜山に送信した。

奴がこの情報を何に使うのかはわからない。

だが、俺は俺で自分で考えた策を実行するだけだ。

無人島試験では、龍園の立てた策にただ従う事により失敗した。

だから今回は、決して失敗し得ない安全策を俺が立てた。

この作戦ならば、何の問題も無いはずだ。

俺はそう考えて、試験に臨む事にした。

『——ではこれより——1回目のグループディスカッションを始めま
す』

試験が始まった直後に俺は立ち上がって提案する。

「Aクラスの葛城だ。学校からの指示があるから、一先ず自己紹介を
しよう」

俺の提案にいち早く反応したのはBクラスNO2の神崎。

「そうだな。この部屋の話を学校側に聞かれているかも知れない以上、俺もその意見に賛成しよう」

やはり優秀な男だ。

明らかに各クラスの中でも優秀な人材が集められているこの竜グループに一之瀬が居ないのは疑問だったが、この男が居るならばこの場において一之瀬の代わりは十分務まるだろう。

「まずは俺からしよう。葛城康平だ。よろしく頼む」

「Aクラス、西川亮子です。よろしくお願いします」

「的場信二です。よろしくお願いします」

ここまでがいい。

だが、あいつは自己紹介をちゃんとしてくれるのだろうか？

俺には一抹の不安があった。

「怜山静香です。よろしくお願いします」

俺を含め、Aクラスの3人ともほっと胸を撫で下ろした。

ただ立ち上がって名前を言うだけの普通の行動だったが、それだけの事なのに安心感がとても強く感じられた。

そんな俺たちの反応を他所に他クラスの生徒たちは、みな怜山に緊張した目線を向けていた。

それは当然の反応だ。

間違いなく学年で最も優秀な、天才とも呼べる人物が、この試験で一体何をするのか。気にならない奴が居る筈が無い。

特に今回は、試験の説明があった直後に怜山が俺に話しかける姿を見ていた人間が多々存在した以上、多少なりとも奴に動く気があると

というのは全クラス周知の事なのだろうから。

怜山への反応は置いておいて、一先ず全員が自己紹介を終える。龍園が自己紹介を促す俺に無意味に食ってかかるといいう事態はあったが、奴も学校側からのペナルティを恐れたか、結局は自己紹介をした。

自己紹介を終え、俺は早速昨日から考えていた策を実行した。そもそも話し合いの場を設けない、という策だ。

こうすれば、少なくとも結果³で狙い撃ちされるのを避ける事が出来るから。

堀北に苦言を呈され、龍園につまらないと詰られたが、構う事は無い。この策ならば既に大量リードしている俺たちAクラスは確実に得が出来るのだから。

策は会議が始まる前にクラス全員にメールで伝えた。

怜山にも一応送信したが……彼女がどう動くのか、俺にはさっぱりわからなかった。もし動いたら止める術は無い。だから俺はただ祈るようにして怜山を見るしか無かった。

怜山は、特に誰とも話す事なく、部屋の人々を適当に眺めているようだった。

俺は一先ず安心した。

まあ、怜山の性格上、誰かと仲良く話すなんて可能性の方が低いだろうとは思っていた。だが、どうしても不安が拭いきれなかったのだ。

そうして10分程度時間が経過したところ、それまで適当に部屋を眺めてぼーっとしているように見えた怜山が、唐突にスマホを弄り始めた。

まあ、それ自体は別段変わった事でも何でもない。
だが、俺は何故かスマホを弄る怜山から目を離す事が出来なかった。虫の知らせとでも言うべき何かの予感が俺の中にあっただのだ。

そうして少し経ち、怜山がスマホの操作をやめた瞬間に俺たち全員
のスマホにメールが来た。

まさか。

『竜グループの試験が終了しました。竜グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないで気を付けて行動してください』

竜グループの皆がざわつき、即座に全員が1人の人物に目をやる。
誰がやったかは明白。

俺は怜山の元に詰め寄った。

「怜山。俺はお前の事はある程度理解したつもりだ。きっと、何かしらの根拠があるのだろうし、その行動はいつも通り正解なのだろう」

そう。

こいつが間違えるなんて事は無いだろうことは既に理解している。
俺には怜山が何をどうやっているのかはわからない。何よりまだ10分しか時間が経っていない。一見あいつは10分間ただぼーっ
としていただけにしか見えない。それでわかれと言う方が無理がある。

しかし、それでも同格の天才ならばわかるような何かがあるの
だろう。
だが。

「だが、説明責任はあるんじゃないか？」

そうなのだ。

説明。怜山にはそれが致命的に不足し過ぎている。

説明さえしてくれたら、俺は何も言わない。

いつどこで何をしたいようが好きにして構わない。

正しいのは常に怜山の方なのだろうということはわかっている。

だから、せめて少しでも歩み寄りの姿勢を見せる……とまでは言わないが、最低限の説明責任くらいはあるのではないか、と俺は思う。

そんな俺に、怜山は本当に必要最低限、しかしながら試験の根本を揺るがしてくる衝撃的な説明だけをして来た。

「優待者の法則。橋本君にも教えたから、後はあなたたちで好きにして」

「優待者の法則……だと？」

俺は思わず呆けたような声を上げる事しか出来なかった。

そんな俺を一瞥し、怜山はそれ以上何も言わずに去っていった。

……優待者の法則。

確かに、そんなものがわかるというのであれば、最早全てが無意味。即座に指名して終わらせるだけで良い。

だが、ならば一体何故怜山はもつと早くに終わらせなかった？ 法則がわかっているならば、そもそも会議をする必要すら無かった筈。

いや、会議中あいつは自己紹介以外は一言も発しては居なかった以上、『会議をした』とは言えないが……とはいえ、理由として考えられるのは数パターンある。

1つ。

怜山はずっと法則について考え続け、あのタイミングで導き出した。

挙げておいてなんだが、これは有り得ないと言っていていいだろう。普通の人間ならそれが一番可能性が高いのだろうが、奴の常軌を逸した能力から考えると……法則があるとして、それを導き出す為にさしたる時間がかかるとは思えない。

いや、普通の人間にはここまで早く法則を導き出すなど不可能なのだ、そこを考えても仕方がない。とにかく、この説はあり得ない、という事だ。

1つ。

俺たちの反応を見て遊んでいた。

これも有り得ないだろう。普通の精神性を持った人間ならばそれもあり得る。例えば、龍園のような人間ならばそれをやった可能性が十分にある。

だが奴は、そんな少し捻くれているだけの一般人のような感性を持ち合わせては居ない。いや、龍園のように他者を甚振って弄ぶような人間の思考は俺には全く共感は出来ないが、そういう人間が居る、というのは一般的な事実としてある。少なくとも、あの怜山と比較してしまつては、龍園のような人間の方がまだ予測出来ると言わざるを得ないのだ。

1つ。

法則は導き出したが、100%そうだという根拠が無かつたため、その未来予知を思わせるような観察眼にて対象を観察し、確信を抱いた。

これが、一番有り得ると思われる。普通の人間ならば、自らが辿り着いた答えを真実だと考え、即座に飛び付く。優待者の法則などという莫大な利益を齎すものならば尚更だろう。

だが散々語る様に、奴には普通の人間の感性といったものを当て嵌めない方が良く。そう考えると、自らの答えにすら疑問を抱き、その法則を確定させるために少々の時間を費やした、と考えるのが一番合理的と思われる。あれ程の眼力があれば、優待者を見抜くのは容易だ

ろう、とは試験のルールが判明した時点で俺も考えていたことだから。

他にもあるかもしれないが、俺にはもう思い付かなかった。

そこまで考えてからふと部屋を見渡してみると、ほとんどの人間が戦慄した表情を浮かべており、言葉を発する者は誰一人居なかった。当然だろう。

奴のこういった振る舞いを幾度と無く見た俺たちAクラスですら驚愕を隠せないのだ。初めて目の当たりにした他クラスの生徒がこの状況に付いていけるとは到底思えない。

そんな中、いち早く気力を取り戻したのはやはりあの男。

「ハハハハハッ！ 面白れえ!! 無人島試験だとやる気が無いみたいだったが、いざ本気を出すとこうなるってか? ……しかし、だとすると……あいつと戦うのは最後か」

とはいえ、どんな悪辣な手段だろうと躊躇無く使い、獣のような眼光を誇るこの男でも、怜山に今すぐ挑むのは悪手と判断したらしい。変な所で冷静なのは、やはり野獣の本能が為せるもの、といったところか。

「まずはBとDだ。……葛城、せいぜい俺が奴らを潰してお前らと戦う準備を整える前にはあいつを従えておくんだな。まあ、お前にそれが出来るとは思えねえが」

「……………」

そうやって龍園は部屋を出て行く。

Cクラスの他生徒が慌ててその背に付いて行った。

怜山の手によって竜グループの試験が終わってから少し経った辺りで、全生徒の端末に再びメールが届いた。

『蛇グループの試験が終了しました。蛇グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないで気を付けて行動してください』

蛇グループ。

橋本が居るグループだった。

俺は直ぐに蛇グループの会場へと向かい、橋本に声をかけた。

「橋本。……俺の用件はわかっているな？」

「ああ、当然わかってるさ。いいぜ、場所を変えよう」

俺と橋本は、他の人間に聞かれない様にカラオケボックスに移動した。

カラオケボックスに到着してすぐに橋本は契約書を取り出し、俺からは見えない様にしながら話を始めた。契約書は会議前にあらかじめ作っていたようだ。

やはり、怜山は会議前から既に法則を割り出していたらしい。

「まず、俺の指名についてだ。女王様が指名してから直ぐに俺は、法則に従って導き出された蛇グループの優待者であるCクラスの奴にカマをかけた。どうなったかは言うまでもねえな？」

「それでお前は指名した、ということか」

その生徒が動揺を隠せなかつただろうことは想像に難くない。

何せ、開始直後にいきなりリーダー格が集結する竜グループが終わり、その直後にピンポイントで揺さぶりをかけられたのだ。

俺がその立場だとして想像しても、表情を動かさずに切り抜けられるとは流石に言えないのだから。

「これで葛城君と俺が集めたAクラス3人、竜グループのDクラス1人、Cクラス1人に、更に法則を使えば優待者の数は全クラスちようど3人ずつ。もう十分だろ？」

「……根拠は別に、いい。あいつを疑うのは愚かだとは俺ももうわかつてる」

俺らしくは無い発言。だが、流石の俺でも目の前の状況に対して頑なに理解を拒む程愚かではないつもりだ。

「ハッ！　そうかよ。まあ、ここまで事を考えたらそりやそうなるよなあ。葛城くんもようやく女王様に跪く気になったってか？」

「そうではない。だが、俺もこの状況を理解せず、怜山の力を未だ認めない程愚か者であるつもりはないだけだ。それに、怜山に集団を率いるつもりは無いだろう」

そうだ。怜山は、集団を率いるという事に一切の興味を示さない。

仮に怜山がリーダーに立候補していたとしたら、こんなことをせずとも最初から確実にクラスのリーダーは奴になっていただろうから。

「ハハッそれもそうだ。じゃあ、契約だ。残った他クラスの全ての優待者を指名したら、CPだけじゃなく、PPを合計350万得られるだろう？」

「……ああ」

当然、それは言われるだろうと予想していた。

問題はいくら要求されるか、だ。

200万なら、いい。

半額だと175万である以上、妥当な額だろう。

俺の派閥だけで指名させたら、150万を7人と陣営の貯金に割り当てる事が出来るから十分な成果と言える。

1人当たり10万で我慢してもらい、陣営に80万が追加される。それならば説得も容易だろう。

だが。

「300万だ」

わかっていた。200万で済む筈が無いことなど。

だが、300万となると、7人に10万ずつ与えることすら出来ない。説得も難航してしまうだろう。

「流石に強欲が過ぎる。200万だ」

俺は橋本に想定していた額を伝える。だが。

「わかってんだろ？ 最悪なのは、ここでもまごついて他クラスの連中が手を組んで優待者を当てさせ合うことだ」と

そうだ。それは誰でも理解出来る事。

Aクラスの一人勝ちを防ぐ為に他クラスで優待者を教え合い、極力損をしないやり方で互いに指名する、という策だ。

流石に、竜グループの会議終了からここまで早くクラス間で手を結ぶのは裏切りを考慮したら有り得ないと思う。特にBクラスは、一之瀬のグループが終わっていない以上まだ何もできない筈。

だが……それに期待をして時間を消費し、確定している優待者の指名権を失うなど愚かにも程があるというのもまた、誰から見ても明らか。

かな事実。

「それに、俺からすりゃあ他クラスに売ってもいいんだぜ？ 各50万どころか上乘せしてでも欲しい奴はいくらでも居るだろうさ」

堂々と裏切りを示唆した発言。

しかし、橋本がこう言う理由はわかる。たとえここでCPを多少失おうが怜山ならば容易に取り返す事が出来ると踏んでの事だろう。そうだとしたら、ここはCPに拘るよりもPPを数十、いや数百万手にした方が得なのだ、と。

ここまでの結果を見せられたら誰でも、そして俺でもそう思う。

怜山静香に対抗出来る人間など存在しないだろう、と。

だが、クラスを率いる俺がそれを許容する訳にはいかない。

「……わかってる。だが、せめて指名者に1人10万は与え、陣営に多少なりともプラスがないと説得が難しい」

俺は目を瞑って考える。

「…… 仕方ない、250万だ。これ以上は出せん」

「ハッ、いいだろう。取引成立だ！」

恐らく橋本は最初から250万を想定していたのだろう。そういう反応だった。

橋本は続けて、追加事項としてもう一つの要求を口にした。

「それと、どのクラスにAクラスの優待者を当てさせるかはこつちで決めていいな？ ……安心しろ、Dクラスだ。問題無いだろう？」

「いや、待て。どうしてそうなる。確かに当てさせるならばDクラスだろうが、そもそも話し合いを最後まで拒否してしまえばそんな事をしないで済む筈」

言いながら、俺にはわかっていた。

俺とて愚かではない。

橋本も怜山も一応はAクラスである以上、手に入るであろうPPを考えたならそれが最善手だろうとは理解出来ている。

「おいおい。わかってるだろ？ BとDの奴らだって馬鹿しか居ないわけじゃない。手を組んで死に物狂いで法則を割り出そうとすりやあ流石に試験終了までには法則がバレるだろうよ」
「……………わかった。好きにしろ」

言うが早いか、橋本は即座に契約書に最後の記載、俺の派閥が優待者を指名して得られるPPの内250万を渡すという文を追加し、俺に記名を求めてきた。

記名と同時に、橋本から法則と優待者の氏名を記したメールが送られて来た。きっと、メールの文面もあらかじめ作っておいたのだろう。

すぐさま橋本はこの場を去っていった。

先程言っていた様に、これから他クラス、可能ならDクラスにAクラスの優待者を指名させ、その分のPPを得るための交渉を開始するのだろう。

俺は直ぐに自分の派閥の7名に優待者の情報を教え、その7名がそれぞれ指名した。

少し経ってから、3名が指名したとのメールがほぼ同時に届いた。橋本が交渉した結果だということは最早考えるまでもない、

2日後に結果が発表された。

予定通り、Aクラスが他クラスの優待者を全て指名し、Dクラスが残りのAクラスの優待者を指名し、正解するという結果。

つまり全グループ結果3となり、Aクラスは完全独走状態となった。

無人島試験では、Aクラスという間違いなく学年最大戦力を率いているにも関わらず、活かしきれなかった俺のミスで2位という苦渋を舐めさせられたが、そんなもの完全に吹き飛ばす圧倒的な結果。

……もう、これは全員が思っているのではないだろうか。

誰が何をどうしようが、怜山静香が少し動くだけで全て無意味と化する。

クラス間闘争の結果は既に見えてしまった、と。

俺のこの学校における役割は、皆を率いることを厭う怜山の露払いに過ぎないのだろうか。

俺と坂柳のリーダー闘争に、一体何の意味があるのだろうか。

リーダーなど……最早ただクラスが崩壊しないようにするだけの役割しか無いのではないだろうか。

俺はもう、何もしない方が良いのではないだろうか。

……どうしても、そんなことを考えてしまう。

だが、決して悪い事が起きている訳では無いのだ。

少なくとも俺たちAクラスにとっては。

むしろ、怜山の行動は俺たちにこれ以上ない程の利益を与えてくれているという方が正しい。

俺自身、怜山には助けてもらった恩を感じているのが事実としてある。正直、それを素直に受け入れたくは無気持ちも少しあるが……それでも、受けた恩を忘れる程俺は恥知らずではない。

だから、俺はこれからも今まで通りに動こうと思っている。

仮に、それが何の意味も持たない些事であろうと。

俺に付いてきてくれる仲間を放り出すなど、受けた恩を忘れてのうとするなど、あり得ないのだから。

どんどんダイジェスト化してくるRTA、はーじまーるよー

前は、船上試験で原作を崩壊させたところでしたね。

特別試験が終わり、夏休みが残り半分。

ここは、原作4、5巻部分の青春イベントが挟まる時期ですね。

相も変わらず綾小路君とコミュを取るわけですが、彼は既にれずちゃんに依存している為、原作青春イベントにれずちゃんも参加する事が出来ます。

普通のコミュと一風変わったものになり、より大きな依存度上昇を見込めます。特に普段のコミュと比較してロスも無いうま味イベントの為、参加してしましましょう。

まずは……来ましたね。綾小路君からのメールです。

なにになに……？

『怜山、明日はケヤキモールの占い師の所に行ってみないか？』

出ました。占いイベントです。

夏休みも終わりに近づいたところ、綾小路君は話題の占い師が夏休み期間中のみケヤキモールを訪れていることを知ります。それで綾小路君はれずちゃんを誘ってみたわけですね。

もちろん、行くと返信しましょう。

ケヤキモールに着きました。

占い師がいると思われるフロアですが、カップル率高いですね

原作では腰が引けてしまいます綾小路君ですが、れずちゃんと一緒にいる今の彼は別の意味で恥ずかしいみたいです。

青春やなあ。

占いを受けるには二人一組になる必要があることを聞くわけですが、何の問題もありません。

通行人の雑談から、綾小路君は天中殺というキーワードを聞き出して興味を抱いたみたいですね。早速2人で占いを受けましょう。

こいつらもうどう見てもカップルなんだよなあ（今更）。

占いを終え、ケヤキモールを後にするためにエレベーターへ乗り込みましょう。すると、原作と違い一時撤退して後日また来るというプロセスを経ていないにも関わらず、原作であったようにエレベーターが故障により緊急停止してしまいます。備え付けの緊急電話も繋がりません。

うーん、このドキドキラブコメディイベント。

一緒に居る人間が恋愛色皆無の伊吹さんから愛しのれずちゃんに変わるだけどころも様変わりするんですねえ。

綾小路君は理性と必死に戦っていますね。かわいいなあ。

いくら微笑ましいとはいえ、あまり長く眺め続けるのはロスなので、さっさといい漢の葛城君に救助を要請しましょう。いい漢は驚きつつも救出に駆け付けてくれます。

いい漢はどうやって綾小路君がれずちゃんと仲良くなったのか気になって仕方ないみたいです。閉じ込められて疲れたと言って、感謝の言葉を残してさっさと帰ってしまいましたよ。

綾小路君の心が動きまくりのうま味イベントでしたね。

ちなみに、占いイベントの1週間前にいい漢の妹にプレゼントをお

届けするイベントがあるのですが、それはDクラスに所属しているか井の頭さんと仲良くなっているかしない限り参加不可となっています。

何故なら、発端がDクラスの井の頭さんの誕生日プレゼントを購入するために有志が買い物に出かけることになり、そこでいい漢が誰かのプレゼントを選んでいる場面に遭遇。渡す相手を推理するも全く予想できない、という一連の流れですからね。

そこにれずちゃんに参加するのは意味不明過ぎるので。

当然、本チャートにおいて綾小路君は井の頭さんへの誕生日プレゼント選びなどよりれずちゃんとのデートを優先するため、いい漢の妹にプレゼントが届くことはありません。占いイベントの救援要請も綾小路君ではなくれずちゃんがする事になります。

すまん、いい漢。

数日経ちました。

また来ましたね。綾小路君からのメールです。

なにになに……？

『怜山、悪いが余った水の備蓄は無いか？』

出ました。

断水中に発生する小イベントの、堀北水筒事件ですね。

もちろん、これを見越して水はバッチリ貯めてあります。

今から持つていくと綾小路君に返信します。

『怜山がこつちに来てくれるのか？ ありがとう。俺は今堀北の部屋に居る。部屋番号を教えるから水を持って来てくれると助かる。』

……いつも言っているように、堀北とは当然何も無いからな。水筒から手が抜けなくなったと助けを求められたから仕方なく来ているだけだ』

前回れずちゃんやんが橋本君に関して送ったメールと同じ様な追記をしてクソ長いメールを送って来ました。そんな風に心配しなくてもこっちは君が既にれずちゃんにゾツコンだと知っているのです大丈夫だゾ。

まるでどこからか依存度が上がる謎の音が聞こえてくるかのようだな！

そうして堀北さんの部屋へと向かうと……居ました。

我らが綾小路君と、水筒に手を突っ込んで抜けなくなったという惨めな姿を晒す堀北さんです（かわいい）。

思う存分馬鹿にしながら水を渡してあげましょう。

堀北さんは、よりによつて超えるべき最後の強敵と見做しているれずちゃんに哀れな姿を見られたという羞恥からか、顔を真っ赤に染めていますね（かわいすぎる）。

そんな堀北さんを綾小路君と一緒にひとしきり介護してあげてから部屋に戻りましょう。ぐずる子供の世話をする夫婦かな？

この後綾小路君も試しに水筒に手を突っ込んでみた結果抜けなくなるのかいう天井ネタがあるんですが、れずちゃん視点だと見れないので残念です。

数日経ちました。

またまた来ましたね。綾小路君からのメールです。

なにになに……？

『怜山、明日勉強会の時のクラスメイトと一緒にプールに行くんだが、良ければ参加しないか？ 大人数が嫌なら断っても全然いいんだが』

断っても全然いい（大嘘）。

まあ、仮に断つても好感度が今更下がる事は無いのですが、普通にコミュするよりも依存度が上がるんでね。他コミュと比較して口スも無いので喜んで参加します。

寮の1階に行き、綾小路君たちと合流します。

3馬鹿がれずちゃんとは久しぶりに会えて嬉しそうです。見た目は坂柳さんレベルの美少女ですし、3馬鹿は竜グループに居たわけでもないののでれずちゃんへの恐怖も無いですからね。彼らはこれから盗撮するためにクツソ重い荷物を持っているわけですが、堀北さんが気付いた違和感にれずちゃんが気付かない訳がありません。

櫛田さんはれずちゃんを見て一瞬顔を顰めました。この段階まで来てしまったらもう面と向かって喧嘩を売られるような事は無いため問題ないです。話しかける必要は皆無なので無視しましょう。

堀北さんは既に先日の水筒事件で深く関わっているため、特に反応は無いです。相変わらず、れずちゃんが綾小路君と仲が良い事には疑問を抱いているみたいですが。

綾小路君は最早当然言うまでもなく、れずちゃんと会えてめちゃくちゃ嬉しそうな顔をしています。

もう手遅れだね。

佐倉さん？ 何をもしもじょうじしているのかな？ 最初から君に勝ち目などないから何をしようが全部無意味なのにね（佐虐）。

佐倉さんがれずちゃんに勝る点など何一つとして無いからね。しょうがないね。

そうして何も言わずに彼らのことを観察していると、一之瀬さん率いるBクラス女子数名がやってきました。

一之瀬さんは何故かここに居るれずちゃんを見て目を丸くしていますね。

まさかこれが初対面になるとはな（すつとぼけ）。

再び何も言わずにそこに突っ立っていると、どうやら原作通り一之瀬さんたちとも一緒に遊びに行くことになったようです。

青春やなあ。

プールに到着しました。

更衣室に入り、お着替えタイムです。

女子の下着姿や水着姿を見る事が出来る、サービスタイムですね。ちなみに、再三言うようにこれは全年齢版のため裸は見る事ができないです。当たり前だよなあ。

それにしても、一之瀬さんと佐倉さんの胸は本当におかしな大きさですよ。れずちゃんも十分大きいのですが、2人に比べたら流石にね。

高1の胸か？　これが……（ANUE並感）。

あそこまで描写に差があるのに、設定の数値上は櫛田さんと堀北さんの胸の大きさがほとんど変わらないのはどう考えてもおかしい（確信）。

ちなみに、れずちゃんのステがあれば当然3馬鹿が仕込んだカメラを簡単に発見出来るのですが、見なかったふりをしてあげましょう。れずちゃんはこれを3馬鹿がやったとわかっていきますからね。後で綾小路君に色々問い詰める事にしましょう。

そして、これを誰が回収するかを観察することで、綾小路君の現状の駒が誰なのかを確認出来ます。まあ、そんなの別に知らなくてもRTA的には全く問題ない事なんです。原作ファン的には是非とも見ておきたいイベントなのでね。

今回は……どうやら佐倉さんのようですね。

軽井沢さんはまだ駒にしていけないようです。

最遅で体育祭までは駒に加えることもあり得るため、軽井沢さんファンの方はまだ希望を失わずに居ましょう（なお、どうあろうがヒロインには決してなり得ない模様）。

佐倉さんはストーカーイベントを越えると綾小路君に惚れてしまい、なんでも言う事を聞く都合の良い女になるわけですが、流石に能力不足過ぎるため原作綾小路君は別の駒を加えようとしています。

ただ、本チャートだと既に綾小路君の協力者にれずちゃんと橋本君が居ますからね。能力不足だろうと雑用と肉壁が出来る人材が居ればそれで良いので。まあ、先程言ったように体育祭までは駒は変わり得るため、これからも佐倉さんを使うのかどうかは知りませんが。

佐倉さん軽井沢さん以外の候補としては、松下さんや佐藤さん辺りが居ますね。極低確率で櫛田さんというパターンもあります。

ちなみに、佐倉さんを退学させるなどしてまだ誰も駒にしていない場合は堀北さんがカメラを回収することになります。

着替えが終わりました。

原作だとスク水、アニメだと私用水着だったこのイベントですが、ユーザーサービスピ精神旺盛な本ゲームだと、もちろん私用水着でのイベントとなります。

船上バカンス以来のれずちゃんの水着姿を見て、綾小路君が大変どきどきしているようです。

良かったね、スケベ小路君。

そうしてしばらく遊んでいたら、一之瀬さんにバレーを提案されました。

れずちゃんの前なので原作より遥かに張り切った綾小路君が無双して周囲から驚かれる姿を眺めたら本イベントは完了となります。

れずちゃんにカメラについて聞かれた時は焦っているようでしたが、結果的に綾小路君は大満足のようです。

いやーやっぱりロスの無いイベントで得られるものはうま味ですねえ。

そんなこんなで夏休みが終わり、2学期になりました。

ここから暫くは授業に体育の割合が増やされ、1ヶ月後の体育祭の準備が進められていきます。

いい男の真嶋先生がいつも通りルール説明をします。

なになに……？

全学年が赤と白の二組に分かれ勝敗を競い、AクラスはDクラスと共にB、Cクラス連合と戦う。

全ての競技に順位がつけられ、順位ごとにポイントを得られる。

全員参加競技の点数配分

1位15点、2位12点、3位10点、4位8点、5位以下は1点
ずつ下がっていく。団体戦は勝利した組に500点。

推薦参加競技の点数配分

1位50点、2位30点、3位15点、4位10点、5位以下は2点
ずつ下がっていく。最終競技のリレーは3倍の点数。

赤組対白組の対決で負けた組は全クラスCP100。

学年別順位1位を取ったクラスにはCP50。2位は変動しない。
3位は150。4位は100。

各個人競技で1位を取った生徒にはPP5000または筆記試験
+3点。2位はPP3000または筆記試験で+2点。3位はPP

1000または筆記試験で+1点。全順位とも点数を選んだ場合他人への付与は不可。

各個人競技で最下位を取った生徒にはPP-1000。所持ポイント1000未満になった場合は筆記試験で-1点。

各競技のルールを熟読の上順守すること。違反した者は失格同様の扱い。悪質なものについては退場処分とする場合あり。獲得点数の剥奪も検討。

最優秀生徒報酬：PP10万。

クラス別最優秀生徒報酬：PP1万。

全競技終了後、学年内下位10名にペナルティ。

1年生は次回筆記試験で-10点。

なるほどな！。

もうお察しの兄貴も多いでしょうが、れずちゃんはこの期間何もありません（ニート）。いい漢の葛城君に全てを任せましょう。

身体能力は平凡だからね。しょうがないね。

何のためのルール説明だー！

龍園君たちCクラスはDクラスにかかりつきりですし、Bクラスは特に搦め手を使っては来ないですからね。放っておいても先輩達が勝ってくれるため、何もしなくても体育祭は大してCPが変わらない以上は動く必要がないのです。

2年以降の全スキップの予兆が見えるな？

もちろん、いざやろうと思えば龍園君がやったように他クラスの参加票を手に入れることも出来ますが、結局のところ体育祭は個人の力量がないと得られるものがほとんどありませんからね。それにれずちゃんでは無理ですが、仮に最優秀賞選手賞を取った所で得られるポイントはたかが10万と少し。船上試験での数百万と比較してしまつたら、ね。

とりあえずここはおとなしくしておきましょう。

では、例によって1ヶ月の間、綾小路君との昼食と休日デート以外をスキップします。

この期間、綾小路君が1人勝手に色々動くわけですが、れずちゃんはその一切関与する必要が無いのでね。

やっぱAクラスルートを……最高やな！

少女1ヶ月スキップ中……

はい、体育祭当日になりました。

種目一覧は下記となります。

《全員参加種目》

100m走

ハードル競走

棒倒し（男子限定）

玉入れ（女子限定）

男女別綱引き

障害物競走

二人三脚

騎馬戦

200m走

《推薦参加種目》

借り物競走

四方綱引き

男女混合二人三脚

3学年合同1200mリレー

れずちゃんは推薦競技に何一つ参加しないため、全員参加種目8個のみの参戦となります(多い)。

PPを得る事も出来なければ失う事もないような身体能力なため、RTA的には特に語る事は無いイベントです。

本チャートだと喉から手が出る程PPを欲しがっている筈の綾小路君ですが、ここでは他の目的があるため、無双して最優秀選手賞を獲りに行ったりはしません。先程言ったようにそこまで大量のPPを得られるわけではありませんしね。

その結果、体育祭はほぼ原作準拠となります。

ただ、堀北さんが虐められたり、堀北さんが足を怪我したり、堀北さんが騎馬戦でリンチを受けたり、堀北さんがお望みのリレーに参加出来なくなったり、堀北さんが龍園君に冤罪をかけられて土下座を迫られたりと見所満載イベントなので、是非とも皆さんお楽しみください(堀虐)。

櫛田さんがDクラスを裏切って龍園君に参加票を渡したり、須藤君と高円寺君が盛り合ったり、堀北さんが絶望を押し殺して須藤君を説得して本格的な仲間にしたり、綾小路君がリレーで頑張る事で坂柳さんにホワイトルームバレしたり、綾小路君が暗躍の果てに龍園君に逆襲したりするのですが、れずちゃんはそこに一切関与しません。勝手にやってくれ。

少女体育祭参加中……

おや、借り物競走で綾小路君がれずちゃんの元に走ってきましたね。

なに？ 一緒に来て欲しいだって？

しょうがないにやあ……

綾小路君に連れられて無事ゴールしました。

Aクラスの皆は知っていて尚ビビっているでしょう。

ねえねえ、紙にはなんて書いてあったの？ の??

綾小路君は恥ずかしがって教えてくれませんね。

紙を渡された係員さんがその様子を微笑ましげに見ています。

青春やなあ。

私は当然、書かれたお題が『好きな人』だという事は知っているんですけどね、初見さん。

青春やなあ。

最終競技。

綾小路君がリレーでアンカーを務め、久しぶりの登場である生徒会長 堀北学君とデッドヒートを繰り広げていますね。

最終的に、2人のあまりの超スピード!? にビビった生徒が転倒し、綾小路君の走行妨害をすることで学君が勝利。

それを見た、これまた久しぶりの登場である我が銀髪美ロリが喜んでいきます。

何やら興奮しながられずちゃんに話しかけてきますが、適当に流してもらって大丈夫です。既にイベント中なので、この会話の発生によるロスも無いですしね。

これからロリが綾小路君に宣戦布告するわけですが……お前たちだけで勝手にやってくれ（丸投げ）。

これ以降は、本格的に何も気にせず綾小路君とデートする事が出来る様になります。良かったね、綾小路君。早く完全体になってね。

これにて体育祭は終了となります。

1巻分丸々何もしなかったよこいつ……（RTA）。

前回言ったように、もう大勢は決してしまっているのね。これからも割とこんな感じになります。

やっぱAクラス綾小路君籠絡チャートを……最高やな！

ではまた次回、サラダバー！！

7―裏

綾小路清隆の策略

夏休みの2つの特別試験。

それは怜山の方針を理解し、オレの今後の方針を決めるための実に有意義な試験だった。

まずは無人島試験。

オレは茶柱先生を一旦満足させるために、ここではDクラスを勝利させる必要があると考えていた。

そのため、5日目には堀北と伊吹を利用した計画を完成させた。

丁度そのタイミングで、怜山がオレに接触してきた。

明らかに計ったかのようなタイミング。

怜山はその未来予知じみた能力で、オレの思考や行動の全てを予測した上でこのタイミングでオレに接触して来たとしたか考えられない。

以前から時折見ていたためにもうわかっていた事だが、本当に常軌を逸した能力だ。

普段から、怜山は凄まじい判断力と学力を持っている。

それは一介の高校生が保有するような物ではなく、それだけでも彼女は屈指の能力を持っていると断言できるだろう。実際に、中学時点では同年代日本一の学力を持っていたとして有名だったらしい。

とはいえそこまでならば、精度は若干劣るかもしれないが、オレにも似たようなことは出来る。

だが、時折怜山はこうした一見未来予知としか思えないような観察、予測能力を発揮する事がある。

それはオレにすら不可能だ。
とてもじゃないがそれは努力で身につく様なものではない。
本物の天才にのみ与えられる唯一無二の能力と言っているだろうか。

仮に、オレと怜山の関係が違ったものであつたならば、オレは自身を葬り去る事の出来る人材を見つけて歓喜していたことだろう。

……無意味な仮定だ。

今のオレからしたら、怜山は純粹に頼りになる愛しい相手ではない。
い。

それに、オレは自身を葬るだの何だのに最早一切の価値を感じていないのだから。

オレは、もう予想はされているのだろうが、一応確認の意味を込めて怜山に自身の計画を語った。

そして、茶柱先生を満足させるために、ここはオレに譲って欲しい、と。

やはりそれは予想していた通りだったのだろう。

怜山は二つ返事で了承してくれた。

とても嬉しいことだ。怜山はクラスよりもオレの事を優先してくれている。彼女はやはりオレの絶対的な味方であり、何より優先すべき愛しい相手だ。

早くオレもAクラスに入って、少しでも長く怜山と同じ時間を過ごしたいものだが……まあ、焦っても仕方ない。堀北じゃあるまいし、あまり先ばかりを見て眼前が疎かになるというミスをおレは犯したりはしない。

こうして、オレは計画通り堀北をリタイアさせる事によるリーダー偽装を成し遂げ、Dクラスを1位にする事が出来た。

転換点となったのは、船上試験の方だ。

無人島試験中、オレは怜山に次の特別試験は好きにしていいたいと言った。それは、無人島試験でオレの計画全てを理解しながらも何もせずにもオレを勝たせてくれた怜山への義理立てと、彼女がこれからどういう方針を取るのかを知るといいう意味合いもあった。

その結果、凄まじい事になった。

怜山は1回目の会議が始まる前にも関わらず、即座に優待者の法則を割り出し、それを会議にて確定させた。

オレと、怜山の駒であり、非常に優秀な男である橋本とのコネも作ってくれた。優待者の法則を教えるから、後は2人で上手く連携しろ、と言って。

それはきつと、橋本にオレの実力を知らしめて、橋本がオレたち2人を裏切らないよう徹底させる意味合いもあったのだろう。

1つの行動に複数の意味を持たせるのは、やはり怜山の効率を求める性格ゆえか。

結果として、AクラスはCP300を得て、Dクラスは±0。B、CはそれぞれCP—150。

そして、オレたちの陣営はPPを50万×2+250万+150万、合計500万得る事が出来た。

好きにしていいたいと言ったが、まさかここまでの結果を出されるとは思っていなかった。

流星はオレの怜山だ。……いや、まだオレのではないが。

他の生徒たちはこの状況に、怜山の能力にまるで付いていけてないだろう。当然だ。オレにすら予測不可能だったというのに、他の奴に何かが出来るわけがない。

船上試験が即座に終わったことにより、オレたちには長い自由時間が出来た。きつと、怜山の行動はこれも見越しての事だったのだろうな。

味方としてこれ程頼りになる人間は存在しないと断言出来る。

映画に演劇にレストラン。

オレたちは残り2日と少し、思う存分にバカンスを楽しむ事が出来た。余りにも幸せ過ぎる時間。オレは思わずこれが本当に現実なのか疑ってしまった。

そして、今からスパなわけだが……

そう、スパ。つまり……水着である。

夏休み前にオレと怜山は水着を買いに行つた。その際怜山の様々な水着姿を見て、オレは思わず前のめりにならざるを得なかつた。

結局、怜山は少し大胆なビキニタイプの水着を購入していた。

……はつきり言おう。オレの好みド直球だと。

その観察眼にてオレの反応を見て決めたのだろうか。世界一無駄な才能の使い方だと言えるし、逆にオレにとってはこれ以上ない程有用な才能の使い方だと言える。

その日の夜は眠れなくなったものだったが……今回は2回目だから平気なはず。

そう思いながら心待ちにしていた所、

「待たせた？ っめんなさい」

そう言つて水着姿の怜山が現れた。

相変わらず、凄いスタイルだ。

長い脚に白く綺麗な肌。そしてばっちりくびれた腹部。

何より……いや、皆まで言うまい。

「い、いや、そんなことはないぞ。大丈夫だ」

オレはちゃんと言葉を発する事が出来ているだろうか？

そう思い、めちやくちや動揺しながらもなんとか言葉にしたところ、

「……えつち。今更だけど」

!?

「い、いや、そんなこと……」

オレは慌てて否定するも、

「目線」

「………すみませんでした」

「別に謝る必要はない。……行きましよう?」

その表情は決して不機嫌なものではなく、むしろ何やら楽しそうな顔を僅かにしている。

何というか、オレはきつと一生怜山には勝てないんだろうな。そう思わされる一時だった。

バカンスを終え、夏休み中盤に入った。

オレは有名な占い師がケヤキモールで占いをしているという情報を耳にしたため、怜山を誘ってみる事にした。
返事はすぐに来た。

『いっよ』

と。

好きな女子と一緒に占いに行く……何と魅惑的な話だ。

男ならば、誰しも1度は妄想した事があるようなシチュエーションではないだろうか。

オレは喜びを胸に、ワクワクしながら就寝した。

翌日、ケヤキモールの占い師がいるというフロアに着いた。

何というか……やけにカップルが多いな。思わず少し圧倒されてしまう。

その時ふと、側から見てオレたちはどう見えているのか考えた。

冷静に考えて、他人から見たらオレたちってカップルそのものだよな……

そう考えると、何やら恥ずかしくなって来た。

怜山はどう見てもこのフロアに居る女子生徒の中で最も美人だ。

そんな怜山と一緒に居るオレ……今更だが、現実味が薄いレベルで幸福だと言える。

通行人が天中殺について話していた。

天中殺とは、自分の悪い時期が見える占いとのことだという。

占いは、怜山と一緒に参加するイベントとしては楽しいものだ。

だがその実情としては、所詮オレにも出来るコールドリーディングの延長だろう。それを証明するために受けてみるのもいいかもな。

そうして2人で並び、占いを受ける。

怜山は、これまで退屈な生活を送ってきたが、今は人生を楽しんでいるようだ、と言われていた。そして、これからも今の道を進むならば、お主は幸せかもしれないが他の誰かが不幸になるかもしれない、と。

次に、オレは幼少期に過酷な生活を送って来たと言われ、そしてその後、宿命天中殺の持ち主だと言われた。生まれてからずっと運の悪い生活を送っていると。ただ、今の縁を大切にすれば不運かもしれないが幸せを感じることは出来るだろう、と。

一体何を言っている？ 今のオレが運が悪いだど??

加えて、大抵の子供は幼少期に自身が過酷だと感じるものの一つや二つあるだろう。しかも今のオレからすれば、あの生活すらも怜山に出会うための必要経費と思えば安い、いや安過ぎるものでしかない。

占いを終え、帰ろうとすると予言めいた助言を受けた。

遠回りせずに真っ直ぐ帰るように。

回り道すると余計な足止めを食らうぞ。

まあ、それもお主にとってはいい事かもしれないが、と。

基本テンプレで、ありきたりなものだったな。

所詮占いは占いだということ。

まあ、怜山と一緒に来れたのは楽しかった。

そう思いながら帰路についていた所、混雑していたために迂回して別のエレベーターに乗る事にした。

すると、普通に考えてそんな事はそうは起こらないと思われるよう

な、まるで計ったかのようなタイミングでのエレベーターの故障により、オレと怜山は2人で閉じ込められてしまった。

何だこのシチュエーション!?

まるで男子高校生の妄想を具現化したかのような……

こういう時って、吊り橋効果で恋愛に繋がるとかなんとか……

いや、それより密室で誰も居ない場所で怜山と2人つきり。

オレはどうすれば……いや、何を喜んでいるんだオレは。緊急事態だぞ。

理屈では事態の逼迫さをわかっていながらも、オレは内心の期待とどきどきを抑えられなかった。

そんな中、怜山はすぐに電話を入れて救助を要請していた。

……いや、確かに適切な対応ではあるんだが……オレとしてはもう少しこうしていたいという気持ちも……

そんなオレの望みも虚しく、割とすぐに葛城が助けに来た。

人選も見事と言っつていいだろう。義理に厚いこの男ならば騒ぐ事もないだろうし、救助に全力を尽くしてくれる筈だから。

オレと怜山は葛城に感謝の言葉を述べて、今度こそ寮に帰宅した。

……何というか、やっぱり少し残念だったな。

ある日、水道局のトラブルにより、寮の水がしばらく出ないと連絡が来た。

まあ、オレは特に問題はない。
料理も水を使わないものにすればいいからな。

そんな事を考えてから夕食の準備を進めていると、何故か堀北から着信があった。が、すぐに切れる。

不思議に思っつて折り返すが、出ない。

それからまた着信があったが、それもすぐに切れた。

そんな事を繰り返してようやく電話に応じ、更にぐだくだと意味のわからないことを言った果てに堀北はようやく困っていることを認め、部屋に来て欲しいと言った。

すると、堀北は水筒に手を突っ込んでいて、抜けなくなるという惨めな姿を晒していた。

もう2時間は格闘しているらしい。

台所に行つて石鹼を流し込んで抜くしか無いが、その為には水が必要。

オレも堀北も断水前に水を貯めては居なかったから、他の人を頼る必要がある。

「とりあえず、怜山に余った水が無いかを聞いてみる」

「!? 怜山さんつて……やめて!」

何故か堀北が怜山の名前を聞いて止めてきた。

「どういうことだ? 2人には特に関わりもない筈だから問題ないと思つたんだが」

「……確かにそうよ。けど、怜山さんは……」

そう言つて堀北は何故かぐずる。

だが、少しすると、

「……わかつたわよ。早く連絡して」

なんて言つて開き直つて来た。

「お前な……いや、今更だが」

怜山に連絡したところ、ここに水を持って来てくれると言われた。わざわざそんな手間をかけさせて申し訳ないが、オレの頼みを直ぐに聞き入れてくれるのは嬉しい。

そして。

「水、持ってきた。……堀北さんは？」

怜山は水を持ってきてくれたのだが、堀北が何故か隠れて出てこなかった。これだと水筒から腕を抜きようがない。

「堀北、怜山が水を持ってきてくれたぞ。早く出て来い」

「……わかったわよ。……よりによって怜山さんにこんな姿を見られるなんて……」

そう言つて渋々出て来た堀北を見て怜山が

「……ああ、なるほど」

「……っ!!!?」

なんて事を言ったため、堀北は羞恥からか顔を真っ赤にしていた。

……なんか怜山、面白がつてないか？

そんなこんなでオレと怜山は堀北の腕を水筒から抜くことに成功し、部屋に戻った。

堀北は終始顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしていた。

その後、水筒から腕が抜けなくなることなんてあるのか？ と試しに入れてみたところ、オレの腕も抜けなくなった。

……確かに、これは怜山には見せられないな。

堀北、お前の気持ちは今わかった。悪かったよ。

数日後、オレは池たちに女子を呼ぶための都合の良い友達扱いをされてプールに行くことにした。

その際、オレは怜山の事も誘った。せつかくなら、オレは怜山と一緒にプールで遊びたいと考えたから。

怜山の性格上、大人数は嫌だと断られる可能性の方が高いと思ってしたが、了承の返事が来た。

非常に嬉しい事だ。

そして当日。

オレたちDクラス組と怜山、そして寮の1階で合流した一之瀬たちBクラス組と一緒にプールへと向かった。

その間、一之瀬が何やら怜山に積極的に話しかけていたが、適当にあしらわれているな、という印象を受けた。

怜山からすれば、一之瀬すらも単なる雑兵に過ぎないか。

まあ、実力からすれば実に妥当な判断ではあるが。

着替えて、プールにて合流する。

少し遊んでから機を見計らって抜け出し、池たちが設置したカメラを回収するようにもって頼んでいた佐倉と合流。

SDカードを受け取り、破棄してから再び怜山の元へと戻った。

その際

「ねえ、綾小路君」

怜山はいつも通り無表情ながらも、ほんの少しだけ何やら少し責めるような表情をしていた。

「な、なんだ？」

オレは思わず焦って聞いてしまう。怜山のこんな表情を見たのは初めてだったから。

「カメラ、どうしたの？ おっぱいちゃんに回収させたみたいだけど、私に頼まない理由、つまり破棄したと見せかけて後で見る、という理解でいい？」

予想外の事を言われた。

な、なるほど……確かに怜山視点だとそう見えるのか。

それに、佐倉のことをおっぱいちゃんって……いや、今それはいい。

怜山は、池たちの盗撮の計画、カメラの設置場所、そしてそれをオレが把握し、佐倉に回収させることで対処しようとする、という一連の流れを全て予測したのだろう。

そして、その対処をオレが怜山ではなくわざわざ佐倉に頼んだ理由としては、能力不足の佐倉の前だとSDのすり替えなど容易だから、破棄した振りをして後で見るために未だに持っている、と。

もちろん、そんな筈がない。

一瞬、それをやってしまおうかな、と思ってしまうたのは認めるが。佐倉にカメラの回収を頼んだり、怜山に池たちの所業について話さなかったのは、怜山にそんなくだらしない事をやらせたくなかったからだ。

こんな雑務なんてオレの手で処分してしまえばいい。

まさか、それが裏目に出るとは……
しかし、どうやって釈明する？

オレがSDを持っていないと証明するのはほぼ不可能。隠すタイミングはいくらでもあったのだから。

「いや、その……もちろん、SDは処分したぞ。見たかったという気持ちも無いわけじゃないが……」

なんて、言い淀んでしまう。
まずい。言い分が思いつかない。

すると、怜山は責めるような表情をやめ、少しだけ微笑んでから

「冗談。破棄したとわかっているから。ただ、意地悪したかっただけ」

なんて言ってきた。

「……勘弁してくれ……心臓が止まるかと思ったぞ」
「ごめんなさい。あと、ありがとう」

どうやら、怜山はオレが彼女を頼らなかつた理由すら理解しているらしい。それでも、自分を頼ってもいいんだぞ、という意味合いを込めて先程のセリフを言ったのだろう。

オレは、自身の気持ちを理解されていた喜びと、怜山がオレを思いやってくれたこと、感謝されたことへの喜びで思わず表情が歪んでしまった。

そうして最高潮まで上がったテンションと、怜山の前でいい姿を見せたいと思ってしまった事が重なり、思わずバレーで少し本気を出してしまった。

周囲は驚いていたが……今はそんなことどうでもいいな。

そうして夏休みが終わり、楽しい時間は過ぎ去ってしまった。

これからは、体育祭や、その後を見据えてオレが何をすべきかを考えて行動する必要がある。

だが、その道筋は既に定まっている。

怜山の能力はオレをして予測不可能とはいえ、船上試験であれ程までに暴れた以上、怜山の方針は見えたからだ。

怜山は、遅くとも今年度中にはクラス間闘争を完全に終わらせようとしている、と。

そして、ほぼ同じタイミングにてオレの事をAクラスへと買い取ろうとしている、とも。

加えて、無人島試験やこれからの体育祭のように、身体能力が問われたり、長期間に及んだりする試験はあまり好みではないのだろうな、という事も理解出来た。

中間試験での過去問にしろ、船上試験での優待者の法則にしろ、怜山にはシンプルで即効性のある最適解を好む傾向がある。

天才というのはシンプルで早期に終わらせることの出来る解を求める、というのは良く言われている事だから、そういうものなのだろう。

まあ、怜山はその超人的な頭脳と違い、身体能力に関しては一般的な女子生徒と変わらないものだからそうなるのも当然なのかも知れないが。

ならば、オレが体育祭当日とそれまでの1ヶ月でやるべき事と、それに付随する一連の策は既に導き出された。

それからの1ヶ月間、オレはかつてないほどに裏で動いた。

一番は、軽井沢を利用する事でいじめの現場を抑え、真鍋をオレのスパイとする事が出来たことだろう。

ついでに軽井沢の過去を暴き、破壊、再生を経てオレの駒とする事に成功した。

後者の軽井沢の手駒化についてはあくまで副産物だ。

入学当初のオレにならともかく、今のオレには怜山と、怜山の忠実な駒たる橋本が居るのだから。ついでに、能力不足ではあるが物理的な人手と肉壁としては使える佐倉も居る。

怜山の能力については最早言うまでもない。

その駒たる橋本の評価は、一言で言うならば、まるで裏切りの心配が無い男版櫛田のような性能、といった所だ。

その高いコミュニケーション能力による、学年でも櫛田に次ぐレベルと言っている程の広い情報網。

更に強者に付くというその性質はともわかりやすく、こちらの能力を定期的に見せ、ある程度の餌を与えてやれば裏切りの心配が無いというのが大きい。

オレと怜山にとって、ここまで都合の良い駒は他に居ないと言っていいだろう。仮にDクラスにこんな奴が居たとしたら、オレは他の何よりも優先して可能な限り早く駒に加えていたに違いない。

流石、あの怜山が唯一手駒にしているだけの事はある。

だから、はつきり言って軽井沢が必要かと言われたら全くそんな事はない。所詮軽井沢は橋本の下位互換でしかないのだから。まあ、流石に佐倉よりは使い勝手がいいと思うので一応駒に加えたが。

次に、櫛田がやはり龍園と裏で繋がっていたという事を掴めた。よって、体育祭の参加票を龍園に渡しているだろう事は容易に予想出来る。

更に、櫛田が原因の過去が理由で堀北を一方的に嫌っている、という所までわかった。既にそれを利用する算段も立てた。

真鍋から、龍園が体育祭中に堀北を嵌めようと指示を出している音声を手に入れた。

これを使えば龍園の立てた策を粉碎する事が出来るだろう。付随して、次の策にも繋がる。

これで、準備は整った。

船上試験で怜山がやった例がわかりやすいが、戦いは基本的に始まる前に決着が付いているものなのだ。

堀北にはまだその認識が甘いため、成長を促すために今回は徹底的に敗北を味わって貰う。

怜山に船上試験でやられた時は、あまりに堀北の実力と怜山のそれが乖離し過ぎていて、堀北の学習と成長には繋がらなかった。

だが、龍園は怜山と比較すると明らかに甘く、実力が劣っている。そのため、堀北は敗北をより身近に実感する事が出来るだろう。

堀北には、オレがAクラスに移籍する為にもある程度は成長して貰わなければ困るからな。

体育祭当日を迎えた。

オレの予定通りに競技が進められていく。

Dクラスは露骨にCクラスからの攻撃を受けた。具体的には、Dクラスの足の速い選手にCクラスの足の遅い選手を割り当てられる事でこちらの勝ちを減らす策を受けた。

策は面白いようにこちらに刺さり、クラスの雰囲気がどんどん悪くなっているのを感じる。

その中でも堀北はCクラスに徹底したマークを受け、最終的に競技が続行出来ない状態にまでなった。

そして龍園に木下の足の怪我は堀北のせいだと冤罪をふっかけられ、失意の最中へと落とされる。

だが、そんな状態にも関わらず須藤を説得して見せた所にはオレも堀北の成長を確認でき、満足した。

最終種目のリレーで生徒会長相手に全力で走る事にしたりなど色々あったが、これもまた、布石。

最後に、真鍋から手に入れた龍園の音声を使う事で堀北を救い、これでオレの体育祭は無事終了した。

その後、オレはAクラスの神室という人物に呼び出され、特別棟の一室へと向かった。

一体誰が何の用かと思ったが、そこに居たのはAクラスの坂柳という人物だった。

「あんたがオレを呼び出したのか？」

「はい。最後のリレーお見事でしたね、綾小路清隆くん」

坂柳はそんな社交辞令を言ってくる。

どうでもいいから早く用件を言って欲しい。

そう思つて坂柳の発言を促すと

「ふふふ……つれないですね。まあ、彼女を知っている以上それも当然なのでしょうけれど。……あなたの走りを見て思い出したのです」

そうして坂柳はオレに近づいてきて、

「お久しぶりです綾小路くん。8年と243日ぶりですね」

よくわからないことを言ってきた。

「冗談だろ。オレはお前なんて知らない」

8年前。それはオレがあ施設の施設に居た時期。

こいつがオレの事を知っている筈がない。きっと誰かと勘違いをしているのだろう。

「ふふ、そうでしょうね。私だけが一方的に知っていますから」

そしてこいつは何時になったら用件を話すんだ？

「……用件を言わないなら帰らせてもらおうぞ」

オレが坂柳から背を向けて歩き出すと、

「ホワイトルーム」

オレは足を止めた。

何故それを知っているのか。

「ふふ、嫌なものですよね。相手だけが持つ情報に振り回されるのは」
坂柳は続ける。

「……相手だけがもつ情報とは少し違うかもしれませんが、この学校に来て以来私は振り回されるのにある程度慣れましたよ。そして、それは思っていた程嫌でもありませんでしたけれどね」

何やら実際の経験が多々あるような発言。

そこだけはオレも同感だった。

振り回されるのは……悪くない。

人物は限定されるが。

「ご安心を。あなたのことは誰にも言いませんよ」

「言えば、色々と有利になるんじゃないか？」

そうしたら、少なくともオレの計画の1つを修正しなくてはならなくなる。まあ、それならそれでやりようはいくらでもあるから構わないのだが。

「彼女がいる以上、最早そんな些事に意味などないことはあなたもわかっているでしょうに」

「……………」

「では、用件に入りましょう。言いたい事、お話ししたい事は他にも多々ありますが……お互い、もつと気になる方が居るのは共通しているでしょうから」

気になる人間。オレにとってそれはただの1人しか居ない。

それと比較してしまうと、こいつが何時何処でホワイトルームについて知ったのかなど最早どうでもいいとすら言える。

「てつきり私は3年間をかけて彼女を超えるために準備を進め、彼女に挑戦し続けるものと考えていましたが……少しだけ、寄り道をすることにしました」

「偽りの天才は、私が葬り去りましょう。彼女の目には、ただ私だけが

映っていればそれでいいのですから」

坂柳はその顔に好戦的な色を宿しながらそんな事を言ってくる。
だが。

「そうか」

オレにとってそんな事はどうでもいい事。

以前のオレならば、お前にオレを葬れるのか？ などと聞いたかも知れないが……まるで興味が湧かない。

そもそも……坂柳はきつとオレたちの計画に気付いてすらいない。オレたちの計画に勘づいていたならば、もつと違った言葉になつていたたろうから。

まあ、それはオレたちの関係についてある程度深く知っていなければ分かりようも無い事だろうから仕方ないのだろうが。

オレについての情報を吹聴しないならば尚更だ。

坂柳の存在はオレにとって何の意味もない。

最早ここで会話を続ける必要性は皆無。

オレはそのまま背を向けて坂柳から去っていった。
背後から強い視線を感じたが……どうでもいいこと。

来るなら何時でも来ればいいさ。相手してやる。

だが、オレからお前に何かをする事はない。

オレはお前にそこまでの興味は無いのだから。

坂柳との邂逅など予定に無い事もいくつかはあれど、準備は何の間

題もなく着々と進行している。

怜山の計画通り、今年度中に全てを終わらせるための準備が。

その計画を確実なものとするためには、やらなければならない事がいくつかある。

龍園翔。

まずはお前だ。

この舞台から、消えてもらおうか。

全ては、オレと怜山の平穏な生活のために。

どんどん原作が崩壊していくRTA、はーじまーるよー

前は、体育祭で何もなかった所でしたね。

体育祭が終了し、2学期のイベントとして残っているのは期末試験のペーパーシャツフルと、原作で龍園君が頑張った果てにボコられるあれですね。ついでに、この時期に生徒会長の学君が引退して、みんな大好き南雲兄貴が生徒会長になります。

まずはペーパーシャツフルです。

今回はいい男の真嶋先生が小テスト関連の説明を少し端折るため、私から説明させてもらいます。

まず最初に小テストを行い、その結果によってクラス内で二人一組のペアを結成。ペアの基準は高得点者と低得点者の組み合わせ。そしてその後の本試験での8科目における二人の合計点を競う。200点満点中どれか1科目でも2人の合計点が60点以下になる、または2人の全科目の合計点がボーダーを下回ると退学となる。

更に、これはクラス間の対決でもある。各クラスが作成した問題を別クラスで解き合い、40人の合計点が多い方が勝利。攻撃側と防御側にわかれており、それぞれ相手を上回った場合はCP50、逆に敗北してしまうとCP150。攻撃防御の両方とも同じクラスが相手、つまり直接対決時には1度にCP100が増減する。

試験における組み合わせは、何も手を加えなければA対B、C対Dとなります。

勘のいい兄貴はもうお気づきですね？

今回も、何一つ動く必要は無いと(ニート)。

理由は簡単。

Bクラスは絡め手を取っては来ない以上、普通にすればAクラスがBクラスに負ける事は無いので。

何もせずにCPが100手に入るだけのうま味イベントとなります。

やっぱAクラスルートを……最高やな！

れずちゃん1人で退学ラインは容易に超えられる以上、ペアが誰であらうと心配する要素はありません。

まあ視聴者兄貴たちの予想通り、れずちゃんはクラス1位の学力のためペア相手は必然的に戸塚君なんですけどね。

ただ……1人だけ、釘を刺しておくべきロリが居ます。

その人物が誰かという点、皆さんご存知坂柳さんですね。

本チャートだとれずちゃんの活躍により、まだいい漢の葛城君が完全にリーダーとしての立場を失ったわけではないため、銀髪美ロリがいい漢にトドメを刺すために裏工作をする事があるのです。

無論、こちらからするとそれはまず味そのもの。

よって、銀髪美ロリに暗躍しないように言い付けましょう。

おめえ……余計なことするつもりじゃねえよなあ？

もしそんなことしたらもう二度と遊んでやらないからな!!

ロリが絶望した表情をしています。

そんな彼女に飴を与えてやりましょう。

言う事聞いてくれるなら今ここで遊んでやるからよー。

先程とは一転してロリが興奮しています。

かわいいなあ。

1学期の対決から約半年。

坂柳さんのリベンジマッチですね。

坂柳さんとの2度目のチェス勝負ですが、1回目よりもかなり難易度が上がっています。

そのため、余程チェスに自信がある兄貴でもなければ、れずちゃんに全てを任せるオートプレイをお勧めします。

れずちゃんの、これまでの経験により既にA+100を超えてしまった知能ステがあれば何の問題も無く勝つ事が出来ます。

1学期の走者による手動のような完全ノータイムとはいきませんが、それでも難易度的に考えたらこちらの方が早い筈。

まあ、チェスが得意な兄貴ならば更なる速度を出す事も可能なのですが、私はそうじゃないので（凡人）。

ちなみに、この勝負ではPPの賭けをする事が出来ます。

とりあえず10万PPを賭けて遊んでやりましょう。

たかがチェス1戦に10万……絶対に負ける訳がないとわかってるからこそ賭けられる金額ですね。

少女チェス中……

勝利しました。

まあ、ステ的に負ける訳がありませんね。

坂柳さんから10万PPを貰います。

目標の2000万からすれば誤差です。しかしここではクラスメイトに、れずちゃんがPPを集めようとしている、という事を強く認識して頂ければそれで大丈夫なので。

早速その事実を理解した美ロリが、もつとPPを持っていつてもいいと言っています。必要ならいくらでもくれてやる、と。

ん？ 今いくらでもくれてやると言ったよね？

今すぐには要らないから、ひとまず陣営に貯蓄を促しておくように、と言っておきます。

こうする事で、この話を聞きつけたいい漢も自派閥の貯蓄を増やすため、学年末に不足したPPをある程度までなら補うことが出来るようになります。無人島に加え、体育祭でも3位という失態をしてしまったいい漢の派閥は既に1桁人数にまでなってしまうましたが、それでもAクラスのCPを考えたら、集められるPPはそれなりものになります。

銀髪美ロリを抑えるだけじゃなくて、PP稼ぎにも繋がる。

やっぱり最高のチャートだあ……（絶頂）。

この後、原作のようにDクラスでは色々な出来事があります。

龍園君が真鍋さんたちのスパイ行為を割り出してDクラスの策士Xの見立てをしたり、綾小路君が池君や山内君と疎遠になる代わりに幸村君たちとつるむようになったり、綾小路君が佐藤さんにアプローチをかけられるもれずちゃん居る以上ガン無視したり、堀北さんが榎田さんを退学させるのに反対したり、榎田さんの過去が判明したり、元生徒会長の学君の前で堀北さんが堂々と自分の意思を言うようになったり、榎田さんと堀北さんが退学を賭けた勝負をすることになったり、軽井沢さんが榎田さんにジュースをぶちまけたり（本走でするかかわからない）、堀北さんが茶柱先生の前で迫真の演技をしましたりします。

この辺りから、堀北さんが人として全く信用できない綾小路君の手から離れて行くこうとしていきます。

やっぱ実質成長系主人公を……最高やな！

とはいえ、綾小路君が信用できないから、まだわかりやすい櫛田さんをどうにか説得して戦力にしたいという理屈はわかりませんが、流石に色々不器用すぎない？ とは思ってしまったますね。まあ、そんなところもまたかわいいんですけど。そして、そんな感じでヒロインレーズをほぼ完全に降りたせいで出番も減っていつてしまうのは悲しいなあ。

あとは、一年全員に一之瀬さんが不正にポイントを集めている可能性があるという内容の手紙が入っていると騒ぎになるものの、学校側が不正は無かったと発表したりします。

ですが、それら全てがれずちゃんにはどうでもいい事なんでね……

ペーパーシャツフル用の問題も銀髪美ロリといい漢の2人が頑張って作成してくれるため、れずちゃんは何もする必要がありません。

Dクラスに少し介入する事で櫛田さんを退学させることは出来ませんが、櫛田さんとほぼ関わりのない本走でロスを顧みずにわざわざそんな事をする理由もないですし。

では、ペーパーシャツフル当日まではいつも通り綾小路君とのコミュ以外スキップしましょう。

綾小路君はもうかなり完全体に近づいています。あと一押しですね。

少女自由行動中……

はい。ペーパーシャツフル当日となりました。

普通に試験を受けて、結果発表を待ちます。

当然、勝利しました（ナレ死）。

これまで特別試験でのCP推移のマイナスが大きくなってしまったBクラスに何やら暗雲が立ち込めて来ましたね。とはいえ、無人島試験からペーパーシャッフルで約150くらいなので、まだまだ押し込みが足りません。

客観視してしまうと既にAクラスと1000以上差があるためもう完全に終わっているのですが、それでもまだ足掻く人が居るんですよね。2位クラスと月に貰える額に10万以上もの差があるのに諦めないって凄いですよね。

Dクラスも堀北さんの迫真の演技の甲斐あってか無事勝利し、龍園君の居たCクラスとの入れ替わりを果たしました。これからは元Dクラスを堀北クラス、元Cクラスを龍園クラスと呼称します。

龍園君はもうやばいですねえ。

特別試験で1度も陸に勝つ事なく、変動したCPは350で、現状のCPが合計142となりDクラス落ちですから。こんなんでは？ 笑っちゃうよ！ となるのは想像に難くありません。

しかも、ここから重大違反とやらで更に100さされますからね。月に4200円でどうしろと？

対してAクラスのCPは特別試験により変動したCPが520で、合計は既に1575……私がこの学年の生徒だったら完全に諦めていますね、これ。むしろ完全服従してPPを恵んでもらうことを考えるすらあります。特に龍園クラスの場合。

そうしてペーパーシャッフルを終え、これからは原作でいう7巻の、龍園君が堀北クラスの策士Xである綾小路君の尻尾を掴むために色々頑張る期間に入ります。

龍園君が自クラスの生徒を使ってひたすら堀北クラスの生徒にプレッシャーをかけたたり、龍園君が高円寺君や坂柳さんに喧嘩を売ったり、橋本君が龍園君に吹っ飛ばされたり（本走だと起こり得ない）、綾小路君の鬼畜父親が現れたり、茶柱先生の脅迫の嘘がバレたり、綾小路君がDクラスを介護する理由が無くなって軽井沢さんとの関係を解消しようとしたり（本走だと以下略）と色々ある人気巻ですね。ここから露骨に堀北さんの出番が消えるのは悲しい。いくらヒロインじゃなくなつたとはいえ極端すぎる……

れずちゃんは、この期間も当然何もしません（ニート）。

基本的に龍園クラスと堀北クラスの争いなのでね。

これDクラスチャートの人はどうやってRTAとして成立させようとするんですかね？ 参考にしたから視聴者兄貴の誰か走ってくれないかなー（他力本願）。

ではまたしばらくは綾小路君とのコミュ以外スキップします。

少女自由行動中……

おや、綾小路君からメールが来ました。

なにになに……？

『軽井沢を使って龍園を終わらせる策を立てた。詳しく話したいが、今大丈夫か？』

来ましたね。悪巧みメールです。

もう完全体にかなり近づいてしまっている我らが綾小路君は、原作と違って龍園君を躊躇なく排除しようとしています。

どうやら本走においても綾小路君は軽井沢さんを利用するようで

すね。体育祭前に頑張って彼女を駒にしたようです。まあ、原作と違って完全に使い捨てるつもりみたいですが。

了承し、綾小路君が何をするつもりなのかの話聞きに行きましよう。

ふむふむ……わかりました。

ではこちらは、当日にこういった行動を……

ふっ、お主も悪よのお。

話が終わったため、再び自由行動に戻ります。

少女自由行動中……

そして来る12月22日の終業式。

原作においても本チャートにおいても重要なポイントです。

原作ではこの日、軽井沢さんの過去を突き止めた龍園君が、ついにX探しに終止符を打つために軽井沢さんを屋上に呼び出し、集団リンチをかけます。

ただ、龍園君はその全てを綾小路君にばっちり予測されています。そのため、龍園君の策は綾小路君に完全に利用され、逆にボコボコにされて敗北する、という原作でもトップ3に入るであろう人気イベントが発生します。

そんなこの日にれずちやんがするのは、実にシンプル。

まず、坂柳さんから口が固く腕っ節に自信のある、どう見てもカタギには見えない漢の鬼頭君を借ります。

次に、鬼頭君と橋本君を引き連れ、3人で帰宅途中の金田君を待ち伏せ、特別棟に連れ込みます。金田君の行動パターンは走者が完璧に把握済みなので、他人にそれがバレたりはしません。

彼は龍園クラスには珍しくヒヨロヒヨロの頭脳系男子なので、3人でカチコめば逆らったりはしてきません。

次に、綾小路君に金田君を確保したとメールをします。

最後に、後方ラスボス感を出しながら金田君に今までやった事、これから起こる事がある程度説明することで彼を手駒に加えてしましましょう。一連の話は鬼頭君から坂柳さんにも伝えるように言っておきます。

やったねれずちゃん。共犯者が増えるね！

序盤で共犯者を増やすのは少々リスキーですが、この段階まで来てしまったらもう大丈夫なのでね。れずちゃんの行動はAクラスにとっては利でしかありませんし。

そして、その結果何が起こるかというと……

龍園君、伊吹さん、石崎君、アルベルト君の4人がまとめて退学になりました。

やったのは当然、我らが綾小路君です。

原作で龍園君は、責任は俺が取るとか何とか言っていましたよね？

そんなの今の綾小路君が許す筈がありません。

そもそも、一般男子高校生に過ぎない龍園君が、一体何をどうやって責任なんか取るつもりだったんですかね？

いじめには4人全員ばっちり参加しているというのに。

クラスのリーダーなんて勝手に名乗っているだけで、そういうた役職が明確にあるわけでも無いのに。

龍園君のチャレンジ精神や何度でも起き上がるというその精神性

私は好きです。ですが、暴力に頼り過ぎるそのやり方は到底褒められたものではないですし、見通しがあまりにも甘過ぎるといっても事実。

まだ高校1年生の彼にそこまで求めるのは酷なのですが、それを言い訳にするなら最初からこんなことをすべきではないのですから。

原作でも龍園君は、あくまで綾小路君の温情で生かされたに過ぎないです。本チャートにおける、既にれずちゃん以外どうでも良くなりつつある綾小路君にそんなものある筈が無いのでね。

軽井沢さんの過去がバレる？ 自分が策士だったと皆にバレる？

今の綾小路君がそんなことを気にするとも？

これより先、軽井沢さんは完全に不要ですしね。綾小路君が陰で暗躍する理由も最早ありません。

まあ、れずちゃんのせいで夏休みの試験で完全敗北してしまい、原作通りペーパーシャッフルでも敗北してしまっただけのためクラス内での求心力を失い、早急に結果を出さねばならない龍園君が焦ってしまっただのがこの悲惨な結果の要因でもあります。

原作でも石崎君や伊吹さんに苦言を呈されるくらいには無理のある強引なやり口だったのが、更に無理矢理になったために全てが崩壊してしまっただけでしょう。

何はともあれ、

さようなら、龍園君たち4人組。

ここまでやったのは当然、理由があります。

元々ヤンキー揃いだった故龍園クラスは、龍園君に無理やり纏めら

れる事で一定の秩序を成していました。

そのため、ただ龍園君を退学させるだけだと、ヤンキー共がヤケクソになって予想外の行動に出る事があるのです。今回の龍園君の違反退学のせいで遂にCPが0になるわけですし。

ヤケになった民衆が最も恐ろしいって、それ一番言われてるから。しかし、暴力を使う主犯格4人を一齐に退学させる事で残党ヤンキー共に、暴力を振るってしまうとどうなるかを恐怖と共に突き付けることが出来ます。

加えて、故龍園クラスの次のリーダーとして金田君を据えて裏から操る体制を整えることによって、あら不思議。

故龍園クラスはれずちゃんの完全なる手駒になってしまいましたとき。

2年次以降の全スキップに向けて爆走していますね。

れずちゃんは坂柳さんとのチエスと、金田君を駒にした以外2学期は特に何もしていないというのに。費やした時間なんてほとんどありません。

更に言うと今の、龍園君に一切の容赦をしない綾小路君はその巧みな話術を使って龍園君たち4人からPPをむしり取っている筈。

退学になってPPが無になるのは困りますからね。あれで一応8億PPとかいこうどう見ても龍園君には不可能な目標を立てるくらいには部下想いの龍園君に対し、CPが0になってしまった故龍園クラスの人に渡すとか何とか色々言ったのでしよう。

まあ、この状況で契約書なんて作るわけ değildir、作ったとしても龍園君の退学により無意味。よって、今の綾小路君であればそれなりの額を着服するでしょうけどね。

本チャートでの故龍園クラスはれずちゃんのせいでCPが大幅に下がり、思うようにはPPを貯められてはいない筈ですが、それでも大量のPPが綾小路君の手元に入ります。

……ただ実は、ここで彼が具体的にいくらPPを獲得するのかは多数のパターンがあり、その分岐条件はまだよくわかっていないんですよ。

完全ランダムか？　と思いきや、どうもそうではないみたいですし、ここで虐められる綾小路君の駒次第かと思ったら、同じ駒でも大量に分岐するという。

もしここでロスなく獲得金額を最大値に固定する方法さえ見つければ、やるべき事が減って時短に繋がるのですが、条件分岐が正直意味不明なんですよね。

とはいえ、本走では綾小路君が4人組から得られたPPが最低値でもどうにかなるようにチャートを組んでいるため問題ありません。

もし条件を解明出来た方が居たのであれば、是非私にこっそり教えて頂けると助かります。最速チャートの更新に繋がるので。

そして最後の理由として……色々変わるので、次回を是非楽しみに。

それはそうと、これで故龍園クラス改め金田クラスは完全に終了し、綾小路君のAクラス移籍のためのPP貯めを大幅に前進させました。

このRTAも終わりが近づいて来ましたね。

これから全キャラで一番苦労するであろう金田君の未来にエールを送ったところで今回はここまでです。

ではまた次回、サラバダー！

橋本正義の享樂

2学期も終業式を迎えた。

この学期は、体育祭以降俺たちAクラスにとっては特に何かが起きたという事はなかった。

強いて言えば、ペーパーシャッフルの前に女王様が姫さまをチェスで倒したくらいか。

それはどうやら姫さまが余計な事をしないようにするためと、俺たちの協力者であり、女王様と同じく底知れない能力を持った化け物である綾小路をAクラスに買い取るための布石としてやったらしい。

Dクラスの躍進の全てを裏で引いていた奴の能力を知った時は思わず呆然としてしまったものだが……今、それはいい。

姫さまとのやり取りは1学期の焼き直しみたいなものだし、夏休みのアレと比較してしまえば大した話じゃあない。姫さまじゃ女王様には勝てないなんてわかりきった話だしな。

チェス中に、何かほんの一瞬だけ女王様が思考する事もあったが……とはいえ、未だ差は歴然。いくら何でもここから姫さまが勝てるようになるとは思えない。

ペーパーシャッフル試験本番は女王様の望み通り何も無く進行し、勝利した。

試験の性質上、裏切り者が出さえしななければ、俺たちAクラスが基礎学力に劣るBクラスに負ける訳が無かった。

そういつた裏工作をしない一之瀬の限界が見えた気がした。まあ、一之瀬と女王様とじゃあ最初っから勝負なんて成立してすらないんだらうが。

CとDは何やら争ったり、クラスが入れ替わったりと色々あったみたいだが、そつちは綾小路が特に問題無いと言っていたし、何より俺

たちには一切何も関係がない。

正直言つて、少々退屈だったと言わざるを得ない。まあ、これが普通なんだろうけどな。

はつきり言つて、クラス間闘争は女王様の手によつて既にAクラスの勝利で終わってしまったというのは皆の共通認識だろうから。何せ2位のBクラスとすら既にCPが1000ポイント差だ。ただでさえ基礎能力の劣る他クラスが、これをどうやって覆すというのか。

1学期と夏休みがおかしかったただけだ。俺も大分女王様に毒されて来たな……

なんて考えていたが、それが間違いだと知つたのは終業式の日。

ある時、女王様が姫さまに何やら耳打ちをしていた。

姫さまはとても驚いた表情をしていたが、

「わかりました。こちらから伝えておきますね。……フフ、何が起きるのか、楽しみにしておきます」

と答えていた。

一体何を言つたのだろうか？

そう思いながら見ていた所、直ぐに女王様は俺に、放課後は空けておけ、と指示を出してきた。

相変わらず横暴極まる話だ。

こつちの意思なんぞ完全に無視してやがる。

とはいえ、女王様からの久々の指令。

これから何が起こるのか……姫さまの台詞じゃあないが、俺も楽しみにしていた。

放課後になった。

俺は指示された通り、教室を出る女王様の後ろに付いていく。すると、俺と女王様の後ろに鬼頭が付いてきた。

「鬼頭？　どうして……ああ。坂柳に言われたのか」

「ああ。俺自身、何故怜山が俺を連れて行く事にしたのかはわからんが……怜山のやる事に口を出しても仕方ないだろう」

「ハッ。そりやそうだ」

そんな雑談をしながら、俺たちは歩いていく。

少しして、女王様が立ち止まる。

そして、いつも通りではあるが、全く予想外の事を言ってきた。

「ここで、Dクラスの金田君を待つ」

金田？

どういう事だ？　女王様が誰かを待つという時点で既におかしいが、何で金田なんだ？　せめて龍園とかならまだ話もわかるんだが……

「なんで金田？　……いや、あんたのやる事だ。黙って従った方がいいか」

全く……いつもの事だが、本当に意味不明だよな。女王様の行動は。

彼女は意味の無い事はしない。

だから、きつとこれも深い理由ありきの事なんだろうが……

そうして待っていると、女王様の言う通り金田がやって来た。

「金田君」

「!? 怜山氏? どうしてこんな所に……」

金田は驚愕していた。

それを見て鬼頭が俺に話しかけてくる。

「金田とはアポを取っていないなかったのか? ならば何故怜山は金田が此処に来るとわかった?」

「俺に聞かれても」

そんな、当然の疑問を呈する鬼頭。

だが、俺も女王様が金田を待つ事すら知らなかったんだから、そんなことわかる訳がないだろう?

「付いてきて。勿論、スマホは操作しないで。橋本君と鬼頭君は金田君が余計な事をしない様に見ていて」

女王様は金田の行動を抑制する。

このための俺たち、という訳か。

「な、なぜ自分を……」

「後で話す」

付いてこないなんて許さない、と言外に主張するかのように斬り捨てる。

俺は思わず苦笑しながら、

「まあ、とりあえず付いていだけなら別にいいだろ? 女王様が何

をする気なのかは知らねえが、金田が余計な事をしなけりや手荒な事にはならないだろうよ」

「わ、わかりました……」

金田はビビりながらも了承する。

なんか、女王様が関わると毎回誰かしらがこんな感じの反応になるよな。なんて俺は考えていた。

女王様に付いていった結果、俺たちは特別棟の1室に辿り着いた。此処は確か監視カメラの死角がそれなりにある部屋だったか。

「金田君、スマホを出して。橋本君、鬼頭君。金田君のボディチェックをして。無いと思うけど、ボイスレコーダーの確認を」

着いて早々にそんな事を言われた。

やれやれ……これからヤバい話をするって言ってるようなもんじゃねえか。普段からボイスレコーダーを常備している奴なんてほとんど居ないだろうに。

金田が顔面蒼白になっているぞ。まあ、別にいいけどな。

そうして俺と鬼頭がひとしきり確認を終えた後、女王様が話を始めた。

「ここにあなたを呼んだ理由はただ一つ。あなたを私の傘下に加えようと思ってる」

「じ、自分を、ですか？ 一体なぜ……」

どういう事だ？ 何故金田を……

まさかこいつも綾小路と同じような化け物だと？

いや、そんな筈はない。

確かに金田は優秀ではあるが、それは普通の範疇に収まっている。決して女王様や綾小路のような化け物などではない筈だ。

そんな事を考えていた俺を余所に、女王様がとんでもない事を言い放った。

「あなたには、今後のDクラスのリーダーをやってもらおうから」

「何？」

「何だと？」

「えっ？」

俺たちは思わず3人とも同じ反応をしてしまう。

「龍園君は、これから退学する事になる」

おいおい。

俺は思わず一瞬思考停止してしまった。

……きつと、冗談ではないんだろうな。

「ま、待ってください。それは一体どういう……」

金田が慌てて何が起きているのか聞こうとした。

鬼頭も、何が起きているのかわからない、といった顔をしている。だが。

「龍園君がCクラスの隠れた策士……Xと呼んでいたみたいだけど、そのXを探していた、というのはいい？」

「え、は、はい。ですが……」

「そのXの裏に私が居た、ということ」

「つつ!? んな……そんな、馬鹿な……」

金田が呆然自失としている。

ハッ。そりゃあそうだ。こいつらはXが誰かすらわかっていないんだ。いきなりその裏に自分が居る、なんて言われても対応出来るはずがない。

「龍園君に勝ち目なんて最初から無かった。彼はXにかまけて私の存在に気付きすらしていなかった。だから、彼の行動なんて全て簡単に予想出来た」

「……………」

金田はもはや言葉を発する事すら出来なくなっていた。
それを余所に女王様が話を続ける。

「彼は見られていなければ何をしてもいいと思っている」

「それは確かに正しい。けれど、逆もまた然り」

「見られたら、全てが終わる、ということ」

龍園の行動を誘導してその状況を意図的に作り出す、という事が。
相変わらずおっそろしいなあ、女王様は。

「彼は私とXによって、己の知略を使った策を全て失敗した。唯一の成功体験が暴力によるものだった」

まさか、無人島試験や船上試験のあれも、綾小路の体育祭やパーシヤツフルでの動きも、全てこれを見越してのことだと？

「だから、彼はエスカレーターする。ラインを超えてしまう」

「その末路はただ一つ」

「この学校から去るのみ」

金田は項垂れている。

決着は、既に付いた。

これから龍園は退学し、副リーダーだった金田を支配することでDクラスを手駒にしてしまう、という事か。

わかつてはいたが……あの龍園すらも女王様からすれば単なる道化でしかないか。まさか気づいてすらいない相手に退学させられるとは……この事実を奴が知る事もないのだろう。

だが、ここまででも十分恐ろしいのに、事態はそれだけでは終わらなかった。

女王様は更にとんでもないことをぶっこんできたのだ。

「そして、彼の失敗は、彼一人で終わる話ではない」

「何?」

「何だと?」

「えっ?」

またしても、俺たちは思わず3人とも同じ反応をしてしまう。

「他者を率いる以上、付いてきた人間にも失敗の影響が襲い掛かる」

「今回の場合は、伊吹さん、石崎君、山田君」

「その全員が、退学する事になる」

信じられない。

まさか、そんな。

「馬鹿な……そんな事が……」

鬼頭が恐れ慄いている。

金田に至っては顔色が最早死人のようになっていた。言葉なんて発する余裕があるはずがない。

恐ろしい……なんて恐ろしい話だ。

まさか、Dクラスの主要人物を一気に4人も退学させる計画だったなんて。

そこまでして、完全にDクラスを叩き潰したかったというのか。

女王様が一瞬だけ言葉を止め、俺たちは全員が言葉を発さなくなる。

退屈？ 2学期は何も起きていない？ 俺は何を馬鹿な事を考えていたんだ。

数秒経って女王様のスマホが震えた。

それを確認し、宣告を下す。

「Xからメールが来た。無事、終わったみたい」

無事？ おっそろしいことをナチュラルに言いやがる。

「私の傘下に……入ってくれるでしょう？」

「そうですか……わかりました。報告ありがとうございます」

私は先程怜山さんに連れて行かれた鬼頭君から、普段冷静な彼とは思えない程に顔に恐怖の色を宿しながら報告を受け、労りの言葉を述べた。

報告内容を要約してしまうと実にシンプル。

X……つまり綾小路君の手によつて龍園君たち4人が退学。そして現Dクラスは彼と、裏で手を引く怜山さんの手中に堕ちた、と。

そう。内容を要約してしまうなら本当にシンプルな話。

けれど、そのシンプルで恐るべき内容を現実に実行に移す事の出来る人間が一体どれだけ居るといふのか。

何より、あの2人はそれを誰にも悟らせる事なくやり仰せたのだ。この私にすら、一切の影を掴ませる事なく。

私の全身が興奮により思わず熱を帯びてしまう。

実際にはしたくないことだが……ここまでの常軌を逸した内容を伝えられて何も反応しないなど不可能なのだから。

真澄さんから無人島試験と船上試験の結果を聞いた時も、思わず興奮を隠せないものだった。だが今回のこれは、彼女がその常軌を逸した才能によつて未来予知を思わせる働きをした無人島試験や、船上試験で残した他を一切寄せ付けない圧倒的な結果すらも超えていると言っただろう。

あの2人は龍園君の全てを完全に見透かしていた。そして、完璧なタイミングで最高の結果を残した。

まさか厄介な相手である龍園君を含めた4人を退学させた上で1クラスを完全なる傀儡にしてしまうとは……私をしてそれは予測不

可能だったと言わざるを得ない。

鬼頭君には少し悪い事をしてしまったかもしれない。彼女の成した結果はまさしく偉業に他ならないが、天才ならぬ人間がこれを直接目の当たりにしては、恐怖を抱くのは当然のことなのだから。

まあ、彼を選んで連れて行ったのは私ではなく怜山さんののだが。

それはそうと、どうやら綾小路君と怜山さんはクラスの垣根を越えて手を結ぶことにしたようだ。

そしてその事実を鬼頭君を通して私に教えたという事は、私もその中に入れる事にした、ということ。

ならば、これまでの情報を鑑みることで、あの2人の方針は自ずと予測が出来る。

2人は今年度中にクラス間闘争を終わらせ、そして綾小路君をAクラスに移籍させようとしている、と。

その答えに至るのは簡単だった。

2人が手を組んでいるとしたら、夏休みの船上試験にて彼らの陣営には500万PPという莫大なポイントが入っている筈。

にも関わらず、先日私をチェスで打倒した際に、怜山さんは更なる大量のPPを望んでいるということが判明した。

あの時は、1学期と違ってほんの僅かに彼女の思考する時間を勝ち取る事が出来て、今までの人生で経験した事がない程の喜びを感じたものだが……あの時の事を思い出してしまうとそれ以外考えられなくなってしまうため、今はやめておこう。

話を戻すと、先程までの情報に加えて、龍園君たちを終わらせて、残党を支配したこのタイミングで私の勧誘……ここまでのヒントを与

えられてなおわからない程私は愚かではない。

あの2人であれば、時間さえあれば別に私の力が無くとも2000万PPを稼ぐこと、残った2クラスを終わらせることは容易だろう。けれど、怜山さんはそうやってだらだらと時間をかける事を嫌うから。

他を決して寄せ付けない、私以上の天才故の傲慢さがありありと出ているが、彼女ならばそれが許される。

いやむしろ、既に決着が付いてしまったクラス間闘争などという些事に、これ以上彼女の貴重な時間を費やさせるわけにはいかない。

可能ならば、偽りの天才たる綾小路君は私が打倒したかったものだが……同じクラスならば、むしろそちらの方が競い合う機会は増やせるだろう。焦る必要はない。

ならば、私が今後やるべき事は見えた。

綾小路君を迎えるために、陣営に可能な限りPPを貯蓄させること。

残った2クラスの内、綾小路君が居ない方であるBクラスのリーダー……一之瀬さんに舞台から退場して頂くこと。

これからはそれに向けて動けば良いだろう。葛城君との既にほぼ終わってしまったリーダー争いなど、この出来事を知ってしまったは些事ではないのだから。

それにしても、これである龍園君ともお別れですか。

彼は自らを王と標榜していましたが、その器ではなかったというこ

とですね。

古今東西様々な説が流れてはいますが、結局の所、王の資質なんてたった一つ。

『勝利』

です。

王は絶対に負けてはならない。

過程などどうでもいいのです。ただ、勝つ事さえ出来ればあとは大抵どうにかありません。

逆に言うと、王にはただの1回の敗北すら許されない。

敗北とは、仕えてくれる民への裏切りに他ならないですから。民はそのために重い税を納め、王に従っている。勝てない王など塵ではない。

だからこそ、未だ怜山さんに勝てない未熟な私は、自身を王とはしていないのですから。

歴史上でもそうですよね。どれだけ治世に優れた名君と呼ばれようが、1度でも致命的な敗北をしてしまえば、文字通り致命、つまり死の他に道はありません。そして、それは王だけで済む話ではありません。当然、民も相応の苦しみを与えられる事になります。

勝てない勝負は絶対にしてはならない。相手の力量を見誤るなどもつての外です。

何度負けようが起き上がり、最後に勝っていればいい、という信条自体はとても立派なものです。ですが、たったの1度であろうと敗北を許容し、彼女と綾小路君の力量を見誤って戦いを挑んだ時点で、いえ、怜山さんの存在を把握する事すら出来なかった時点で、龍園君は最初から王には向いていなかったという結論になるのです。

そんな彼の末路は、無様な敗北の末に部下を道連れにした退学。

この時点で彼のクラスは完全に崩壊しました。残された生徒に明るい未来は、楽しい高校生活は最早ありません。

一見すると、彼らは普通の学校生活を送る普通の学生に戻るだけ。いえ、むしろ設備等を考えたら未だ恵まれているとすら言えます。けれど、人は他者との比較をせずにはいられない生き物ですから。

これは、怜山さんでも綾小路君でも、他の誰でも無くただ龍園君1人の責任でしか無い。

さようなら、愚かで哀れな龍園翔君。

あなたは結局、怜山さんと一言も言葉を交わす事すらありませんでしたね。

PP稼ぎを終わらせるRTA、はーじまーるよー

前は、龍園君たち4人組を退学させた所でしたね。

冬休みを迎えました。

原作では7・5巻に当たる部分で、原作だとロリが一之瀬さんを虐めると宣言したり、本格的に軽井沢さんがヒロインと化したり、綾小路君が伊吹さんと映画を観た後に首を絞めたり(鬼畜)、龍園君と密会した直後に学君と密会して南雲兄貴についての情報を得たり、堀北さんを生徒会入りさせることにしたり、ダブルデートしたり、佐藤さんを振ったり、南雲兄貴や桐山先輩と色々話したりします。

ですが、綾小路君がれずちゃんに依存し、龍園君たちを退学させた本走では色々なイベントがカットされることになります。

軽井沢さんは既に全ての役割を終え、今後何かをする事はないですし、伊吹さんや龍園君は既にこの学校に存在しませんし、佐藤さんとデートなんてする訳がありませんからね。

綾小路君とデートするのは当然れずちゃんの役割です。

この時期は何と言ってもクリスマス。思う存分青春してあげましょう。

とはいえ、クリスマス前にはまだやるべき事があります。

まずは龍園君たちを終わらせた翌日の23日。

この日は原作だと坂柳さんが一之瀬さん虐めを宣言したり、その後に故伊吹さんと映画を観たりする日ですね。

綾小路君と一緒にケヤキモールに行き、神室さんを引き連れた坂柳

さんと会います。それから、密談するために個室のあるお店に移動します。

銀髪美ロリと正式に手を組む話をし、その後、ロリから一之瀬さんを潰す予定だ、という話を聞きます。

神室さんがドン引きしていますが、無視して一之瀬さん潰しに同調しましょう（人間の屑）。

綾小路君も、変な事せずちゃんとロリに協力するんだぞく？

体育祭で恐らく銀髪美ロリに宣戦布告されているであろう綾小路君は少し気まずそうにはしていますが、彼はれずちゃんに逆らえないので言うことを素直に聞いてくれます。

変な事をしてれずちゃんに嫌われるなんて絶対に避けたい筈なのでね（依存）。

そして、綾小路君を買い取るためにロリが時期に応じて用意出来るPPの目安等についての話をしてから解散します。

解散してからは綾小路君と2人で映画を観ましょう。

4人を退学させた1日後に普通にデートする2人は間違いなく頭おかしい（確信）。

当然、伊吹首絞めイベントなどある筈もないためそのまま帰宅し、就寝しましょう。

24日になりました。クリスマスイブですね。

この日にあるのは、学君と綾小路君が密会するイベントです。それれれずちゃんも参加しましょう。

ここで初めて学君はれずちゃんにみんな大好き南雲兄貴の話をします。学君と入学日以外ほとんど関わって来なかったからね、しようがないね。

退学者を増やしまくろうとする南雲兄貴の方針は認められない。れずちゃんやんは女子だが目を付けられる可能性が高い。心に留めておいてくれ。と言われました。学君には借りがありますので、了承して

あげましょう。

こう答えることで、色々渋った原作の綾小路君よりも沢山の情報を学君から受け取る事が出来ます。

ついでに、妹の鈴音さんについても色々言われました。

妹はれずちやんを強く意識している筈。退学はさせないで欲しい。少しでいいから見えておいてくれ。綾小路君の策略である鈴音さん生徒会入りのための手助けはする、と。やっぱ妹のこと好きなんすねえ。

龍園君たち4人を退学させたのは綾小路君とれずちやんの2人ですが、学君は実際に虐めをした龍園君たちの自己責任と認識しているため(当然)、好感度が落ちたりはしていません。ただ、流石に警戒はしているみたいですね。

まあ、堀北さんにはこれから孤軍奮闘してもらおう予定なので、退学させたりはしないから安心しとけよ(堀虐)。

とはいえここでは学君に、借りと比較してやる事が多い。やって欲しいならPPをくれ、と言いましよう。

すると話がわかる学君は、3学期中に何かしらの結果を出せばPPをやる、と言ってくれます。

ん？ 今結果を出せばPPをくれるって言ったよね？

学君はれずちやんとのやり取りに満足して去って行きました。

密会に参加していた綾小路君が、堀北さんはともかく、もし南雲兄貴がちよつかいをかけてきたら自分が対処するから安心してくれ、と言ってきましたね。

うーん、これは青春ですねえ。

綾小路君とも解散し、帰宅しましょう。

これから綾小路君は堀北さんを生徒会に入れようとするも櫛田さんに邪魔される、というイベントがありますが、参加してもロスなだけなので。

綾小路君の協力者となる桐山先輩に対しては、れずちゃんからは何もありません。綾小路君が勝手に話を付けてくれます。彼は所詮敗北者ですからね。負けてしまった今から自分で何かが出来ると言う人間では無いので、れずちゃん手ずからコネを作る理由は無いのです。

クリスマス当日になりました。

時間と位置の調整をする事で南雲兄貴に絡まれる（ウホッ）ことを避け、綾小路君とデートしましょう。

この日は普通にデートするだけです。

ただ、今日は特別な日であるクリスマス。
デート中に互いのプレゼントを購入し合った結果……

今までの甲斐あつて、なんと原作では一切笑わない綾小路君が笑顔を見せてくれます。

ついに機械を完全に脱したんやなって……（感動）。

綾小路君ガチ恋勢が発狂してそうな状況ですね。

実はこれ、綾小路君ガチ恋勢虐待RTAだった……!?!?（今更）

3学期が始まりました。

これから、原作8巻部分の特別試験である林間学校が開催されま
す。

バス内で久方ぶりのいい男の真嶋先生がルール説明をしてくれま
す。

なになに……？

学年別、男女別の6グループを作る必要がある。

1つのグループを形成する上で的人数には上限と下限がある。同
一学年の男子あるいは女子生徒が60人以上であれば8人から13
人。70人以上であれば9人から14人。80人以上であれば10
人から15人が1グループにおける下限と上限の人数。60人を下
回る場合には別途参照。

グループ内には最低2クラス以上の生徒が必要。

求められるのは道徳、精神鍛錬、規律、主体性。

同学年で作る1つ1つのグループを小グループ、2、3年の小グ
ループとも合流し、6つの大グループとなる。

評価は大グループ全員の平均点。

1位から3位はPPとCPが増え、4位から6位は減らされる。

1位：1万PP、3CP

2位：5000PP、2CP

3位：3000PP

以上の報酬を、グループの生徒1人1人に配布。

4位：5000PP

5位：1万PP、3CP

6位：2万PP、5CP

以上のポイントを1人1人が失う。

小グループ内のクラス数に応じて報酬に倍率がかかる。3クラス
構成なら2倍、4クラスだと3倍。また、小グループを構成する総人
数によっては更に倍率は増加。総人数10人が1倍、11人が1.1

倍。最大で15人の1.5倍。4位以下のペナルティに倍率は適用されない。

最下位になった大グループにおける、各小グループの責任者には、学校側の用意した平均点のボーダーラインを小グループの平均点が下回った場合のみ退学のペナルティ。

責任者と同じクラスの生徒は報酬が2倍。責任者は小グループで話し合い明日の朝までに決定。決定しなかった場合はグループ全員が退学。

責任者が退学になる際はグループ内の1人を道連れにする事が可能。これは原因の一因と認められた生徒のみを対象。

午後8時から大グループを作成する場を設けてある。

本試験で退学者を出したクラスは一律CP-100、救済には更に2000万PPと300CPが必要。

うーんこのクソ長ルール。

しかも無意味に長い割には、計算が面倒だったか作中でCPは全く動かず、PPの描写も無し。加えて意図的ではありませんが、だとしても退学周辺のルールがあまりにも不自然。

綾小路君の活躍も無いですし、正直言って8巻が不人気な理由が良くわか…いえ、何でもありません。

まあそれは置いておいて、とりあえずイベントに入りましょう。

本イベントでは、1位を狙う必要は全くありません。

他学年が関わり、船上試験のような即効性のある最適解も無い以上、普段より遥かに手間がかかる割には確実性のある旨みが少ないからですね。

ですので、グループ決めの際の注意点は3つ。

1つは橘先輩の居る大グループには絶対に入らないこと、2つ目は一之瀬さんの居るグループにも絶対に入らないこと、最後に自グループに堀北さんを誘うこと、です。

1つ目の理由は簡単ですね。

橘先輩を陥れるためのやり取りに巻き込まれるのは面倒なだけなので。

2つ目も同様。

坂柳さんによる一之瀬さん虐めは、遠くから眺めて楽しむだけにしておきましょう（人間の屑）。

最後の理由も簡単です。

イブに学君に言われたやつですね。ここで堀北さんと組む事で、後ほど学君からむしり取れるPPが増えます。

という訳で、堀北さーん、あーそびーましょー！

言われた瞬間、堀北さんが驚愕した顔をしました。かわいい。

直後に、何故自分を誘うのかと聞いてきました。

おめえ、オラと戦いてえんだろ？ なら、せいぜいオラのことを良く見ておくんだな！

堀北さんが決意を宿した表情に変わりました。かわいい。

一応確認しますが、同じグループに一之瀬さんは居ないですね？

完璧だ！

他のメンバーは話しかける予定も皆無なため誰でもいいです。

責任者も自分以外なら誰でもいいです。流れに身を任せましょう。れずちちゃんと堀北さんがいて、虐めの標的となる橘先輩も一之瀬さんも居ない以上、このグループが1位になる確率はそれなりに高いのですが、わざわざ責任者を引き受けて他人を介護しなければならぬ

というロスを賄えるほどの旨味はないのでね。

グループ決めが終わりました。
では、午後8時まで待ちましょう。

午後8時になりました。

大グループ決めのお時間です。

とりあえず、橘先輩さえ避ければ後はどうでもいいのでパパッと決めちゃいましょう。

橘先輩を嵌めるために2年生と3年生が何やら色々していますが、当然無視します。

男子組では今頃南雲兄貴がブラフのために学君に形だけの挑戦をしている筈ですが、これもれずちゃんには関係ありません。

はい、決まりました。

同じ大グループに2―Aの朝比奈先輩の姿が見えますね。

どうやら1位グループになりそうだな？

まあ、何度も言うように今更数万のPPなんて得ても雀の涙でしかないですし、1位になる確率が高そうとはいえ、足を引つ張られて2位以下になる確率は未だ健在なので責任者にはならないのが正解なのです。

という訳で、本日は就寝となります。

堀北さんのお隣をばっちりキープし、かわいらしい寝顔をきっちりスクショしましょう。

朝になりました。

決まった責任者を報告していますね。

ここからは、基本的にオートとスキップとなります。
モブを介護する趣味は無いのでね。

少女林間学校中……

お、何やら橘先輩のいるグループが露骨に不甲斐無い結果を出していますね。

一体何が起きているんだろうねー。

それを確認し、再びオートとスキップをします。

少女林間学校中……

夕食の時間になりました。

林間学校では男女が基本的に分離されていますが、1日に夕食時の1時間だけ、男女共に食事を取る時間があります。

そこで学君にお手紙を渡しましょう。

橘パイセン狙われていますけど大丈夫っすかね〜？

無理だな（確信）。

学君が驚愕したような表情をしてれずちゃんを見てきましたね。

この頃の、まだ南雲兄貴は約束を守る男だと信用しているピユアな学君は、れずちゃんの言葉を瞬時には信じられない……いえ、れずちゃんが正しいとはわかっているものの、それを信じたくない。といったところでしょうね。

いいから動かなきゃいけないんじゃないの〜？

学君が自分の食事を適当に切り上げ、動き出しました。彼は自らのお腹が空くのを我慢して、この短い時間で女子生徒たちに賄賂しに行くのでしよう。がんばえ〜！

学君が去った所で、周りを見渡してみると……

お、何やら一之瀬さんが辛そうにしていますね。

一体誰がこんな酷いことを……！

はい。これはもちろん我らが銀髪美ロリの坂柳さんの仕業です。

前回鬼頭君を通して坂柳さんに色々教えたり、冬休みに密に密会をした（意味深）結果、彼女はれずちゃん綾小路君の行動方針を理解し、原作以上に張り切って一之瀬さんを虐めにかかります。

こうする事で、学期末前の一之瀬さんの絶望堕ちに繋がるんですね。

もちろん、我らが綾小路君は一之瀬さんを救ったりなどしません。当たり前だよなあ。

一之瀬さんに関しても、龍園君同様にれずちゃんが手を汚す必要は一切無いです。いや、むしろ金田君への交渉のようなことすら必要ないため、支払う労力は龍園君の時以下となります。

まるでモナリザのように綺麗な手だ……（恍惚）。

一之瀬さんが予定通り、原作より遥かに辛そうにしているのを眺めて満足した所で部屋に戻り、就寝。そして林間合宿に戻ります。

少女林間学校中……

橘先輩グループの一部の女子が足を引っ張るのを止めていますね。学君の頑張りが見えます。

堀北さん？ 見てるか？ 実際に交渉したのは確かに学君だけど、この状況を作ったのはれずちゃんだよ??

れずちゃんが学君にお手紙を渡す所を見ていた堀北さんはそれを理解して、れずちゃんに熱い視線を送っていますね。

実は堀北さんもれずだった……!?

これで、学君からの2つ目の頼みも無事完遂ですね。一石二鳥とはまさにこのこと。

という事で、その後は特に何もなく、迎えた最終日。

試験も何の問題無く突破し、れずちゃんの所属する大グループは無事1位になりました。

橘先輩の居る大グループは最下位ではあったものの、学君の頑張りのおかげあってボーダーを下回る事はありませんでした。

この後に女子からの報告を受けた南雲兄貴は、れずちゃんの事には気付きすらせず、自分の計画を見抜いて一見手遅れの状態からどうにかした学君はやっぱ凄……（恍惚）となります。

わざわざ生徒会特権を用いて明らかに無理矢理で不自然なルールを作ったのに、それを学君は見事打ち破ったわけですから。今はれずちゃんの存在にまで頭が回らないのも仕方ない事。

後になって落ち着いたられずちゃんが学君に手紙を渡していた事に行き着くかもしれませんが、どうでもいいです。

彼の相手をするのは綾小路君なのでね。れずちゃんとは関係ない場所です存分に盛り合ってください。

これで林間学校は終了となります。

くうく疲れました（実はいつも通りほぼ動いていない）。

林間学校を終えた数日後、綾小路君と一緒に再び学君と密会しましょう。

ほらほら、君の依頼、2つとも早速こなしたよ？

早くPPを寄越しな！

学君はれずちゃんに感謝の言葉を述べて、交渉の必要すらくなくPPをたっぷりとくれました。

まあ学君目線からすれば、南雲兄貴を抑えろ、鈴音を頼む、という依頼をした次の瞬間にいきなり明確な結果を残されたわけですからね。

加えて、橘先輩が退学処分となった場合に支払う事になった筈の2000万PPと4000CPを考えたら、ここでれずちゃんに渡すPPをごねる筈が無いのです。

これで、今までの貯金と綾小路君の貯金、坂柳さんから貰える現時点でのお金を合わせて余裕で2000万PPが貯まりました。

順調に計画が進行したため、いざという時の予備としていたいい漢陣営の貯金を使うまでもありませんし、綾小路君が龍園君からむしり取った額も最低値よりもまあまあ多かったため、だいぶ余裕があります。

ですが、ここではまだ綾小路君を買い取りはしません。

彼を買い取るのは、堀北クラスに居る間にやるべき事を全て終えて

から。

綾小路君本人も納得していますね。彼はれずちゃんの前でだけは普通に笑顔を見せるくらいには依存が進行しているので、既に自分の望みよりれずちゃんの都合を優先するようになっていきます。

面倒だったPP稼ぎから解放された所で今回はここまでです。

ではまた次回、サラバダー！

堀北鈴音の決意

3学期が始まった直後、私たち東京都高度育成高等学校に所属する学生全員が林間学校に参加する事になった。

私は茶柱先生からCPやPPに関するやたら長い説明と、責任者関連の説明を受け次第、綾小路君に何か考えがないかを確認するためにメールを送ったが、何もないと返事が来た。

もう、その言葉を信じる私ではない。

結局のところはいつも通り、綾小路君は本心を話すつもりはないらしい。

綾小路君は自称事なかれ主義者でありながら色々と動き、何やら不審なこともしているために人として信頼する事は出来ないが、なんだかんだでクラスのためになる行動をしている、底知れない能力を持った人物。

とはいえそこまでなら、いい。

だが、彼は恐らく、先日龍園君たち4人を退学させて現Dクラスを再起不能の状態に落とし込んだ。退学の理由は、龍園君たちがとある女子生徒を4人がかりで虐めていたから、という事らしい。その女子生徒とは軽井沢さんだという事がすぐにわかった。

なぜなら、龍園君たちが退学処分となった終業式の日、全身が濡れ鼠のようになり、恐怖に打ち震えた軽井沢さんの姿を目撃した人が多数居たのだから。そんな目立つ姿、何かしらの手段を用いて隠さなければ人の目に触れるのは避けられない。

当の軽井沢さんは3学期になってからも一応登校はしているものの、目から力が完全に失われていた。

私は、綾小路君が一連の事態を引き起こしたと確信して彼に仔細を

聞いたが、当然教えてはくれなかった。

私は彼の事がわからなくなっていた。

それは、これまでの綾小路君のやり方とは違った物に見えた。これまでは、須藤君の一件といい、口では色々言いつつもなんだかんだ彼は温情を持って動いていると思っていた。

だが、先日櫛田さんを退学させると言った件といい、今回の、軽井沢さんを生贄に龍園君たち4人を1度に退学させるという俄には信じ難いような恐ろしい所業といい、彼は一体どうしてしまったのか。いや、むしろこれこそが綾小路君の本来の姿だったのだろうか。私は彼の事を何一つ理解していなかったのだろうか。

私は何か、決定的な誤ちを犯してしまったのではないのだろうか。

そんな、悪い予感が拭えなかった。

……いや、今は眼前の特別試験について考えるべきだ。

今、私の目の前で繰り広げられているのは、林間学校における6つのグループ分けの話し合い。

私は可能ならばCクラスで固め、他クラスの人間を1人ずつ入れる……とまでは言わないが、それに近いグループを1つは作りたかった。

だが、私たちの年頃の女子の性質上、他クラスに1人だけで入ることが出来る人間は少ない。よって、グループを同クラスで固めるのは非現実的。

更に言えば、1グループ内にあるクラスから4人、他クラスから2人ずつ、といったような組み合わせも難しいだろう。2人側に回される女子からクレームが発生する事が目に見えている。

そのため本試験において、ある程度均等な配備にならざるを得ない女子側ではさしてクラス間のCPの差は推移しないのではないかと、と思われる。

だが、私たちCクラスがAクラスに上がること考えた場合、1つであろうと特別試験を無駄にすることは出来ない。

ただでさえ既に圧倒的なポイント差や基礎学力の差があるというのに、Aクラスにはあの人物が居るのだから。

今回も、私が未だに自分のクラスを掌握し切れていない事がネックとなっている。やはり、私に櫛田さんのような力、あるいは自らの実力のみで有無を言わず全てを従えるあの人物のような力があれば……

いや、これが今この時点での私の実力。未来に起きるだろう試験ならばともかく、この試験では今の私に出来ることをしなければならぬのだ。無い物ねだりをしては仕方がない。

どうにかしてCPを多量に得られるような組み合わせを作る事が出来ないか……と考えていたところ、

突然

「堀北さん」

なんて声をかけられた。

聞き覚えのある声。そして、絶対に無視など出来ない声だった。

「……怜山さん。どうしたのかしら？」

私に声をかけてきたのは、先程少し考えた、悔しいことだが私たちの学年において間違いなく一番優秀であり、綾小路君と何故か妙に親しくしている人物である怜山静香さん。

そんな彼女が一体何故私に声を掛けてきたのか。

「私とグループを組みましょう」

私は一瞬、自分の耳を疑った。

「……理由を聞いてもいいかしら」

「あなたには素質があると思うから。それに、むしろあなたの方が私を近くで見たい筈」

素質。

一体何の素質なのか。

私にはわからなかった。

噂通り、彼女はこうして唐突によくわからない事を言うようだ。

だが、その噂には続きがある。

彼女の言葉はその時点ではよくわからないものの、後になって考察したら必ず何かしらの深い意味を持っている。常人には理解出来ない、天才故の先を見通し過ぎた発言なのだろう、と。

噂が言っているのはこれか、と思った。

私が彼女と比肩し得る程の実力を身に付ければ、今の言葉の意味がすぐに理解出来るようになるのだろうか？

それは置いておくとしても、確かに私の方が彼女を近くで見学び、対策を練る……とまではいかないかもしれないが、何かしらを掴みたいとは思っていた。
だから。

「わかったわ。あなたと組んであげる」

私は決意を持って、彼女と向かい合うことにした。

近くで見たいとは思ったが、寝る場所すら隣なのは予想外だった。別に、何か問題があるわけではないのだけれど。

林間学校2日目のある時、とあるグループの複数の2、3年生が明らかに手を抜いている姿がちらほら見られた。

確か、3年Bクラスの生徒が責任者を務めるグループだったか。生徒会の橘先輩も所属していた筈。

何故こんな事が起きているのだろうか。

3年Bクラスを妨害したいということなのだろうか？

自学年の他クラス相手というならば、仮に他学年にも龍園君のような生徒が居ると考えた場合ならまだ100歩譲ってわからなくはない。

だが常識的に考えて、2年生が自分や自クラスに入るポイントを犠牲にしてまで3年のBクラスを妨害する意味がわからない。

私は怜山さんならばこの状況をどう考えるのかを知りたくて話しかけてみた。

「……揉めているわね」

「そうね。予想通り」

怜山さんから予想外の事を言われた。

一体どういう事なのだろうか。

彼女はこの状況を予想していた？ どうやって？

仮にこの状況を引き起こした相手が居るとして、その人物と通じている？ いや、そうだとしたら予想通り、という反応にはならない筈。

私には何一つ理解が出来なかった。

「どういうこと？ あなたはこの状況を予想していたとでも？」
「ええ」

短い返し。

……先程言っていた以上それはそうなのだろうが、私が聞きたいのは、どうやって予想したのか、だ。少しは行間を読んで欲しい。
船上試験での葛城君はこんな気持ちだったのだろうか。

「……どうやって予想したのかを教えてくださいのだけれど」

すると、怜山さんは私の方を少し見てからまた予想外の事を言い始めた。

「……あまり柄ではないのだけれど、少しアドバイスを」

「？ 一体何を言っ……」

私の疑問を遮って怜山さんは話し始めた。

「あなたは他人の力を借りるようになったと聞いている」

一体何の話だろうか。

何故いきなり私の話を始めたのだろうか。

そしてそれは綾小路君から聞いたのだろうか。

疑問は尽きない。

とはいえ、一応答えることにする。

夏休みにプールに行った際、積極的に話しかけていた一之瀬さんを全く相手にしていなかった彼女がこうやって会話に応じるなんて非常に珍しいことだろうから。

「……そうね。悔しいけれど、この学校には私1人ではどうにもならない状況が多いから」

そう。

1人の力で全てを振じ伏せる事が出来る、まさに私の理想の体現者とも言える怜山さんとは違って。

だが、それは悪い事ではない筈。

現実には、それによって事態が好転した事例はあるのだから。

「それはいい事だけど、今度は別の問題が発生している」

「……それは何かしら。そして、どうしてあなたにそんな事がわかるというの？ 私たちは会話をした事なんて数える程度な筈なのに」

「そこ。まずは自分で考える、ということをやめている」

「……………」

私は思わず口をつぐんでしまった。

心当たりがある、というよりも今しがた怜山さんに対してそれをやってしまったのだから。

更に言えば、林間学校に向かうバスでもまず最初に綾小路君に何か考えがないかを聞いた事も思い返される。

私はいつの間にか、自分で物事を解決しようとするのをやめ、他者に頼り切りになってしまったのだろうか。

「偉そうに言ってごめんなさい。お詫びじゃないけど、これから私のやり方を隣で見ている」

最後にそれだけ言って、彼女は口を閉ざした。

怜山さんは今から何をするつもりなのだろうか。

他学年同士の争いというこの状況を解決して、彼女に何か利があるのだろうか。

やはり、疑問は尽きない。

だが、指摘されたばかりの今の私はそれを聞こうとは思えなかった。

その日の夕食の時間、私と一緒に夕食を取っていた彼女が唐突に立ち上がり、歩き始めた。

ついていく理由も無いため、食事をしながらもなんとなく彼女を眺めていたら、なんと怜山さんはあの兄さんに何やら小さな紙を渡していた。

思わず唾然とした顔をしてしまう私を余所に、それを見た兄さんは驚愕したような表情をし、一瞬彼女の顔を見つめていた。

が、すぐに食事を切り上げて何らかの行動を開始した。

一体彼女が渡した紙には何が書かれていたのだろうか。

そして、怜山さんと兄さんとの間に繋がりがあったのか。

兄さんから彼女が生徒会に勧誘されたという話は聞いていたが

……

彼女を見ていると、常に疑問しか湧かない。

これが私と怜山さんの実力差、ということなのだろうか。

私は思わず、悔しさから顔を歪ませてしまっていた。

次の日、そこには驚愕の状況が繰り広げられていた。

先日、明らかに妨害行為をしていた2、3年生の一部がそれをやめていたのだ。それを見て、話が違う、とやり取りしている姿も見られた。

……誰がやったのかは明らか。

兄さんが、彼女たちに何らかの働きかけをしたのだろう。

だが、その兄さんを動かしたのは……

私は、思わず隣に居る怜山さんのことを見つめてしまう。

聞きたい。

だが、それは昨日指摘されたばかり。

けれど、一体何故彼女がこんな事をしたのかわからない。

何故3年Aクラスの兄さんが、言つては悪いが自分には関係無いはずのこの状況を変えようとしたのかもわからない。

そんな風に逡巡していた私を見て、彼女は口を開いた。

「彼女たちは、南雲先輩の指示で橘先輩を嵌めようとしていた」

「えっ?」

あまりにも疑問が多すぎる発言だった。

そして、今回はどうして教えてくれるのかもわからない。

だが、そんな私を余所に彼女は説明を続ける。

「ルールがそもそも変だった。特に道連れ。明らかに誰かを退学させようとして作られたもの」

「……………」

言われてみればそうかもしれない。1人を選んで道連れなんて、冷静に考えると明らかにおかしいルールだ。

責任者はまだわかる。だが、それ以外の人間を退学させるというペナルティを作るなら、点数辺りの何らかの明確な基準を設けるべきな

筈。

「生徒会は、特別試験のルールに介入できる」

それは、私も知っている情報。

一之瀬さんが以前そんな事を言っていたから。

彼女はきつと兄さんから聞いたのだろう。

だが、まだ疑問は残る。

どうして標的が橘先輩だとわかったのか。

「今も、そして大グループ決めの時も、彼女たちの視線は責任者ではなく明らかに橘先輩に向いていた。そして、堀北先輩から聞いた南雲先輩の人格や行動パターンを照らし合わせたら予想は容易」

よく、見ている。

彼女は他人にあまり興味を示さないが、持っている観察眼は異常と言っている程だと綾小路君が言っていたのを思い出す。

実際に、彼女は様々な疑問を抱く私の心が完全に読んでいるかのようには会話を組み立てているのだから。

「つまり南雲先輩は、堀北先輩に挑む策として試験のルールを改変し、橘先輩を退学させようとした、ということ」

これが、今回の一連の流れ、ということか。

言われてみれば、確かに理解は出来る。

きつと、南雲先輩はあらかじめ3年Bクラスの子に何らかの交渉をしていたのだろう。そして、彼は2年生をほとんど掌握している、という話がある。だからこそ、こんな事が出来たのだ、と。

確かに、3年と2年を巻き込んで何かを成せるのは南雲先輩か、それこそ兄さんくらいしか居ないだろう。

その2人がそれぞれ動いた結果が、今日の前の、疑似的な兄さん対南雲先輩の構図が繰り広げられている、と。

……彼女は、それをかすかなヒントと2、3年生のやり取りを見ることによつて即座に見抜いたというのか。

あまりにも能力が高過ぎる。

異常、と言つていいだろう。

私はこれからこんな人間と戦つていかなければならないのだろうか。

勝ち目など、本当に残されているのだろうか。

どうしても、弱気になってしまう。

だが、そんな私の心情を余所に彼女は続ける。

「今回私が橘先輩を救うように堀北先輩を動かした理由は、堀北先輩には恩を売るだけの価値があるから」

「……………」

あの兄さんすらも、彼女からしたら駒の1つでしかないと言うのか。

「堀北先輩からは色々教えてもらった。Sシステムについて。試験の過去問について。生徒会について。南雲先輩の情報について」

「……待つて。待つてちょうだい。頭が追いつかない」

彼女からもたらされる怒涛の情報に、私は混乱してしまう。

一体、いつから彼女は兄さんと接触していた？

いつから、この状況を想定していた？

だが、彼女は待つてくれはしない。

「他人の力を使う事は悪い事じゃない。けれど、使い方は自分で決め

るべき」

私は思わず頭をハンマーで殴られたかのような気持ちになった。確かに、今回の彼女のやり方がそうだ。

実際に行動したのは兄さんだが、兄さんをそういう風に使ったのは彼女でしかない。

ただ兄さんに頼り切るのではなく、兄さんの利を考え、どう使うとベストなのかを彼女が選んだ。

私のやり方とは根本的に異なるものだ。

「人を動かす方法はいくつもある。あなたは情で人を頼る。長い目で見た場合それが一概に悪いとは言わないけれど、それだけだとなかなか動かない事がある筈」

「……………」

まさに、それは私が今櫛田さんの説得に難航している事、綾小路君が本心をまるで話してくれない事が示している。

彼女の能力があれば、櫛田さんの改心も容易なことなのだろうか。

綾小路君も、彼女になれば全てを話すのだろうか。

そんなことを考える私を横に、上手く併用しないとね、と言ってから怜山さんは会話の締めに入る。

「説明したのは、偉そうなことを言ってしまったお詫び。けれど、それだけじゃない」

「……………」

彼女が以前の発言を気にしていた事はわかった。

正論そのものでしか無い以上、別にそこまで気にする事でもないと思うが。なんならあれは私へのアドバイスな訳だし。

だが今回、私に色々と懇切丁寧にしてくれたのには、それ以外の理

由もあるらしい。

それは何なのだろう、と思っていたら、彼女は今日一番の驚くべき発言をしてきた。

「あなたには、期待している。私に対抗出来るとしたら、あなたしか居ないだろうから」

「……え？ それって……」

一瞬、何を言っているのかわからなかった。
思わずその場でフリーズしてしまう。

だが、遅れて彼女の発言を理解したとき、私は自分の中から何やら熱が込み上げてくるのを感じた。

あの、怜山さんが。

兄さんすらも掌の上で操る、この学校における頂点が。

私の事を、競うべき相手だと見做している。

私は思わず勢いよく怜山さんの方を見たが、彼女は既に移動を開始してしまっていた。

慌てて私も移動を開始する。

そうだ。立ち止まってなどいられない。

私と彼女との差に落ち込んでなどいられない。

榎田さんの説得が難航している？ 綾小路君が信じられない？
クラスを掌握し切れていない？

そんなの知った事か。

私は、彼女のライバルなのだから。

心が痛む（大嘘）RTA、はーじまーるよー

前は、PPを2000万稼いだところでしたね。

林間学校を終え、3学期も中盤。

ここからは原作における9巻の時期です。

みんなのアイドル一之瀬さんが、かつて不用意に南雲兄貴にゲロつてしまった万引きの過去を坂柳さんからひたすら責められて精神崩壊寸前になるも、我々が綾小路君が救うことで彼の都合の良いヒロインと化した巻です。

後は、榎田さんが南雲兄貴と接触する回でもありません。空気だった榎田さんが遂に活躍して場を引っ掻き回してくれるのか？ と私は期待した記憶がありますね。

そんな事はなかったわけですが。

秘密は決してゲロつてはならないという至極当然の教訓が得られる話となっています。

まあ、巧みな話術にて一之瀬さんに過去を吐かせた南雲兄貴の手腕が1年生たちよりも優れているのも事実ではあるのですが。

南雲兄貴はあれでめっちゃくちゃ優秀ですからね。クラス闘争を遅くとも2年生3学期には完全終了させていますし、1年生で南雲兄貴とまともにやり合えるのは綾小路君と高円寺君と坂柳さんといついでにれずちゃんしか居ないくらいには優秀です。1歳下なのに結構居るな？ まあ総合力だと少なくとも坂柳さんには圧勝出来るし……

原作だと神室さんが坂柳さんの指示で綾小路君に一之瀬さんの噂の真実を伝えたり、橋本君が綾小路君の実力に少し勘付いて尾行したりと色々ありますが、既にれずちゃんによって綾小路君と坂柳さんや

橋本君が手を組んだ本RTAでそんな事が起きる筈がありません。

他のイベントとしてはバレンタインがありますね。原作だとヒロイン化した軽井沢さんや、綾小路君に堕ちてしまった一之瀬さんの可愛らしい姿を見る事が出来ます。

このRTAにおいて彼女たちのそんな姿が見られる筈がないんですけどね、初見さん。

というわけで、早速我らが銀髪美ロリの坂柳さんが一之瀬さんの誹謗中傷を始めましたね。

内容としては、暴力沙汰、援助交際、窃盗・強盗、薬物の使用歴……あることないこと散々言っていますね。

ここで重要なのは、窃盗は厳然たる事実ということ。だからこそ、一之瀬さんも強くは否定出来ないわけです。上手いやり方ですなあ。

本RTAでは坂柳さんだけでなく、綾小路君も本気で一之瀬さんを破壊しにかかります。

具体的には、原作と違って学校側が否定せざるを得ない程過剰に噂を流したりはせずに、ギリギリを見計らって噂を操作し、一之瀬さんをじわじわとなぶり殺しにしていくわけです（FRZA様並感）。

ついでに、以前れずちゃんとの駒にした現金田クラスも綾小路君と坂柳さんは存分に使っていきます。坂柳さんが持つPPをダシにしてしまえば、金欠の金田クラスは喜んでれずちゃん陣営の犬になってくれますからね。わんわん。

Bクラス以外の全ての方向から攻撃される一之瀬さん……
なんてかわいいそうなんです（他人事）

ちなみに、れずちゃん本人はいつも通り何もしません。

この段階になると、綾小路君や坂柳さんが全てやってくれます。あの「れずちゃん」がヒザのところを組んでいる「手」……あれ……初めて見た時……なんていうか……その……下品なんです……フ……勃起……しちやいましてね……（K I R A並感）

というわけで、しばらく何もせずに眺めていると……

おや、一之瀬さんが不登校になったという噂が流れてきましたね。一体どうしてでしょうね〜

不登校って事は、もしや噂は真実ってコト!?

不登校の噂を確認したら、またしばらく何もせずに眺めましょう。すると……

はい。一之瀬さんが自主退学しました。

どうじでこんなひどいことをするのとおおおお!

恐らく不登校中の一之瀬さんの元に綾小路君が行き、Bクラスとの同盟解除の宣言をしたりしたのでしようね。

試走だと、万引き犯が率いるクラスなど信用出来る筈がない、とか言っていました。その時の一之瀬さんの顔はばつちりスクショしましたよ、ええ。

ただでさえAクラスに圧倒的なポイント差をつけられているのに、トドメを刺すかのような一之瀬さんの退学。

Bクラスはすっかり意気消沈している事でしょう。

金田クラスと違ってれずちゃんの駒に加えてすらいない以上、これから彼らに出来る事は既に何もありません。お疲れ様でした。

龍園君の時もそうでしたが、れずちゃんは一切何もしていないのにこの結果。やはり、RTAにとつては事前準備をして人を動かしてやることこそが一番大事なのです。

南雲兄貴も坂柳さんがここまでやるとは予想外だったでしょうね

何をして再生のしようが無いほどの完全破壊ですから。

まあ、坂柳さんの裏に綾小路君とれずちゃんが居たからこそその結果なんですけどね。

ちなみに、本チャートではこのタイミングで一之瀬さんの心を絶対に折りますが、場合によっては退学まではさせないというルートもありました。

PPに余裕が無くて上手い事金田クラスを動かせなかったり、れずちゃんの力を見せ付けるのに失敗して坂柳さんが全面協力をしてくれなかったりすると、そうなる事もあります。まあ後者の状況ならそもそもリセしているんですが。

ですが、本走だと現状全てが上手く行っていますからね。一之瀬さんは何の問題も無く退学していきました。

一之瀬さんの退学について誰が悪いかと言うと、まずは南雲兄貴と綾小路君と坂柳さんといでにれずちゃんなわけですが、当然一之瀬さん自身にも十分過ぎる責任があります。

一之瀬さんが過去に万引きをしてしまった事は単なる事実でしかありませんからね。

家庭環境なんて言い訳にすらなりません。犯罪は単なる犯罪でしか無い。

そこを隠し切りたいのであれば、南雲兄貴に決してゲロってはいけなかった。

いえ、そもそも論として、Bクラスのリーダーや生徒会なんていう

実に目立つ、言い換えると攻撃の標的となり得る立場に身を置くべきではなかった。

もし彼女が一般女子生徒として普通に過ごすだけならば、こうはならなかった筈ですから。

万引きという犯罪を犯してしまったにもかかわらず、人を率いる立場に立とうとする事自体が間違いでしかなかったのです。

視聴者兄貴も、いくら美少女だからといって過去に万引きした人間に率いられるなんて真つ平ごめんでしょう？ 少なくとも私は絶対に嫌です。どのツラ下げているんだ？ としか思えません。これを許すのは正直宗教染みているとしか言えないですよ。

だから龍園君の時と同じく、この結果は彼女自身の責任が大きいわけです。

何はともあれ。

さようなら、一之瀬さん。

龍園君たち同様、一之瀬さんを退学させたのにも理由がもちろんあります。

彼女自身はリーダーとしては、戦力に劣るにも関わらず正攻法しか出来なかつたり、万引きの過去だつたり、全員で卒業する事が勝利よりも優先度が高い事だつたりと付け入る隙たつぷりの弱々ちゃんなのです、他の人間の駒になられると非常に面倒臭いんですよ。

具体的には、南雲兄貴と八神君。後は、唯一他クラスのリーダー格で残す予定の堀北さんと組まれるのも面倒です。デコイとして泳いでくれるクラスは1つでいいのね。

れずちゃん存在により、綾小路君は一之瀬さんを完全依存させる程には仕上げない以上、悪巧みを嫌う彼女をこちらに取り込むのは確実性が低い。彼女のクラスメイトを人質に取る策は、こちら側に付け

入る隙を作るだけの単なる下策でしか無いですしね。

だから、彼女には退学するか、せめて完全に使い物にならなくなる程度には精神崩壊して貰わなくてはならなかったのです。

一之瀬さんを退学させた次のイベントはバレンタインですね。

かわいそうな一之瀬さんを退学させた直後に手作りチョコをあげて綾小路君とイチヤイチャするという、どう見てもサイコパスとしか思えない行動をしましょう。最近こんななんばっかだな？

綾小路君は満面の笑みで非常に幸せそうにしています。

守りたい、この笑顔。

軽井沢さん？ チョコを作る元気など最早ないでしょう。

一之瀬さん？ つい先日退学しました。

タイム（とついでに綾小路君の幸せ）のためにヒロインたちを不幸な目に遭わせるのは心が痛みますね。でもこれ、RTAだから……！（揺らがぬ決意）。

そして更に時は進み、原作10巻部分である、3月初めの退学投票イベントが開始しました。

いい男の真嶋先生が月城理事長代理に真っ向から食ってかかる程の理不尽なイベントですね。1年教師陣のリーダーはやっぱいい男なんやなって。同期じゃないとはいえあの時坂上先生だけはぶられていたのは少しかわいそうだった。

このイベント後に、生徒の事などゴミとしか思っていない鬼畜武闘派理事長代理の月城おじさんが登場し、ここからしばらくはクラス闘争より綾小路君の鬼畜父親の刺客との戦いという風に作品が展開していきます。……皆まで言うまい。

話を戻すと、退学投票は綾小路君の鬼畜父親が差し向けた疑惑の非常に強いイベントなのですが、既に故龍園クラスが4人、故一之瀬クラスが1人の計5人も退学している以上、あのイベントの対外的な理由である学年の退学者0名が使いなくなるんですね。

そのためこのゲームでは、事前に複数人の退学者を出していると3月の退学投票イベントが少々様変わりしたものとなります。

自由度の高いゲームは神ゲーだな！（原作破壊）。

原作の退学投票のルールは以下になります。

賞賛票、批判票が各自に3票ずつ与えられ、クラス内で投票。

賞賛票―批判表Ⅱ結果。

最高得点者にはプロテクトポイント付与（退学を1度取り消す事が出来る）。

最低得点者は退学。

自分自身に投票することは不可。

記入は強制、同一人物複数記入不可。

最下位は退学。

他クラスの生徒1名に賞賛票強制記入。

これが少々変化するわけです。

具体的には、

投票システムと称賛者のシステムはそのまま。

退学者については、最低得点者の称賛票―批判票が―30を下回ると問答無用で退学。

退学者を出すとCP50加算。

最低得点者の称賛票―批判票が―30を上回った場合は退学は免れるがその人のPPは永久没収。

というルールになります。

まあ、こうでもしないと故龍園クラスが無条件で退学者5名とかいうとんでもない事になるため妥当ではあるんですが。

PP永久没収なんて、普通に考えたら実質的な退学みたいなものです。

この先学校生活を送るためにはずーっと介護して貰わないといけないわけですからね。何か軽いお菓子などを買うだけでも誰かに付き添いで奢って貰わないといけない、なんて普通に考えて地獄です。

ですが、いい漢の葛城君は義に厚いたため最下位となる戸塚君（ネタバレ）をこれからきつちり2年間保護してくれます。これで、いい漢の闇堕ちを防ぐ事が出来る訳ですね。戸塚君は居てもいなくても何も変わらないのですが、いい漢は優秀な戦力。これからも働いて貰いましょう。このためにも、龍園君たち4人と、可能なら一之瀬さんには退学して貰う必要があったわけですね。

もちろん、金田クラスや堀北クラス、雰囲気最悪の故一之瀬クラスではそうはいかないんですけどね。

金田クラスの救済になってないやん！ いや、でも50CP貰えるし……

勘のいい兄貴ならお気付きかもしれませんが、既に坂柳さんを取り込み、金田クラスを手中に収めている以上はこれも簡単すぎる試験です。

票の操作はあまりにも容易。

大人しく戸塚君といい漢には盛りあって貰いましょう。

退学しないだけマシでしょ？ AクラスならCPも大量だから2人で半分に分け合つたとしてもまだ楽しい生活を送れるわけだしね。これで坂柳さんとのリーダー争いに敗れたいい漢は完全に坂柳陣営、ひいてはれずちゃんの下に付いたわけです。

彼らも退学したり、銀髪美ロリへの怒りを抑えきれないまま敗色濃厚な龍園君に買い取られたりする原作よりは遥かに幸せでしょう。

まあ、原作というものを知らない戸塚君といい漢の2人の主観的には少々辛い状況かもしれませんが。

Aクラスの称賛者は、原作通り坂柳さんになって貰います。

れずちゃんがプロテクトポイントを得る事でクラス対決のリーダーになり、勝負科目を考えたりするなんてロスでしか無いではありません。

1年最後の試験の相手を決めるためのくじ引きという懸念点も、当たりを引く故龍園クラス、つまり金田君を支配している以上は問題ありませんからね。

故一之瀬クラスと金田クラスの退学者はどうでもいいです。

一之瀬さんの事が大好きで、そんな彼女の自主退学により心が折れてしまっている白波さんが自らを退学させるように提案したり、過去にスパイ行為が発覚している真鍋さんがCPのために退学させられたりするのでしょうか、れずちゃんには一切関係ないのでね。

称賛者も普通に神崎君と金田君になるのでしょうか。特に語る要素はありません。

では、皆さんご注目の堀北クラスです。

称賛者は当然、綾小路君になって貰います。彼には後にAクラスに移って貰うため、プロテクトポイントの持ち逃げが出来るわけです。本チャートの綾小路君が学年末の試験でAクラスと戦う訳がありませんから（ネタバレ）。

そして、気になる退学者には……

原作通り、山内君になって貰います。

櫛田さんでは？ と視聴者兄貴は予想していたかもしれませんが。確かに、可能ならば山内君なんていう居ても居なくても変わらない人間よりは面倒な櫛田さんを退学させたいです。

ですが、今それをやってみようと堀北さんの心が折れてしまいかねないので、平田君の闇堕ちを綾小路君が復活させる事が出来なくなってしまうですよ。

何せ、これから綾小路君はAクラスに移籍する以上、櫛田さんを消して平田君も闇堕ちした場合、堀北さんにとっては有能な駒が3つも消える訳ですからね。

平田君に関しては、櫛田さんを消すためには退学投票時に少なからず綾小路君が発言をしなければならなかったため、そんな状況を作った綾小路君では発破をかけられなくなるわけです。

堀北クラスに今そこまでの大打撃を与えるわけにはいかないんですよ。先程少し言ったように、堀北さんと彼女のクラスにはデコイになって貰わないと困るので。

そのために、前回の林間学校で山内君の魔の手から坂柳さんを助けずに、坂柳さんをれずちゃんに完全に依存させる絶好の機会とメリツトを犠牲にしたわけですよ。

勘のいい視聴者兄貴は前回、何故それをしない？ と疑問に思ったかもしれませんね。

本走でも、原作通りに坂柳さんに山内君を嵌めたり綾小路君を攻撃

するふりをしたりさせましょう。

それにより、月城おじさんが余計な事をするのも防げます。

更に言えば、坂柳さんとのプロレスによって堀北さんが心の中では疑問に思っている筈の綾小路君裏切り者疑惑を払拭する事も出来ません。疑惑も何も事実なのですが、今それがバレると面倒なのでね。

櫛田さんについては幸いな事に、近いうちにAクラスとなる綾小路君は堀北クラスでの立場の悪化を気にしなくて良くなる以上、退学させようと思えばいつでも出来る筈。

まあ、原作と違って綾小路君の協力者がめっちゃくちや増えているため、2年生編5巻よりはスマートフォンにやるんでしようけど。

軽井沢さんを龍園君たちへの生贄にしたパターンでの試走だと、2000万とれずちゃんと坂柳さんの存在をダシにして松下さんを駒に加えていましたね。彼女を使って内側から、Aクラスの面々や匿名アドレス等を経由して外側から、徐々に噂を流していました。

今回の綾小路君がどうするのかは知りませんが、いずれ櫛田さんを退学させるという任務はきっちり果たしてくれます。

そしてそれは、本走においては走者とれずちゃんの預かり知らぬ場所で作られるわけです。

いつでも簡単に潰せる櫛田さんに対して、焦ってリスクを取りに行く必要は全くないのです。

それはそうと、坂柳さんの山内君を嵌める策に対し、念を入れて金田クラスと坂柳さんの派閥を使って票操作をしてみれば……

はい、山内君が無事退学しました。

他の称賛者、退学者も計画通りになっています。

初期とは真逆の人格者となりつつある堀北さんは、裏切りがバレた挙げ句に惨めに暴れ散らかす山内君に対して一応の救済案を言ったはずです。例えば、定期的に物資を提供するとかね。

しかし、この結果。まあ仕方ないですね。クラスメイトからすれば、暴れ散らかす裏切り者をCP50と、少ないPPを支払ってまで介護する必要は皆無なので。

仮に得点が130を上回る事により山内君が生き残ったとしても、別にどうでもいいです。直ぐに耐え切れなくなつて自主退学するでしょうしね。

原作通り平田君は闇堕ちしている筈ですが、これまた原作通りにそのうち綾小路君がフォロワーをしてくれます。

頑張つて踊つてくれよ、平田君。

Bクラスは悲惨ですね

一之瀬さんにつき白波さんも退学。しかも、白波さんに至つては自ら生贄になつたわけですからね。持ち前の団結力など最早見る影もありません。原作でも、Aクラスに次ぐアベレージと団結力しか評価されていなかったBクラスから、その団結力すら失われたらもう何も無いな？

金田クラスは逆に喜んでいるかもしれませんね。裏切り者でヘイトが高い真鍋さんを切り捨てる事ができ、更にはCPが0から50になつたわけですから。まあ、CPに関しては束の間の喜びに過ぎないのですが……

Aクラス以外がどんどん不幸になるのを眺めたところで今回はここまでです。

ではまた次回。最終回ですね。

サラバダー！

綾小路清隆の決意

怜山の手によって南雲生徒会長の策略が挫かれた林間学校を終え、オレたちは堀北学から莫大なPPを受け取る事が出来た。

これにより、オレは直ぐにでもAクラスに移籍する事が可能となった。

まずはオレたちの目標の1つが達成されたと言える。

3学期もまだ始まったばかりだというのに、流星は怜山だ。

まさか、冬休みに堀北学から依頼を受けてからここまで早く結果を出すとは……やはり、怜山はオレをして未だ実力の底が測りきれない、余りにも頼りになり過ぎる最高過ぎるパートナーだ。

とはいえ、まだオレには現Cクラスでやるべき事が残っている。

目標のもう一つ、クラス間闘争の完全終了が未だ達成出来て居ないのだから。

勝敗自体は既にほとんど付いている。

だが、未だ100%終了したとは言えない。足掻く人間はまだちらほら存在している。

怜山には謝られたが、全く気にする必要はない。

むしろ、本来オレ1人でしなげばならなかった筈のPP稼ぎに甚大な協力をしてもらい、感謝の気持ちしか無い。

これからは極力怜山の力を借りずにオレの手でやるべきだろう。

幸いな事に、使える手段は大量に手に入ったし、PPにもだいぶ余裕がある。

これ以上、何よりも大切な怜山の手を煩わせる訳にはいかない。

林間学校を終えてから数日後、クラス間闘争を終わらせるためにオレは坂柳の策に乗り、一之瀬を潰しにかかることにした。

やる事は簡単。

坂柳が一之瀬を誹謗中傷するから、そこに乗じてオレからも噂の操作をしてしまっただけ。

一之瀬に万引きをした過去がある事が坂柳から伝えられた。かつて生徒会に入る条件として、南雲生徒会長に言ってしまったのだか。

彼女には過去に何かがあったのだろうとは思っていた。だが、どうやってそれを暴き、一之瀬を攻撃するかを考えて居たところにこの情報。

やはり坂柳は非常に優秀な人間だ。

学年でも怜山に次ぐと言っているだろう。

他に坂柳に対抗出来るとしたら、未だ実力の底を見せない人物である高円寺くらいか。

このレベルの人間が味方に付くとこれ程までに物事が手つ取り早くなるのか、とオレは思った。

かつてオレは坂柳から宣戦布告されたため、怜山に引き合わされた時は少々気まづかったが……せっかく怜山に橋渡しして貰ったのだから友好的に接するのは当然といった所。

オレには別に坂柳と対決したいなどという気持ちは無いしな。Aクラスに移籍した後個人的に競いたいというならばいつ来て貰っても問題無い。

それはそうと、一之瀬に万引きをしたという過去があるならば攻めるのは容易い。

2学期末に金田を支配下に入れ、坂柳とも手を組む事にした以上、

Bクラス以外の全ての方向から一之瀬を攻撃する事が出来る。

噂がどれだけ進行しているかの情報も瞬時に手に入り、随時調整が出来る。

ここまでやられては、林間学校で既に坂柳から攻撃を受けていた一之瀬は到底耐えきれないであろう事が目に見える。

あまりにも使える手札が多すぎる。

こんなもの、失敗する方がおかしいとすら言える。

これら一連の流れに、今まで頼りきりであり、これ程までに豊富なカードを揃えた立役者である怜山の手を煩わせる必要はない。

匿名にしてしまえばバレる心配は無いとはいえ、誹謗中傷はどうしてもリスクのある行為のため、怜山にそんな事をさせずに済むのは僥倖と言える。

そうして、しばらく経って一之瀬が不登校になったという話が伝わって来た直後にオレは動いた。

メールを送り、一之瀬の部屋の前に行く。

手紙で用件を知らせてもいいと記載したが、一之瀬が自分の部屋に来て話して欲しい、と言ったから。

一之瀬という人間の性格と行動パターンを分析した結果、直接話すように言うだろうとはわかった上でメールの文面を作成したわけだが。

「綾小路君……入っていいよ」

「ああ。悪いな。すぐに終わる」

憔悴しきった様子の一之瀬に部屋へと招かれてからオレはそう言った。

そう。すぐに終わらせる。
話す内容は決まっている。

「一之瀬。話は聞いた。噂の事だが……」

オレが噂について言及すると、一之瀬は怯えたようにビクツと身体を震わせた。

「オレは最初、全て嘘だと思っていた。一之瀬がそんな事をする筈が無いとな。だが……」

オレはあえて間を作る。

「万引きしたという話は本当なんだってな？」

「……!! どうして……!?!」

一之瀬が絶望した表情をしている。

オレは更に畳み掛ける。

「詳しくは聞かない。事情も別にいい。やったという事実が変わりはないからな。だから、オレが言いに来た用件はただ1つ」

「Bクラスとの同盟を……解消させて欲しい」

これが一之瀬にダメージを与える言葉だとオレはわかっていた。

彼女はオレたちとの同盟に何やら安心感のような物を抱いているみたいだったから。

とはいえ元々、オレはクラス間の同盟など結んでいない。オレが結んだのは、あくまで一之瀬個人との協力関係だ。

普段の一之瀬ならば即座に指摘しただろう。せめて堀北の許可は取ったのか、くらいは聞いてくる筈。だが、今の一之瀬はそんな事に

すら頭が回らない。

「え、ど、どうして……」

「万引きした人間が率いるクラスなんて信頼出来る筈が無いだろ？」
「……………!!」

それはまさしく、一之瀬にとっての死の宣告。

一之瀬帆波という人間に今までオレが接して来た経験から分析した結果導き出される、精神を破壊するための最適解。

一之瀬は声を出す事すら出来ていなかった。

オレは言い終えて直ぐに部屋を出た。

背後から嗚咽を漏らす音が聞こえて来るのを無視しながら。

一之瀬はこれで完全に破壊出来た。

これからクラスのためを思い、彼女は自主退学する。

悪く思うなよ。

全ては、オレと怜山のためだ。

一之瀬が自主退学した後、オレと坂柳と橋本は報告のために集まっていた。基本的に、何かを企む時はこの3人で集まることが定例となっていた。極力くだらない事で怜山の手を煩わせたくないというのは、オレと坂柳の共通意見だったから。

その際に橋本が、

「そういえば、疑問に思ったことがあるんだが……」

なんて言ってきた。

「何でしょう?」

坂柳が発言を促す。

オレにはその内容が大体想像出来ていた。

「どうして一之瀬はリーダーなんていう目立つ立場にわざわざ立とうとしたんだ? でなけりや今更過去をほじくり返したりされなかつた筈だろ?」

橋本は続ける。

「万引きはそりゃあ悪い事だが、その辺の奴が昔やったってくらいなら、学年全体を巻き込むような騒ぎにはならないだろう。『そもそも誰だ? だからどうした?』って反応の奴がほとんどの筈だ。わざわざ過去を暴いて探りを入れられたりもしないだろうしな」

「俺なら、下手な事はせず引込んでるな。そうすりゃとりあえず平穏な学校生活を送れるだろうから」

それは、至極当然の疑問。

万引きは犯罪ではあるが、いくら坂柳が尾ひれを付けまくったとはいえ、普通の人間がやる分にはあそこまで大きな話にはならない筈だ。龍園の暴力の方が余程問題だろう。

なんなら、一之瀬を破壊するためにオレたちがやった誹謗中傷だつて十分問題だ。堀北が言ったように、社会でやった場合は真偽問わず罪に問われる物。

まあ逆に言えば、オレたちの誹謗中傷は学校内で留まる程度であれば犯罪歴に追加されるような物では無いため、万引きとは少々異なる

のかもしれないが。

話を戻すと、万引きがバレたら噂にはなるし、居心地は極めて悪くなるだろうが……そもそもバレるような事自体が稀だと言えるし、学年全体を巻き込むような大事にはまずならない。

それに、一之瀬のような美少女がそれをやった場合、噂は普通より広まるだろうが、事情を話して泣き落としをすれば、身近な人間や一之瀬の美貌に目の眩んだ人間などは慰めてくれるだろう程度の話でしかない。

だが一之瀬はわざわざ目立つ立場に立ち、そしてもの見事に南雲生徒会長に過去を吐かされ、それを利用したオレたちから攻撃され、学年全体を巻き込む騒ぎとなり、最終的には自主的に退学する結末へと至った。

「ふふ、簡単ですよ」

坂柳が笑って答える。

「人間のそういった行動は、多かれ少なかれコンプレックスに起因します。一之瀬さんの場合はもちろん、万引きしたという過去ですね」
「彼女は、元々人の前に出たいという性格、欲求を持っていました。それに加えて、決定的な失敗の過去。店員の温情によって犯罪歴にならなかった以上、そんなことはどうとでもなる筈なのに、彼女自身がそれを許せなかった」

「だから、彼女はその罪滅ぼしとして、今まで以上に人に尽くす義務感のような物を背負ったのです」

「元々彼女は善人の気質ではありません。とはいえそれだけならば、あそこまで完璧に振るまう事は不可能。人間は、基本的に自分のために行動する生き物ですから」

「ですが、それが過去を起因としたコンプレックスの裏返しとして自らに課した行動というならば……十分、考えられることです。人の前

に立ち、完璧な善人として振る舞う事自体が自分のための行動に他ならないのですから」

坂柳の見解は概ねオレと同じものだった。

一之瀬が集団を率いる事に固執した理由。それは過去の贖罪なのだ。一之瀬が驚くほどの良い奴だというのもまた事実だとは思いますが、完璧な善人というわけでもない。

だからこそ、オレは一之瀬に止めをさす時にああいった言葉を選択したのだから。

「なるほど……それで、リスク度外視でわざわざ人の前に立ち上がった、ってことか」

納得した様子を見せる橋本。

坂柳の言葉にオレが補足を入れる。

「それに、かつてオレの前で一之瀬はボロを出した事があった」

「ほう？ そりや気になるな。何をしたんだ？」

オレはあの時のことを思い返しながら橋本に語る。

「昔、白波という生徒に一之瀬が告白のために呼び出された事があるんだが、その時一之瀬はオレを偽の彼氏とする事で誤魔化そうとした」

「へえ、そりやあ……意外なこった」

そう。

それは『一之瀬帆波』という人間がやるにはあまりに不自然な行為。

「だろう？ 本来皆の前で出している、一之瀬帆波という人間の性格ならば、そういう卑怯な行為は嫌う筈だ。むしろ、そういった行動を

嗜める側の人間の筈だ。だが、一之瀬はそれをやった」

「そう……まるで、自分さえ良ければそれで良いという、極めて一般的な人間の姿がそこにあった」

「そこでオレは、一之瀬が完璧な善人などでは無いことを確信した。あの振る舞いは恐らく過去に何かがあったことが由縁だろう、とな」

坂柳が言う。

「典型的な逃避行動ですね。まさに一之瀬さんの行動原理はそこにある」

「ああ。つまるところ一之瀬は、自分の許容範囲を超えた出来事に遭遇すると逃げようとする極普通の人間なんだ。告白のための偽装彼氏であり、万引きという過去であり、な」

「なるほど……理解できたよ。そういう事だったんだな」

橋本が得心いったかのように頷く。

坂柳が話を締めに入る。

「先程言ったように、コンプレックスの裏返しというのは誰にでも当て嵌まります。私の場合は、身体能力の欠如に起因する、他者を支配、屈服させたがる歪んだ趣味嗜好ですね。普通にすれば、私は誰にも勝つ事は出来ませんから」

「おいおい。支配やら屈服させるやらの歪んだ趣味嗜好って自分で言うか？」

橋本は呆れたように言う。

「だが、俺にも心当たりはあるな。俺だと……自分だとトップにならないと理解しているが故の強者に付く行動、ってどこか」

「ふふ、それを自覚出来る分、やはりあなたは優秀ですね」

「そりやどうも」

明らかなお世辞。

まあそれにいちいち反応する程度の奴ならば、今ここに居る事は出来ない。

「話を戻すと、人を攻撃する時はまずそこを探ることが基本となります」

「散々言いましたが、一之瀬さんは別に悪い人間ではありませんよ。むしろ、普通の人間よりも遥かに善寄りの人格者と言いつける事が出来ますし、実力も高校1年生としては十分過ぎるくらいにはあります」
「ですが、あまりにも付け入る隙が大き過ぎました。彼女1人では私たちの相手には……なり得ませんね」

そう。

一之瀬1人では何の脅威にもならない。

だが、彼女の本領は、支えるべきトップの下に付いた途端に最良の物として発揮される。一之瀬は元々参謀に向いた人材なのだ。

もし一之瀬が本来の実力を十全に発揮した場合、非常に面倒だ。

例えば、南雲生徒会長辺りの下に付いた場合、将来的に強力な敵となる事が容易に想像出来る。

その場合、オレをして排除が難しい純粋な強敵となるだろう。

だからこそ、オレは事前に一之瀬を排除することに決定したのだから。

一之瀬を退学させ、3月月初に行われた退学投票も容易にくぐり抜けた。

金田を支配し、坂柳と手を組んだ以上、この手の試験は最早何の危

険性も無い容易な試験だと言っている。実際に、オレは坂柳と茶番を演じる事によって試験を徹頭徹尾計画通りに運んだ。

坂柳が言うには、どうやらこの無理矢理退学者を出そうとするかのような試験の裏には最近赴任して来た月城理事長代理が居るらしい。奴はあの男からの刺客で、坂柳の父親が嵌められてしばらく理事長から外されている間はこういった手段でオレを退学させにかかるようだ。

坂柳とオレが演じた茶番は、月城に余計な事をさせないための策でもあった。彼女は、自分の父はいずれ必ず戻ってくると言っていた。だからそれまでは耐えてくれ、と。

あの男が刺客を差し向けることはわかっていた。いつでも来るがいい。徹底的に処理してやる。

それは、怜山とこれからも平穏な日常を過ごしていくために、あの男を失脚させる術を探る事にも繋がるのだから。

非人道的な施設であるホワイトルームのリーグ以外にも、奴を倒すための手段は可能な限り揃えておきたいからな。

話を戻すと、本来なら山内よりも、学年トップと言えるコミュニケーション能力を持つ櫛田を退学させたかった。だが、すぐにオレがAクラスへと移籍する以上、このタイミングで櫛田を退学させてしまうと堀北の心が折れてしまいかねない。

堀北には、ヘイト分散のための囿になってもらう必要があるからな。

だから、今まで堀北の成長を促してきた。精神面のケアもしてきた。怜山もそのために林間学校で堀北に色々手を貸してやったらしい。

1番の理想は櫛田よりも高円寺を退学させてしまう事なのだが、この試験でそれは難しいだろうと判断した。まあ、焦って墓穴を掘る必要は無い。それに、高円寺はどうやら個人でAクラスに上がりたらしいから、いずれ2000万ポイントをくれてやってもいい。

櫛田についても焦る事はない。櫛田の弱みは既に掴んでいる。

過去にクラスを崩壊させたという話も録音済みだ。

2年生になって、堀北に程々の希望を与えてから、どこかのタイミングで退学させてしまえばいい。

これだけの手札があれば失敗する事は無いだろう。

仮にオレに与えられたカードがもつと限られたものだったとしたら、堀北辺りが庇うことによって、櫛田の退学が妨げられる可能性もあった。

だが、既にその可能性も潰えた。

新しい駒として、松下に目を付けた。

松下は優秀だが、所詮はその枠を出ない人間。適当に旨みを与え、こちらの實力を見せ付けてしまえば操る事は容易だろう。

近いうちに平田の精神を再生させてやる必要がある。平田はオレの脅威にはなり得ないが、堀北にとっては有用な駒なのだから。

じきにオレが居なくなり、櫛田も退学してもらおう以上、残された堀北には平田の存在は必要だろう。

あと、もう少しだ。

1年最後の特別試験をオレは勝利で終わらせ、實力を対外的にも十分示した後、Aクラスへと移籍する。

その後はもう、怜山の手を煩わせる事は一切無いだろう。

何か問題が起きても全てオレが処理してしまえばいい。

月城理事長代理、ひいては裏にいるあの男についてもオレが対処する。必要とあらば、坂柳の力を使えばいい。

怜山以外の全てはオレの駒でしか無い。

何人たりとも、怜山にその汚い手を触れさせはしない。
オレが、全てやってやる。

RTAの終わり、はーじまーるよー

今回は、一之瀬さんを退学させ、退学者投票を計画通りの結果にした所でしたね。

というわけで、3月8日、1年生最後の特別試験の発表の日になりました。

内容は、選抜種目試験という名のクラス直接対決。

いい男の真嶋先生が最後のルール説明をします。

2クラスによる直接対決。

対戦する各クラスから10種目ずつ候補を提出。

試験当日に、各クラスは自クラスの10種目の中から5種目を選択。

提出された計10種目の中から、学校側が7種目を選択。

勝ったクラスにはCPが100与えられる。

各種目について、勝敗に応じてCPが30ポイント増減。

負けたクラスの司令塔は退学。

種目は、絶対に勝ち負けが決まる（引き分けがない）ものであることやマイナーすぎないもの、複雑すぎないものであること。

極めて細かなジャンルは認めない事がある。

筆記試験などを種目とする時、学校側が問題を作成。

基本ルールを逸脱し、改変する種目は禁止。

試験当日は、多目的室にて司令塔が種目進行。

体育館等は使用可能だが一部例外あり。

同じ内容に見える種目は各クラス1種類のみ。また、時間がかかり過ぎる種目も禁止。

種目に必要な人数は交代要員を除き全種目で異なるものである必要あり。人数制限は1〜20人。

10人を超える種目は最大2つ。
同じ生徒の出場は原則的に1回のみ。

参加人数が多い種目が複数選ばれ、生徒の数が足りなくなった場合のみ2回目以降の出場が可能

司令塔は7種目全てに関与可能。手段は申請し、学校が適切か判断。

日程は、

3月8日 対決クラスの決定

3月15日 各クラス10種目及びルール発表

3月22日 試験

特別試験前に、あらかじめ対戦するクラスと各クラスが用意した種目は生徒全員に公開される。

以上となります。

原作において、1年生編最後の試験であり、最大のヤマ場。
そして、このRTAにおいて取り扱う試験としても最後を飾るもの。

今までの仲間達の成長を見ることができ、綾小路君と坂柳さんが遂に直接対決する、最後までどちらが勝つのか分からないほど実力が拮抗した熱い戦いの巻となりますが……このRTAでそんな熱い展開になどなる筈がありません。

圧倒的戦力で押し潰す、最初から全てが見え切った結果となります。

最早作戦など全く必要ありません。策なんて弱者が立てる姑息な手段なのです。

大正義軍団には……フヨウラ！

監督の仕事は戦う前に戦力を整えることだってそれ一番言われる事だから。

司令塔はもちろん、我らが銀髪美ロリの坂柳さんをお願いしましょう。Bクラスは神崎君、堀北クラスは綾小路君、金田クラスは金田君になる筈です。

次に、司令塔が集まって組み合わせを決めるためのくじ引きがあるのですが、その際には故龍園クラスが当たりを引きます。

つまり、金田君を支配している以上は組み合わせをこちらで決められる、ということ。

Aクラスの相手は原作とは違ってBクラスにします。

元々戦力でAクラスに劣るのに、一之瀬さんとおまけで白波さんを失い、持ち前の団結力も消滅したため、もう何も手を加えずともBクラスに勝ち目はありません。完膚なきまでに叩き潰しましょう。

裏で動いたりなどせずに普通にやっても問題無く5勝してくれる筈です。もちろん、やろうと思えば7勝する事も可能ですが、事ここに至ってはそんな事をする理由も必要も皆無ですから。

堀北さんには、5人が失われた金田クラスを打倒する事で希望を見出して貰います。

ここで、綾小路君にはしっかりと本気を出して頂きましょう。

こうする事によって、一応直近で勝利したということで綾小路君の裏切りと、それによって彼が今まで何をして来たのかを漸く理解する堀北さんの絶望堕ちを防ぐと共に、綾小路君の移籍がAクラスのクラスメイトにも認められるようになる訳ですね。

とはいえ、支配している都合上、流石に金田クラスを大敗させる訳にはいかないため、4勝3敗になるように調整して貰います。

原作以上に本気を出した綾小路君ならば放っておいても見事完遂してくれます。

Aクラスの種目やルール決めは我らが好戦的銀髪美ロりに全て任せてしまつて問題ありません。このために、れずちゃんではなくロリ

にプロテクトポイントを与えた訳ですから。

というわけで、いつも通り試験当日まで自由行動です。すつかり何もしない事が当たり前になりましたね。

少女最後の自由行動中……

22日、試験当日を迎えました。

これから、Aクラス対Bクラスの決戦（虐殺）が始まるわけです。

Aクラスどころか、綾小路君と並んで学年最強の兵器たるれずちやんは最終種目以外に出番がないため、ひたすら眺めていきましょう。

少女観戦中……

お、我らが銀髪美ロリがフラッシュ暗算をしていますね。

本RTAにおいてははれずちゃんにあっさり負け続けているから印象が薄まっているかもしれませんが、フラッシュ暗算3桁15口を難なくこなす坂柳さんってほんと化け物ですよねえ。

それがどれくらいやばい事なのかいまち想像出来ない兄貴は、是非とも某動画サイトで検索をかけてみてください。

計算どころか、そもそも私には数値が認識出来なかつたので（凡人）。

私も理系ですし計算力にはまあまあ自信があるのですが（自分語り）、あんな特別な訓練をしないと絶対無理だと思いましたがよ、ええ。

綾小路君はともかく、ロリと高円寺君はフラッシュ暗算の訓練なん

てした事あるんですかね？

そして、松下さんはあの3人程の精度があるわけでは無いとはいえ、普通の学生にも関わらず中学の頃フラッシュ暗算をやっていたと言っていましたか………いったいどんな中学生を送っていたのか。私、気になります！

そんな事を思いながら眺めていると、無事にロリの勝利でフラッシュ暗算を終えました。まあ、あんなの一部の化け物勢以外出来るわけがありませんからね。残された神崎君が銀髪美ロリに勝てる訳もなく。

そして、遂にれずちゃんが参加する最終種目となりました。

内容は、当然みんな大好きチェスとなります。

1対1の最終決戦ですが、対戦相手が綾小路君でも無ければれずちゃんが負ける筈がありません。

対戦相手は……姫野さんですね。

れずちゃんが卓についた瞬間、負けを確信した顔をしていました。

オートにして、れずちゃんに全てを委ねましょう。この2人ではステ差があり過ぎるため、れずちゃんは手番が回ってきた瞬間に指してくれます。手動でこの速度を上回るのは不可能なため、チェスに自信がある兄貴だとしてもここはオートにしてください。

原作と同様に、チェス中に司令塔が介入出来るのですが、れずちゃんがアドバイスを受ける必要など皆無。当然、坂柳さんも何も指示して来ませんね。

というわけで、無事勝利しました。

そしてクラス対決の結果は、5勝2敗です。

想定通りの結果ですね。

れずちゃんの実力を目の当たりにして、改めて絶望に打ちひしがれるBクラスの面々を眺めながら、CDクラスの結果報告を待ちましよう。

メールが届きました。

なにになに……？

無事、4勝3敗で堀北クラスが勝利したようですね。

れずちゃんのために原作以上の本気を出した綾小路君は、月城おじさんの妨害をもともしなかったようです。まあ、単純に金田君と、おまけで椎名さん以外の幹部が全滅した故龍園クラスでは戦力不足過ぎて綾小路君のおもちやにしかならないわけですが。

そして、試験直後に2000万PPを使い綾小路君がAクラスに移籍して来ました。

いらっしやうい、綾小路君。

移籍した喜びにより、この時点で綾小路君が、以前言ったように何よりも、具体的にはクラスのみならず自分の自由や安全等よりもれずちゃんを最優先するようになり、れずちゃんにだけは絶対に危害が加わらないように、不利益を被らないように、何も指示しなくても自分で勝手に動いてあらゆる物を排除し尽くしてくれる、完全依存自発的傀儡化綾小路君となりました。

遂に完成しちゃいましたね。

彼は人生で初めてのの夢を持ちました。

もう、誰にも綾小路君を止める事は出来ません。

この時点で、ここから先は綾小路君とついでに坂柳さんに全てを任せ、れずちゃんとは走者は何もせずひたすらオートとスキップで流しても余裕でAクラス卒業する事が可能となりました。

残された堀北さんが驚愕の表情を浮かべた後、後悔をし始めたようです。

綾小路君の裏切りを理解し、今まで彼が何をやって来たのかを大体察し、その結果綾小路君を止められるとしたら自分しか居なかったという事に漸く気が付いたみたいですね。

実際、仮に堀北さんが最初から綾小路君と友好的に接していたならば、こんなことにはならなかったでしょうからね。

本当に、れずちゃんと綾小路君を止められる可能性が僅かにでもあつたとしたら、それは唯一堀北さんしか居なかった。

まあ、神視点を持たない堀北さんにそんな事はまず起こり得ない訳ですが。

とはいえ、龍園君や一之瀬さんの時と同じですね。厳しいようですが、リーダーをやる以上この結果は彼ら彼女ら自身の責任となってしまうのです。特に堀北さんの場合は、限りなく低いとはいえ、勝つ可能性そのものが最初から0%という訳では無かったですしね。

無茶を承知で言いますが、綾小路君の隣人であり、れずちゃんに無視されない程度に才能がある堀北さんにだけは、綾小路君とれずちゃんを籠絡し、れずちゃんをDクラスに誘うという明確な勝ち筋があったのです。

彼女は、綾小路君が茶柱先生に脅迫されるまでの短い期間でそれをやり遂げなければならなかった。

仮に、茶柱先生の脅迫がもっと後の出来事、いえ、そもそも脅迫などしなければ……

仮に、堀北さんが1学期にれずちゃんと綾小路君との交流に全力を

注いでいたら……

もつと別の未来が彼女たちを待っていた筈。誰一人クラスメイトを退学させずにAクラスとして卒業することも可能だった筈。

堀北さんは、手遅れになるまでその事実には気付く事が出来ませんでした。

その代償は、龍園君と一之瀬さんは退学によって、堀北さんはこれから2年もの間勝ち目の無い戦いのため孤軍奮闘し続け、他の誰よりも踊らされ続けることによって支払う事になるのです。

ここまで色々気を使ってきましたし、林間学校で発破をかけずらしたため大丈夫だとは思いますが、もし堀北さんが再起しなさそうに見えたら学君にも声をかけることでリカバリーを図ります。

れずちゃんと綾小路君の学君からの信頼は失われている可能性がそれなりにありますが、だとしても、妹大好き学君はどうか発破をかけてくれる筈。

今回は……大丈夫そうですね。調整はバツチリだったようです。やっぱりこの綾小路君籠絡Aクラスチャートを……最高やな！

堀北さんには頑張って貰わないと困りますからね。残り2年間全クラスを統治するなんて面倒でしか無いので、彼女には程々に頑張つてデコイの役割を全うしたり、生徒会長になって下級生の相手もして貰ったりしないといけません。

お兄さんと同じ生徒会長になれるんだよ？ 嬉しいでしょ？

ですが、そうやって堀北さんが復活して孤軍奮闘したところで、龍園君たちも一之瀬さんたちも消え、綾小路君がAクラスに移籍する以上勝ち目なんて最早あるはずも無く。

というわけで、全ての準備を終えたここからは、残り全ての期間をオートとスキップ連打で流します。ひたすらスタートボタンを連打し続けましょう。

もう、全ては終わりましたから。

少女オートとスキップ連打中……

そうして、3年生の卒業式の日を迎えました。

れずちゃんは当然Aクラスのままです。

周りを見渡してみると……2年を経て成長した綾小路君と坂柳さん、いい漢に橋本君といったいつものメンバーに加え、高円寺君の姿も見えますね。

どうやら高円寺君も何かしらの手段を用いてAクラス入りを果たした様子。まあどうでもいい事です。

Aクラスみんなはとても楽しそうにしていますね。

在学中に1度も危機を味わう事もなく圧勝で卒業出来て良かったね。

基本能力が全クラスの中で最も高く、授業態度も一番良く、努力を惜しまない彼らならば、恩恵に自分自身が潰される事もほとんど無いのでしよう。

実際、他クラスより明らかに勉学にちゃんと励んで来た面子の集まるAクラスが恩恵を受けるのは、どう見ても一番妥当と言えるでしょうしね。

堀北さんは……少し離れた所に居ましたね。

なんとかBクラスまでは上がったみたいですが、どうやら2000万を使ってAクラス入りするのは断ったみたいです。

進学希望の堀北さんですが、恩恵が無くとも彼女のスペックがあれば普通に受験したら大抵の大学には行けるでしょうし、問題ないでしょう。

生徒会長でありながらBクラス卒業した初の人間という不名誉を与えられてしまったようですが、それは仕方のない事。敗色濃厚にも関わらず、2000万を使わない選択をしたのは堀北さん自身ですから。

こうして見渡してみると、随分と色々な生徒が居なくなっていますね。

フルメンバーどころか人数が増えているAクラス以外は。

まあこれも仕方ない事です。

そして、遂にれずちゃんがお待ちかねの卒業証書を貰いました。

はい、ここでタイマーストップ。

完走した感想ですが……ほとんど完璧に進められたため、考えられる限りはベストなタイムが出たと言っているんじゃないでしょうか？ 勿論、自己ベスト更新であり、ワールドレコード更新となりました。

リセマラ地獄を課し、序盤に全てのヤマ場を詰め込む事で、集中力が乱れる後半に何もしなくて良くするチャートは走者に優しい物となつていていると思います。

最初はひたすら綾小路君といちやいちゃしていただけなのに、後半は少し手を貸すだけでAクラス以外の人たちがどんどん不幸になつていくハートフルRTAでしたね。

好きな子のために他には目もくれず全力を尽くす綾小路君……よう実は少年漫画だった……!?

ガバも無かつたため、反省点は特にありません。これ以上速くしたいなら、リセマラでれずちゃんを超えたGO神みたいなのを出すしか無いのではないのでしょうか？ 後は何かしらのバグ技でも使うなら速くなるかもしれませんね。

まあ、細かい部分を出すならチエスの腕を磨くとかもあります、爆発的な短縮方法は私には思い付きません。

画期的なルートを見つけ出した方が居れば、是非こっそり教えてくださいださると嬉しいです。

では、長かつたRTAもここで終了となります。長い間、ご視聴いただきありがとうございます。

茶柱佐枝の諦念

私は教師になってから、いや教師になる前から誰にも話せない悩みがある。

それは、ある悪夢を繰り返し見続けている事だ。

決して忘れる事の出来ない、あの日の出来事が夢の中で繰り返される事。

私のせいで、まとまっていたクラスは、直ぐそこまで迫っていたAクラスへの夢は、脆くも崩れ去ってしまった。

親友だった知恵と決別し、異性として大切な人である彼との関係も終わりを迎えた。

私は一体何がしたかったのだろうか。

何を、すべきだったのだろうか。

答えはあれから約10年経った今でも出てこない。

そんな私は未だに失敗してしまった過去に、成し遂げられなかった夢に執着しこの東京都高度育成高等学校の教師にまでなった。

我ながら、実に愚かな事だと思う。

私がかつて自らのミスによってクラスごと落とされる事になったDクラスの教師となり、対外的にはAクラスに興味が無いように振る舞いながらも、内心は他の誰よりもAクラスを切望する……そんな、愚か極まる行動をしていた。

『お前たち、まだあの事で揉めてるのか？ 何年経ったと——』

高校の同期であり、教師として同僚でもある真嶋に言われた事を思い出す。

時間など関係ない、とあの時真嶋には言ったが、私自身それがどんなに馬鹿げた話かという事は十分過ぎる程理解していた。

そんな、言つてしまえば何の意味もなく下らない日々を延々と送つていたところ、予期せぬ事態が、私にとって希望とも言える事態が発生した。

Dクラスに、異常とも言つていい程に逸材が集結したのだ。

基本能力が極めて高く、素質ならば歴代最高とも言われる現生徒会長と張る事も出来るであろう堀北。

Aクラスに入れても上位の総合力を持つであろう平田、櫛田。

底知れぬポテンシャルを持つ高円寺。

そして何より、綾小路清隆。

特に高円寺と綾小路は、この学校の歴史上で見ても極めて優秀な生徒だと言えるだろう。少なくとも、私の世代には、私が教師として今まで見てきた生徒には、この2人程の逸材は存在しなかった。

坂柳理事長から綾小路について聞いた時、綾小路以外にも逸材が多数居る事を知った時、私は歓喜した。

私がAクラスに興味が無いだろうという理由で綾小路をDクラスに入れ、私に綾小路の抱える事情を教えた理事長の思惑には真っ向から反してしまおうが、その事など完璧に頭から離れてしまおう程に。

元々、期待などしていなかった。

いや、正確に言えば諦めていた。

今よりもクラス間の差が遥かに小さかった私の代ですら、私というたった一人の暴走によつてそれが叶わなかった以上、DクラスがAクラスに上がることなど不可能だと。

だが、今年はあるのかもしれない。

そう思わされるような生徒たちの姿がそこにはあった。

私は自らの野望に大きな火が付いた事を感じ取った。

……確かに今年のDクラスは特殊で、尖った生徒が集まっているとは思っていた。

だが、正直言つて5月1日時点で0ポイントになるとは思っていなかった。とはいえ彼らの授業態度はあまりにも酷いものだったのはい訳のしようもない事実。私も一応は教師であるため、彼らの態度には思う所が無いとは言えないし、下された評価は実に妥当だと看做さざるを得ない。

更に言うと、狙うべき相手であるAクラスは、歴代最低点を叩き出したDクラスとは逆に、歴代最高点を大きく更新する965ポイント。そして綾小路や高円寺だけでなくAクラスにも歴代最高レベルの逸材が1人存在していて、しかもその生徒の力を使う事すら無くそれだけの高ポイントを叩き出したのだという。

だから、私は直ぐに動かなければならない、と思った。

5月になり、クラス間闘争について発表した瞬間、私は動いた。

自らがDクラスに配置された事を不満に思い、個人ではなくクラス単位でAクラスに上がる事に執着を持つ堀北を使って綾小路にAクラスを目指させるように仕向けた。

その結果、Dクラスの間試験はAクラスに次ぐ順位となった。

良い順位ではある。過去問を活用した綾小路の実力はやはり確かだったと言える。

だがやはり、立ちはだからAクラス。

……もしこの時点で、注意すべきはAクラスなどではなく、あの生徒ただ1人だったのだという事実に気が付いていたならば、未来は違った物になっていたのだろうか。

しかし、言い訳になってしまいが、いくら教師とはいえAクラスで何があったかなど他クラスの教師である私が把握し切る事は出来なかったのだ。だから、私はあの生徒が既に動いているという事実には気が付く事が出来なかった。

その後、綾小路は須藤とCクラス間の争いにおける裁判にてこの上ない働きを見せた。

教師としては、ここで須藤は何らかの処罰を受け、日頃の行いを反省すべきだとは思ったが……まあいい。

どうやら生徒会長の堀北学も綾小路に目をつけたらしい。

それは堀北学から見ても綾小路はBクラスの一之瀬、Aクラスの葛城よりも優れている事を意味している。

まあ、最初からそんな事はわかっていた事ではあるのだが。綾小路の実力は普通に生きてきた高校生が持つ様な物では無いのだから。

ただ、当の本人は生徒会に所属する気は無いみたいだ。

時が経つにつれて綾小路の実力は次々と発揮されてはいる。だが、まだ足りない、と私は思った。何故なら、将来的な1番の敵であるAクラスもまた、歴史上類を見ない程に優秀な生徒の集まりなのだから。

私も授業のために何度も彼らを見てはいるが……やはり、その中でもあの生徒は群を抜いている、と言っていいだろう。高円寺や綾小路同様、能力の底が私をして全く測り切る事が出来ないのだから。

その時の私は、彼女はまだ動いていないと思っていたので、今のように何からのアクションを起こしてアドバンテージを得る必要がある、と考えていた。

そのため、DクラスをAクラスに上げるといふ事に執着を全く見せず、なかなか動かない綾小路に対し、理事長から聞いた彼の父親の存

在をちらつかせて脅し、無理やり綾小路を動かす事にした。

あの時は、我ながら一体何をしているのだと、私は自分自身に驚いていた。

「まさか、教師が生徒を脅迫するなど。」

前代未聞にも程がある。

私はまさしく教師失格の唾棄すべき人間だろう。

だが、後悔はあれど、仮に何度時を遡る事があろうと、仮に綾小路以外の人間がどのようなクラス配置をされていようと、これまでに誰がどのような行動をしていようと、私は全く同じ事をやるであろうという確信があつた。

私は自クラスにかつてない程逸材が多数集まったこの年に、Aクラスに上がるといふ夢が現実的なものとなったことを理解して、どうしても内心の焦りを抑えられなかったのだ。

あの時は、この脅迫が後にあそこまで悲惨な結果を引き起こす事になるとは全く予想だにしていなかった。

綾小路が彼女と親しくしているという情報は掴んでいたにも関わらず。

脅迫直後の無人島試験で、綾小路はこれ以上ないと思える程の結果を残した。堀北の陰に隠れようとするそのやり方には少々思う所はあるが……まあ、いい。特に、Cクラスとは200ポイント以上の差を縮める事が出来た事だし、結果としては申し分無いのだから。

私は満足し、次の船上試験にも大きな期待をした。

あれもまた、やりようによつてはかなりの差を詰める事が出来る試験なのだから。

だがその船上試験では、完全なる敗北という結果となった。

私がかねてより注意して見ていた生徒、怜山静香が遂に動き、なんと1日目の初回の会議途中で優待者の法則を割り出して見せたのだ。

それにより、AクラスがCPを300得て、Dクラスは何とか±0、他クラスはCPを-150するという凄まじい結果となった。

Dクラスが被害を最小限に抑える事が出来たのは流石綾小路と行ったところだが、怜山はその綾小路すら超える逸材なのかもしれない、と私は思った。

その日の夜。

真嶋、知恵、私で構成される同期3人は、船内のバーの1つに集まっていた。

「何かさー！ 久しぶりよね。この3人がこうして、ゆっくり腰を下ろすなんて」

知恵がウイスキーを手に持ち、ソファーに腰を下ろしながらそう発言する。

「因果な物だ。巡り巡って結局俺たちは教師という道を選んだのだからな」

「よせ。そんな話しても何の意味もない」

真嶋と私がカウンターでそれぞれの酒を口にしながらそんな事を言う。

そう。

私たちは真嶋の言う通り、過去にそれぞれ影響されてこの道を選んだ。まあ、私と知恵のそれと、真嶋のそれは少し違った物ではあるのだろうか。

そうして、真嶋と知恵の異性遍歴を語ったりした後、知恵が本題に入る。

「それより、真嶋くん。あの子一体なに？ あんな子が居るなんて、反則じゃない」

知恵がウイスキーのロックを豪快に飲みながら真嶋に絡む。

そう。それは恐らく私たち教師だけで無く、むしろ生徒たちの方がより強く思っているであろう事。

船上試験において、あの生徒がやった事はあまりにも異常なのだから。

「……反則、という事は無いだろう。確かに、怜山は今まで俺が見てきた誰よりも優れた才能を持つてはいるが」

「いやいや、あそこまで来るともう反則だつて！ まさか開始10分で優待者の法則を見抜いて試験を終わらせるって……ねえ」

内心、自分でもそう思っているであろう真嶋の誤魔化すような発言に反論する知恵が、私の方を向いて同意を求めするように言ってくる。

「反則とまでは言わないが、そうだな。怜山が成したのはこの学校の歴史上初の圧倒的な結果だ。私もあれ程の生徒は見た事が無い」

そう。

それは、あの綾小路ですら対抗するのは不可能なのでは無いか、と思わされる程の結果。

「はあ……今年是我的クラスの一之瀬さんを中心に凄くクラスになると思つたのになー。流石にあの子に勝つのは無理よねえ」

知恵が大きな溜息を吐きながら、

「あそこまで来ると、もう能力差が有り過ぎてクラスが団結してどうにかなるってレベルじゃないだろうし……どうしてよりによって今年にあんな子が、しかもAクラスに来ちやうかなー」

そんな事を言う。

全くその通りだ。

どうしてよりによって、今年にあんな生徒が……と思わざるを得ない。怜山本人に罪があるという訳ではないのだが。

しかも、配属されたのが他クラスならばまだやりようも有つたのだろうか……最悪な事に、アベレージが最も優れたクラスであるAクラ

ス。これでは文句を言いたくなるのも仕方ないだろう。

「……油断する訳ではないが、最早今年のクラス間闘争で俺のクラスが敗北する事は無いと言ってもいいのだろうか」

真嶋がそんな事を呟く。

確かに、一見するとそうだろう。怜山がここまで圧倒的な結果を出し、更には所属するのが付け入る隙があまり無いであろうAクラス。ほとんどの人間はクラス間闘争の結果をAクラスの勝利と見るのは自然な事と言える。

だが、私はまだ諦めては居なかった。

何故なら、綾小路はこんな絶望的な状況においても一定の結果を出しているのだし、他にも高円寺や堀北といった秘めたる獅子がDクラスには居るのだから。

だからまだ、低いかもしれないが可能性は残されている。

すつかり勝負を諦めた様子の知恵とは違い、私はそんな事を考えていた。

だが、事態は私が思っているようには行かなかった。

船上試験の後も、私は綾小路を動かして特別試験を自クラスが勝利するように運ぼうとした。だが、結局は綾小路の父親が実際に学校に乗り込んできたことにより、綾小路に私の嘘がバレた。私は綾小路の父とやり取りなどしていないのだと。

そして最終的には逆に綾小路に抑え込まれてしまい、綾小路を動かすことは出来なくなった。

それでもまだ、可能性は僅かかもしれないが残されている、と私は思っていたのだ。

仮に私の手を離れたとしても綾小路さえいれば、まだ何とかなる筈だ。

私の失敗により内心で抱いてしまった言いようのない不安と焦りを隠し切れないうままに。

だが、気付けばクラス間闘争は終わりを迎えていた。

他ならぬ、最大の期待を寄せていた綾小路がAクラスに移籍する事によって。

綾小路から2000万PPを渡された時、私は驚愕を隠せなかった。

今まで、この学校の歴史上において個人でこれを成す生徒は居なかった。それにも関わらず、たったの1年で綾小路はそれを成した。

綾小路が莫大なPPを保有している事には気付いていた。

だが、2000万には到底届かない額であった筈。

私はそこまで考えてから、綾小路の移籍先のAクラスの生徒であり、彼と一番仲のいい人物であり、これまた莫大なPPを保有していた生徒である怜山の事に思考が思い至った。

……これはもう間違いないだろう。怜山が綾小路に不足分のPPを渡している。

綾小路は、自クラスを裏切っていたのだ。

そう考えると、今まで起こった数々の不可解な事態にも説明が付く。

特に顕著なのは、つい先日行われた退学投票の結果だろう。

綾小路がAクラスに与していたとしたら、彼がプロテクトポイントを得たのは必然でしかないのだから。

奴は恐らく坂柳と茶番を演じる事で山内を嵌め、望む結果を生み出

したので。他クラスと組んでいるのだとしたら、あの退学投票そのものが彼らにとってまさしく茶番に過ぎないものだったのだろう。

……だが、そうだとすると一体いつから綾小路と怜山は手を組んでいたのだろうか。

私はいつ間違えてしまったのだろうか。

綾小路の移籍によって私のクラスの勝ち目が完全に失われてしまった事を理解しながら、私は失意の中、そんな事を考えざるを得なかった。

それから2年間、私のクラスの堀北は非常に奮闘したと言えるだろう。側から見て明らかに勝ち目など完全に失われてしまっているにも関わらず、退学者を複数出しながらも自分に出来得る最大限の努力を尽くしていた。

兄と同じように生徒会長を務め、激動の毎日を過ごしていた。

だが……そんな堀北には申し訳ないが、勝ち目が完全に無くなってしまった以上、私は自身が失意の内にある事を隠し切る事が出来なかった。

私の野望は潰えた。

私の夢は、永久に叶わないのだと理解してしまった。

それでも私には、顛末を見届ける義務があると考えた。

これは、私が始めた物語なのだから。

私は失意の最中でも、彼らを見守る事だけは止めなかった。

私は一体何がしたかったのだろうか。
何を、すべきだったのだろうか。

全てが終わってしまった以上、最早何の意味も無い事を考えながら。

そうして迎えた卒業式。

結果は分かりきっていた。

Aクラスは結局、在学中1度もその座を譲る兆候すら見せずに歴代最高のC Pを保有しながらの卒業。

私のクラスは、堀北の奮闘によりBクラスとして卒業。

側から見たら、大金屋と言えるだろう。Dクラスがここまで上がる事は稀なのだから。

だが……いや、もういいんだ。

そうして自クラスの生徒の卒業を見届けた後、私はとある1人の人物を探していた。

1年時3月末の時点で、クラス間闘争を完全終了させ、その後には大々的な動きを完全に止めてしまった1人の生徒を。

私はその生徒……怜山静香の姿を確認し、近づいた。

私は、どうしても怜山に聞きたい事があった。

「……怜山。最後に1つ、聞かせて貰ってもいいか」

「はい」

私の唐突な質問に対して、怜山は来るとわかっていたかのように瞬時に返答する。

もう、それを見て驚く私ではない。

「感謝する。……お前は一体、いつからこの構図が見えていた？ いつまでならば……まだ取り返しがついた？」

「……2つになっていますが、いいでしょう。この構図を描いたのは入学式の日、堀北先輩から学校のルールを聞き出した時です」

「……そうか……そこまで早くお前は……」

入学式の日。

当時まだ月城が来ていなかった頃、2、3年生には新入生に5月になるまでは学校の制度を伝えてはならず、破ったらペナルティを課するというルールがあった。

とはいえ、全ての生徒を監視し続けるなど不可能である以上、実際に伝えた所で教師の目の前で無ければ罰せられる事はない実質的には形骸化したルールではあった。それを含め、実力を測るために定められたものだった。

堀北は当然それを理解していたために怜山にこの学校の制度について教えたのだろうか……

1日目からこの構図を見ていた……か。

怜山の能力を理解していなかった頃の私ならば決して信じられない事だっただろう。いくら怜山の能力が歴代最高クラスだという情報で最初からあったとはいえ、あまりにも常軌を逸している事実なのだから。

だが、そうだとしたら私は一体……

そんな事を考える私に対して、怜山が続ける。
私にとって、直視し難い事実を突きつける。

「取り返しが付かなくなったのは……1年夏休み前に先生が綾小路君を脅迫した時です」

「何……だと……？」

私は今度こそ驚愕の声を隠す事が出来なかった。

まさか。

今まで起きた事全ては私のせいだったと……

「終わった事を無意味に蒸し返すつもりはありません。悪気が無かった事、焦ってしまった事は理解しています。それに、先生だけが原因な訳でもありません」

「ですが、決定的な引鉄を引いてしまったのは……あなたです」

話を終え、私は理事長の元へと向かった。

綾小路がAクラスへと移籍し、私が自らの失敗を悟り次第作成したが、それでもまだ、自らの生徒への責任感から彼らが卒業するまでは
と思ひ、今に至るまで使う事の無かった

辞表

をその手に握り締めながら。

番外編1 2週目堀北鈴音の奮闘記1

1人の女子生徒が感極まった様子で私に声をかけてくる。

「堀北会長、今までありがとうございますございました！」
「もう……今はあなたが生徒会長でしょう？ けれど、嬉しいわ。こちらこそありがとう」

最も気にかけて接した後輩である彼女にそんな声をかけ、私は3年もの間過ごしたこの場所を去ることにした。

東京都高度育成高等学校。

この学校で私は言葉にし切れない程沢山の経験をした。

本当に、色々な事があった。

入学時、Dクラスに配置された事が受け入れられず、惨めな行動をしていた未熟な私。

そんな私を認めず、面と向かって理由を話さずにただ突き放すだけだった兄さん。そして、そんな兄さんを盲信し、ひたすら後ろを追うだけだった私。

今の私なら、兄さんもまた完璧な人間などではなく、高校生らしく未熟な面も多々あったのだと理解出来る。

無論、あの時の私が見るに堪えない醜態を晒していた事実は言うまでも無い事だが、少なくとも兄さんの後を追うだけだった私は既に居なくなつたという事実もまた、ここにある。

その他にも、語り切れない程色々な事があった。

後悔は当然沢山ある。

綾小路君の抱える事情に気付かず、私が彼に寄り添わなかったせいでクラスから離れてしまったこと。

退学者を……櫛田さんを含め、複数出してしまったこと。

そして何より、私が自らのクラスをAクラスに導く事が出来なかったこと。

だが、いいのだ。

これが私の、いや私たちの行動の結末なのだから。

全員が全員、初めから全力を尽くした訳ではなかった。

私は今でも理想の自分に成れたとは言い難いが、そんな今の私よりも、1年生の頃の私は遥かに未熟だった。

私も、クラスメイトも、もっとやれる事は沢山あった筈だった。

だがそれもまた、私たち自身だ。

最初から最適解を取り続ける事の出来る人間など、私が知る限りあの人物くらいしかないのだから。

私はこの学校の歴史上初の、生徒会長を務めたにも関わらずAクラスとして卒業する事が出来なかった人間だ。

いや、出来なかった、というのは少し語弊がある。

私1人ならば、2000万ポイントを使つてAクラスに移籍するという選択肢があつたのだ。

それでも、私はその道を選ばなかった。

2000万を貯める事に成功したあの段階だと、既にそれが不可能と理解していながらも、私だけではなくクラスそのものをAクラスに引き上げなければ意味がないと考えたから。

つまり何が言いたいのかというと、私はこの結果を自分で選んだのであり、後悔こそあれど納得はしているという事だ。

だが、後輩と別れて校門に差し掛かった時。

私はふと、過去の様々な場面を思い返し、あの時ああしていればどうなつて居ただろうか、と考えた。

先程言ったように、後悔はあるものの、私たち全員の成した結果に納得はしている。

過去を変えたい訳ではない。

ただ、知りたいという願望だけはあるのだ。
特に。

かつて私の隣の席であり、クラスを裏切り移籍した人物である綾小路君。

過去を知る私を憎み、最終的に秘密を全て暴露されて退学していった櫛田さん。

彼らに対して何か出来る事が、事態を円満に収める手段があったのだろうか。

そして、かつての私の理想像の体現者である、怜山静香さん。

私は結局最後まで彼女に勝つ事は出来なかった。

悔しいという気持ちは当然ある。彼女曰く、自らをどうにか出来る可能性があるとしたら私だけだったらしいから。

どうすれば、本人の言うように私が彼女に対抗する事が出来たのだろうか。

いや、そもそも私は本当に彼女と戦いたかったのだろうか？

今になって考えると彼女は、私にだけは他の人とは違った対応をしていたように思える。

ならば戦うだけでなく、私たちはもつと違った関係性を構築する事も出来たのではないだろうか？

ともすれば、彼女と私は親友にすら成れたのではないのだろうか？

そんな、今更何の意味も無い事を考えながら校門を潜る。

突然、私の視界が真っ暗になった。

一体何がっ……!?

一瞬の事。考える時間すらない。

そのため状況に全く対応出来ず、自分の身体に何が起きているのか一切わからないまま、私の意識は暗転した。

気付いたら、私は何故か自分がバスに乗り、席に座っている事を認識した。

一体いつの間に私はバスに乗ったのだろうか……？

誰かが意識を失った私を運んだのだろうか。

ならば、何故病院や救急車の中ではなくバス？
せめて校内の保健室などであればまだわかるのだが。

何もわからないまま私が状況確認のために周囲を見渡してみると、信じられない光景がそこにはあった。

まず、私のすぐ近くの席に綾小路君と怜山さんが座っている。彼らの姿は明らかに今より幼いように見える。まるで、3年前の入学式の時のような……

だがそこまでならばまだ、途轍もなく不可解というだけで、100歩譲って自らを無理矢理納得させる事は出来る。

この2人が私を運んできた。

2人が1年生の頃の姿に見えるのは気の所為に過ぎない、と。

私にとって信じ難い事は、バス内に櫛田さんの姿があつた事だ。

彼女は2年生時に退学した筈なのに、何故か私と同じ制服を着てバス内に立っていたのだ。

一体どういう事なのだろうか。

何故、彼女はここに居る？

何故、制服を着ている？

何故、彼女は憎む相手である私や綾小路君に関わってこない……いや、そもそも認識すらしていない？

訳の分からない状況の中、私は何が出来る訳でもなくひたすら呆けたようにしているだけだったが、直ぐに状況は動いた。

「席を譲ってあげようとは思わないの？」

OLらしき女性が、優先席に座る高円寺君に声を掛けた。

老婆に席を譲れと主張する女性と、反論する高円寺君の……3年前に行われたのと全く同じやり取りが私の目の前で繰り広げられた。

ふと外の光景を眺めてみると、このバスは学校から離れていくのではなく、逆に学校の方へと向かって行っている。

……この状況を説明するのに最も相応しいであろう言葉。

走馬灯

という現象だろうか。

私は自らの身体に何らかの異常が発生したために、過去の記憶を思い返しているのだろうか。

だとしたら、実に皮肉な事だ。

まさか、死に瀕して最初に思い出すのが入学日の最初の光景だとは。

この日の事が、私の記憶に最も根強く残っているとは。

私は思わず自嘲したような笑みを浮かべてしまった。

状況を理解し、私は自らの身体について考え始めた。

何故、私は走馬灯を見ているのだろうか。

突発的な病気という所だろうか。

校門を潜る以前にそんな兆候は一切無かった。

急病とはそういう物なのかもしれないが、それにしても違和感がある。

私は今、記憶の中の出来事にしてはやたら現実味を覚えながら眼前のやり取りを眺めているのだ。

そして、長い。

走馬灯とは、ここまで長時間見る物だったのだろうか。

それだけではない。

今の私には、明確に肉体の感覚が存在しているのだ。

空気の感覚、耳が震える感覚、バスに揺られる感覚。腕を思いつきり抓ってみた所、普通に痛みを感じた。

じんじん痛む腕の感覚を感じながら、私はこれが走馬灯なのか疑わしく思えてきた。

だとしたら……いや、それこそ荒唐無稽な話だ。

あり得ない。

真っ先に選択肢から外すべき妄言に過ぎない。

馬鹿げた話だ。くだらない妄想だ。

だが、私の頭からどうしても

時間遡行

という言葉が離れなかった。

結局、私が必死に思考する間に席を巡った争いは終わり、バスが目的の地へと到着した。

私は一体何をどうすべきなのだろうか。

ひたすらに過去の追体験をすればいいのだろうか。

そんな事を考えていると、ふと怜山さんと綾小路君がほぼ同じタイミングでバスを降りている姿が目に入った。

特に何か意図があった訳では無い。

ただ、何となく。

私は、2人の……私が知る限り最も優秀な人間であり、今ならば認めるが、あの兄さんすらも超えた天才であるこの人たちの少し後ろを歩く事にした。

これは、3年前のあの時にはしなかった行動だ。

確か私は彼らよりも先にバスを降り、1人早々に教室に向かったと記憶しているのだから。

2人の会話が聞こえて来る。

「私は怜山静香。あなたは？」

「オレは綾小路清隆だ。よろしく」

どうやら自己紹介をしているようだ。

……これは、やはり私の記憶には無い出来事だ。

とすれば、やはり時間遡行こそが……いや、あまりにも荒唐無稽。私が勝手に想像で補っているという線がまだ残っている。

私は、最早自分の本心を誤魔化すような思考をしていた。すると、

「……それで、あなたは？」

怜山さんが唐突に振り向いて、私に向かって話しかけて来た。

私は内心では、自らの心臓が止まってしまうのではないか、と思うほど驚いてしまった。

だが、3年間で鍛え上げられた私の能力がそれをどうにか誤魔化して問いに対応した。

そう。怜山さんはこういう事をしてくる人間なのだ。それはもう、十分に理解している事なのだから。

「……堀北鈴音よ。2人とも、よろしくお願いするわ」

それを聞いた怜山さんは、いつもの無表情で話を続けた。

そう。それは一見すると何の変化もない無表情。

だが、私は3年間で他人の表情を読む能力も向上した。そんな今の私ならばわかる。

怜山さんは、何やら楽しげな顔をしている、と。

「よろしく。……あなたたち、面白い」

「え？　ど、どういうことだ？」

綾小路君が困惑した様子を浮かべて答える。

彼には怜山さんの表情が理解出来ていないのだろうか。

いや、これもまた綾小路君が初期に行っていた、実力を隠すための演技なのだろうか。

私も綾小路君も、一見するとこの短い会話の中で何の面白い事も言っていない。

だが、怜山さんはそんな表面に過ぎない物を見る人間ではないのだから。

そんな彼女は次に、

「普通、私と話す人はもっと動揺する。男子であれば尚更。あなたたちはそれが薄い」

なんて事を言ってきた。

それは彼女の事をよく知っている私としては全面的に同意する意見だ。怜山静香という天才を前に、平常心で接する事の出来る人間などほとんど居ないと断言出来るのだから。

3年間で鍛え上げられた私の表情筋が仇になる事もあるのか。

「堀北はともかく、オレは十分緊張しているつもりなんだけどな」

私がただ思考に耽るだけで何も言わない中、綾小路君がそんな事を言うと、彼女はその下らない誤魔化しの言葉を一切相手にせず、

「それに。あなたたち、私の事を分析しようとしている。この、私の事を」

そう、言われて私は過去に散々思い知らされた彼女の天才性を再認識した。

やはり、バレている。

怜山さんの言う通り、私は彼女の事を分析していた。

綾小路君も同じだろう。

彼女が初日の時点で一体どのような発言をするのか、その天才性はどこまで発揮されるのか。気にならない筈が無いのだから。

だが、そんな私の思考は彼女には簡単に見透かせる事らしい。

やはり、彼女の能力は常軌を逸していると断言出来る。

だが、

「分析？ いや、そんな大層なことはしていないぞ。怜山はどんなやつなのかな、と何となく考えてただけだ。それくらい、誰でもするだろう？」

綾小路君は、無駄とわかっていて誤魔化すことを選んだらしい。はつきり言って、お粗末もいい所だった。

そういえば、この頃の綾小路君は、2年次からの彼と比較して大分一般的な反応、言い換えると付け入る隙がかなりある振る舞いをしていたな、と思い返される。

すると彼女は、

「そう」

とだけ無表情で答え、私たちは無言で歩き始めた。

それは気まずい緊張ではあった。

けれど、綾小路君の誤魔化しをわかっているのに、私が先程からひたすら分析するだけで何も発言していないのに、それぞれ追及して来ない怜山さんに、彼女は最初からこういう人間だったのだなと認識出来た。

私たちは歩きを終え、クラス分けの掲示板を見る。

やはり私と綾小路君はDクラスで、怜山さんはAクラスのようだ。

つまり、私たちと怜山さんはここで別れることになる。

何か言うならばここだ。このタイミングだ。

歩きながらそう考えていた私は、怜山さんに声をかける。

時間遡行？ 走馬灯？ 怜山さんを前にした以上、そんな事はもう

どちらでもいいのだ。

「どうやら私たちはクラスが違うようね。……けれど、私はもっとあなたの事が知りたい。入学式の日に携帯端末が渡されると資料にあつたから、後で連絡先を交換しましょう？」

私はボールを投げた。

怜山さんは、以前の記憶によると私には一定の興味を持っていたと思う。今も、どうやらそれは同じようだ。だから、勝算はあった。

もう細かい事はどうでもいい。

何よりも、私は彼女の事が知りたい。

それが、今の私の偽らざる本心だった。

「……本当に、面白い。是非そうしましょう。綾小路君も、一緒にね」

「私たちは、もうお友達なのだから」

そうして、怜山さんと別れて私は綾小路君と一緒にクラスへと向かう。

「堀北、少しいいか？」

「何かしら？」

今の私ならば、綾小路君が問いかけてくるだろうとはわかっていた。

その、内容も。

「どうやら怜山も堀北も、オレの実力に気づいているな？ まあ、それはいい。2人の洞察力がオレの隠蔽能力よりも高い、というだけだからな。だが、出来れば他の人間には言わないで欲しい」

そう。

この頃の彼は、何故か自らの力を隠したがっていた。

私には理解に苦しむ行動だ。

だが、人の考えは千差万別。

ここで綾小路君と敵対する理由もない。

いやむしろ、怜山さんと同じく綾小路君とも積極的にコミュニケーションを取るためのいい機会とも言える。

そうすれば、彼がどうしてクラスを裏切ったのか、一連の非道な行動を取ったのか、が理解出来る、あるいは止める事すら出来得ると思っただから。

「そう。わかったわ。ただし、条件がある」

「何だ？」

「私と2人、あるいは怜山さんと3人で居る時には、さつきやっていたような見え透いた誤魔化しを止める事。私たちとは可能な限り本心で接してちょうだい。どうやら私たちはもう友人みたいだから」

「友人……わかった」

ここから、私と綾小路君、そして怜山さんの関係は記憶とは違ったものになるだろう。

それがどのような結果を招くのかは私にはわからない。

私には、怜山さんのような未来予知を思わせるような予測能力は無いのだから。

正直言っただけ、やってしまった、と思った。

これでもう、私がこれから記憶の通りに高校生活を歩む道が無くなってしまったのだから。

だが、私の気持ちはむしろ清々しい物となっていた。

私はこれから過去と違って早々にクラスを掌握し、記憶にある高校生活とは違った毎日を送る事になるだろう。

それに従って、私は自らの性格上、かつて取りこぼしてしまった数多くの人間を救う事になるだろう。今の私ならば、その方法は簡単に思いつくのだから。

これで良かったのだ。

未来を知る私が動くのは傲慢？

救われなくとも人は生きていける？

そもそも、救うという事自体が私の定義に過ぎない？

そんなの知った事か。

私は私が望む行動をする。

何故かって？

私がそれをしたいからだ。

校門で考えたように、それをしたらどうなるのかをこの目で見てみたいからだ。

既に賽は投げられた。

もう、誰にも止められはしない。

私は私が望むように他者と関わり、皆を導き、私が正しいと思う結果を出して見せる。

これはそんな、堀北鈴音という1人の人間の逆行物語。

番外編1 2週目堀北鈴音の奮闘記2

茶柱先生がこの学校のシステムについて説明する。

説明内容は過去に記憶している通りだった。

一部の、しかし最も重要とも言える情報を隠した説明。

行動方針を固めた今冷静になって考えると、もしかしたら、私の記憶とこれからの出来事には差異があるのかもしれない。

例えば、この学校のシステムは今茶柱先生が説明した事が全てであり、毎月10万ポイントが普通に支給されたり、クラス間闘争など起きなかったりなどといった事態が発生するのもかもしれない。

これは極端な例ではある。実際、茶柱先生の説明には今の私からすれば記憶抜きにしても違和感が多々感じられるし、監視カメラの存在も確認出来る事から、恐らくこの学校のシステムは私の記憶通りの可能性が高いと思われる。

だから、ここで結局何が言いたいのかというところ……あまり過去の記憶を頼りにし切ってはいけない、という事だ。

記憶に踊らされるのではなく、どの情報を、どんな風に使うのかは私自身が決めなければならぬのだ。

私は茶柱先生が説明している間に、今日自分が為すべき事を考えていた。

そして、先生が説明を終えて教室から出て行く。

まずは、ここだ。

「みんな、少しいいかしら」

私は記憶とは違い、平田君に先んじてクラスメイトに問いかけた。

基本的に、物事は初動こそが重要であり、主導権は常に自分が握り続けるべきだ。誰よりも早く行動し、場を支配する事こそが肝要なのである。

呼びかけによつて全員とは言わないが、大半のクラスメイトが私に注目する。

声を上げるタイミング、声量、声色の作り方。

生徒会長を務めた経験の賜物だ。

一瞬だけ綾小路君の方を見てみると、どうやら彼は私がこんな行動をするなど思いもよらなかつたらしく、呆けたような顔をしていた。まあ、そんなのはどうでもいい事だ。

「私たちは今日から三年間共に過ごすことになる。だから、今から軽く自己紹介を行い、親交を深めるべきだと思うのだけれど、どうかしら？」

私は、記憶で平田君がやった事と全く同じ事をした。

別に、現時点で全員がそれに従う必要は無い。

だが、これで一先ずは私がクラスの主導権を握る事になる。

記憶の中で平田君がそうであったように。

「そうだね、僕もそう言おうと思っていた。賛成するよ」

思った通り、一番最初に平田君が賛成の意を述べる。

すると、次々と賛成の意見が上がり始めた。

やはり、彼は優秀だ。私の意を汲んですぐにこの行動。

彼が記憶の通りの人物だとしたら、平田君にリーダーを任せるのは様々な面から考えて無しと断言していいが、私の補助をしてもらう分にはとても有難い存在である。

記憶と同じように、現状彼には私の補佐をお願いするつもりだ。

とはいえせつかく最初に発言をした以上、誰よりも先んじて私の自己紹介をしなければ。

「なら、まずは私から。私の名前は堀北鈴音。趣味は読書。罪と罰、誰がために鐘は鳴るといった書籍を好むわ。本に関してなら色々話す事が出来ると思うから、気軽に話しかけてちょうだい」

気軽に話しかけてちょうだい、ね……

かつての私が今こんなことを言う私を見たらどんな感想を抱くのだろうか。

無論、私が他者と話す事を好むようになった訳では無い。

だが、コミュニケーションの重要性は痛い程理解しているつもりだ。人を、クラスを率いるのならば尚更。

クラス間闘争があるにせよ無いにせよ、私はクラスのリーダーとなるつもりだ。

勿論、記憶とは違って私以上にリーダーに向いた人物がいるのかもしれない。だが、仮にそうだとしても関係ない。

生徒会長を務めた兄さんの真似というだけではない。

私が、リーダーという仕事をしたい。

今ならば素直にそう思える。

そうして、私に続き平田君が自己紹介をし、続いて他のクラスメイトが順に自己紹介していく。

その中には、記憶の私が救うことのできなかつた様々な人物が居た。

特に、彼女の表情は……

……今、それを考えるべきではない。優先順位を見誤っては全てを失うのみだ。

それはそうと、自己紹介は須藤君の順になる。

「俺らはガキかよ。自己紹介なんて必要ねえよ、やりたい奴だけでやれ」

彼は記憶と全く同じ発言をする。

「別に構わない。個人にはそれぞれのペースがあるのだから。こういう事が苦手という人も居るでしょうし、強制するつもりはないわ」

「……チツ！」

須藤君は大きく舌打ちをして教室から出て行った。
私は続ける。

「みんなも、今の彼のように自己紹介したくないならしなくて構わないし、そういう人を責めるのは出来ればやめてくれると嬉しいわ」
「そっか……そうだね」

平田君が何やらとても嬉しそうな顔をしながら私の言葉に頷く。
そして、記憶と違い……教室から出る人間は極少数だった。

その理由は簡単に想像出来る。
生徒会長の経験を活かした場の掌握能力に加え、記憶と違って私と平田君の2人が主体となり、男女それぞれの支援を受ける事に成功しているから。

もっと具体的に言おう。

意義や是非はともかく現実的な話として、私の容姿はこのクラスで最も優れている。

そんな私に気に入られたいと考える男子。

全く同じ事を平田君に思う女子。

そして、出て行く人間が少ない事を理解して、周りに巻かれる人間。

私は未だに自分自身では容姿というものに大した価値を感じては居ないし、私からの人物評価基準に影響を与える事はない。

だが、使える武器は何でも使うべきだと今の私ならば理解しているから。そのためこういった場面で有効に働くのならば、それを使う事に躊躇は無いのだ。

自己紹介は続き、先程私のことを呆けたように見ていた綾小路君の番になる。

「えー……えつと、綾小路清隆です。その、えー……得意なことはありませんが、皆と仲良くなれるよう頑張りますので、えー、よろしくお願ひします」

彼の実に無様な自己紹介によって微妙な雰囲気の流れる。

……こうして改めて彼を見ると、2年次以降の綾小路君と今の彼は完全に別人にしか見えない。

少なくとも、私と2年間戦った彼はここまで惨めで哀れ極まる姿を晒すような人間では無かった。

一体何があったのかはわからない。

詳細は伏せられたが、彼には複雑な過去があるという話は聞いているから、それが原因なのだろうか。

何にせよ、

「皆と仲良くなりたいと思うのは立派なことよ。私も協力するから少しずつ行動していきましよう」

綾小路君の自己紹介のせいで微妙な空気となる中、私は彼に他のクラスメイトの自己紹介と同様に一言コメントをした。

綾小路君は何やら感動したような様子を見せていた。

……何というべきか、今の彼は少し簡単過ぎないだろうか？ 俗な言い方をするならば、あまりにもチョロ過ぎると言える。まあ、私にとつて都合の良い事ではあるのだが……

これでは2年もの間、彼への対処に苦心していた私があまりにも馬鹿馬鹿しくなってくると言うか……いえ、別にいいのだけれど。

その後、入学式があった。

少し探してみるとそこには生徒会の姿、つまりは兄さんの姿があった。

……思う所は当然ある。抑えきれずに溢れ出る想いも。記憶の中で生徒会長としての経験を経た今、話したい事はかつて以上に沢山ある。

だが、今それはいい。

他のメンバーも記憶と変わらない。

南雲先輩はこれからどうするのだろうか？

記憶では、彼は……いや、これも今考える事ではない。

今の私には他にやるべき事があるのだ。優先順位を間違えるな。

入学式を終え、茶柱先生から再度軽い注意事項等についての説明を受ける。私はそこで、またしても記憶とは違う、とある行動を取る事にした。

「先生、質問があります」

「ふむ……いいだろう。何だ？」

茶柱先生が意外な物を見たといった感じの雰囲気を感じながら私に次を促す。

「ポイントで買えないものはないと言っていました。例えばテストの点を購入する事は可能でしょうか」

私の発言に教室が騒めく。

まあ、それは当然だろう。

だが、今はこの質問に対する答えだ。

茶柱先生は、何やら少し面白そうな物を見つけたかのような表情で答える。

「ふっ……そうだな。まさか点数を売ってくれと言いだすとは……」

彼女はそう言って少しだけ考える様子を見せた後。

「可能だ。とはいえ今まで点数を売ったことは1度も無いから……1点につき10万ポイントといった所だろう。これでいいか？」
「わかりました。ありがとうございます」

意外な事に、思っていた程には余計な口を挟まず素直に茶柱先生は答えてくれた。

記憶では、この頃の茶柱先生は、意図はともかくとして無闇矢鱈と生徒の実力を試そうとしていた。

それは、2年次のとある試験の際に伝えられた彼女の過去が原因な訳だが……正直な話、記憶の中の茶柱先生は私情で行動し過ぎだったと思う。

だが……いや、今それはいい。

……この文言を使うのはこれで何度目だろうか。けれど初動の重

要性を、何を優先すべきなのかを今の私は重々理解しているのだから。

先生が教室を去る。

そうすると当然、

「な、なあ堀北ちゃん。さっきのあれってどういう事だよ?」

池君がクラスを代表する様な形で私に問いかけてきた。

そのやけに馴れ馴れしい呼び方に少し思う所はあるが、まあいい。これもまた、私の行動の結果という事なのだろう。

……本音を言うならば今すぐその巫山戯た呼び方を改めさせたい。羞恥と屈辱を強く感じる。あろう事か、この私をちゃん付けして呼ぶなど……

それでも、ここは我慢しなければ。

「……テストの点が買えるということは、ポイントを使えばある程度の無理は利くということを意味していると言っていていいでしょう」

呼び方は兎も角。

勿論、私が知りたかった事の本質はテストの点を買えるかどうかなどではない。これは、ポイントの使い道が記憶のそれと同じかどうかの試金石となる情報。

質問の意図は他にも多々あるが、何にせよ今は会話を続けるべきだ。

「つまり……あまりポイントを使い過ぎずに一定額は温存すべきだと思いますわ」

「どれくらい残したらいいんだ?」

池君は私が予想していた通りの質問をしてくる。

「それは、自分で考える事ね。全てを私に従っても仕方ないでしょう」
「そ、そんなこと言われたって……」

彼は完全に思考を停止させて困惑したような発言をしてくる。

……ここで、少しでも自分で考える素振りでも見せてくれたならば話は別だったが……仕方ない。

「はあ……仕方ないわね。参考程度に、だけれど、私はとりあえず4月の間は生活必需品を揃えるに留める予定よ。娯楽の為の本は図書館で借りるつもり。次のポイント配布までの1ヶ月があればある程度見える物はあるでしょうから」

「そんな……じゃあ、1ヶ月は何も買わずに我慢しろってことかよ？」

ふと他のクラスメイトの姿を眺めてみると、大抵の人間が池君と似たような感想を抱いているようだった。

本当に、この頃の彼らは……

正直言つて、学校側から不良品と評価を下されるのは至極妥当と見做さざるを得ないだろう。

かつての私と同じ様に。

けれど、人は成長出来る生き物なのだから。

「参考程度に、と言ったはずよ。私の考えが正しいかどうかはわからない。どうするかを強制するつもりもない。好きにきなさい」

そう言つて私は帰宅準備に取り掛かる。

勿論、私のこの軽い注意喚起だけで全員がポイントを節約するなんて絵空事を私は思い願ってなどはない。もし最初からそこまで聞き分けの良い人間たちだったならば、彼らがDクラスに配属される事も無かつただろうから。

だが、今はこれで良いのだ。

帰宅準備を終えて、私は隣の席の彼に声を掛ける。

「綾小路君、行きましょう」

「行くって、どこにだ？」

白々しい真似を。

まあ、ここにはクラスメイトが居る以上は彼と交わした約束と違えてはいない。思う所は当然多々あるが。

「怜山さんとの朝の約束よ」

「ああ、そうか。今から連絡先を交換しに行くのか？」

そうでなければこんな風に話を展開させはしないだろう。

本当に、この男は……

私がつまらない演技を続ける綾小路君に内心で毒づいていると、

「ねえねえ、堀北さんって綾小路君と仲良いの？」

クラスメイトの1人である松下さんが私たちに話しかけて来た。

彼女の性格を考えたら、私がこのような行動を取った場合は近いうちに来ると思っていた。

松下さんはこのクラスどころか学年でも上位1割に入るくらいには優秀な人物だったから、クラス間闘争を戦って行くためには是非と

も力を借りたい人材だ。

記憶においても、私は後期においては彼女の力を良く借りていた。それは平田君や須藤君、幸村君に次ぐレベルで。

肝心の彼女を取り込む方法についてだが、記憶の中で松下さんはクラス間闘争に向かうのではなく、個人として優秀な人間に取り入ろうとしていた。

初期のDクラスがあまりにも悲惨だったために、クラス単位でのAクラスへの向上を諦めた結果の行動だと言っていた。

だが、彼女は……

いや、もう何度繰り返すかわからないが、今それはいいのだ。

それにしても、私と綾小路君が仲が良いのか、ね……

私は一瞬目を瞑ってから松下さんに返事をする。

「……そうね。私たちは友人だから」

友人。

もし、私が記憶の中に於いて綾小路君とその関係を築いていたならば……

などと考えながらふと横を見ると、綾小路君がやけに嬉しそうにしながら、

「そ、そうだな。オレたちは友人なんだ。仲が良いのは当然だろう？」

なんて、少し吃りながらも発言していた。

もう、言いたい事があまりにも多すぎる。

「そうなんだ。堀北さんって結構友達作るタイプなんだね。……なら、2人とも。私とも友達にならない？」

「え、いいのか？」

「わかったわ」

私と綾小路君の声が重なる。

思わずため息をつき、そして彼をジト目で睨み付けながら私は端末を出す。

「綾小路君も、早く端末を出して。友達を作りたいのでしょうか？」

「え、あ、ああ。わかった。松下、よろしく」

そんな私たちのやり取りを見て、松下さんは楽しそうに笑いながら自身の端末を出して連絡先を交換した。

そうして松下さんと軽く雑談をした後に教室を出て、綾小路君と共に移動してAクラスの手前に差し掛かった所。

「綾小路君、少し待っていてくれるかしら」

Aクラスはどうかやら会議をしているようだった。

私と違い、彼らには記憶など無いであろうにこの行動。

やはり、Aクラスは強敵だと私は再認識した。

……もしかしたら……いや、気にしても仕方ない事だ。

「どうだった？」

「何やら会議中みたいね。教室の中までは見なかったけれど……どうやら怜山さんと話すのは明日にした方が良さそうね」

「そうか。……残念だが、仕方ないか」

そうして、私たちはAクラスの前から去った。

この時私は、何か大切な事を見逃しているような気がしてならなかった。

だが、言い訳にはなってしまうが、今日はあまりにも多くの事があり過ぎたのだ。

卒業、時間遡行、行動方針の決定、記憶と違った行動を何度も取る……

肉体的疲労はあまりない。

だが、私は精神面において既になりにかなり疲労していた。

いくら時間遡行したといっても、別に私自身が完璧な人間になったとかいう訳ではないのだ。限界は当然存在している。

そして、今の私はそれを明確に認識している。

だから、今日はこれ以上特に行動したりはせず、コンビニで物資を確保してから一旦寮で休息し、今後の策を練ろうと考えた。

しかし、そんな私の思惑と反して、今日の出来事はまだ終わらなかった。

「あなたのお兄さんに会って来た」

それを聞いた時の私は。

手強さを感じ今後の苦難を予測すると同時に。

理由はわからないが明確に。

歡喜、
していた。

番外編1 2週目堀北鈴音の奮闘記3

入学2日目。

そこには、まだ入学2日目であり授業開始1日目にも関わらず、授業を真面目に受けない生徒の姿が多々見られた。

記憶通りの光景であり、1日目に彼らの事を実際に見たことよつてこうなる事が确实だと思われた光景である。

私は特にここで彼らを注意したりはしなかった。

理由はいくつかあるが、まずは1つ。

指摘するにもタイミングというものがある。

今ここで私が彼らの授業態度を注意しても意味はないだろう。

特にこのクラスにおいては、その忠告を一切聞かないと思われる具体的な人物が簡単に思い浮かぶ。

その人物とは勿論、須藤君である。

彼が私の話を聞かずに授業態度を改めない場合、それは他クラスメイトにも波及する。

須藤君が授業を真面目に受けないなら自分も真面目になどやつてられない、あるいは自分は真面目に授業を受けているのに何故須藤君は、のような考えを抱くのは至極妥当なのだから。

昨日は初動が大事だと言ったし、実際それは間違いない事なのだ
が、全てがそうだとは限らない。

通り一辺倒ではなく、状況次第で対応は柔軟に変えていくべきなのだ。

特に、彼女が昨日既に大きく動いているという事実を知った以上、

慢心など出来るはずがない。

記憶を活用し、全てに全力を尽くす必要がある……いや、それでもまだ届かない可能性すらあるのだから。

放課後、部活動説明会があった。

そこでは記憶通り、最後に生徒会の、つまりは兄さんからの説明があった。

「——我が校の生徒会には規律を変えるだけの権利と使命が学園側に認められ、期待されている。その事を理解できる者のみ歓迎しよう——」

……入学式の時同様、思う所は勿論多々ある。

だが、今優先すべき事は他の事だ。

私は想いを胸に秘め、決意を再確認した。

すると、一緒に来ていた松下さんが

「ねえ、堀北さん。今の生徒会長って……」

「私の兄さんよ」

かつての私ならば詮索するな等の拒絶する趣旨の言葉を発していただろう。

しかし今の私からすれば、仮に聞かれたとしてもこのように普通に答えれば良いだけの話でしかない。

隠す必要など何もない、何の変哲もないただの事実でしかないのだから。

「あ、やっぱりそうなんだ。なんか似てるなーと思って」
「そうだな、オレもそう思った」

松下さんの言葉に綾小路君も賛同の意を示す。

……似ている？ 私と兄さんが？

中学生までで、そして記憶の中でも私にはそんな事を言われた覚えは無かった。

「……そう。初めて言われたけれど、あなたたち二人が言うならそうなのかもしれないわね」

「何というか、強烈なカリスマ性ってやつ？ やっぱり兄妹なんだなーって思ったよ」

「ああ。オレもそう思う。堀北はやっぱり生徒会に入るのか？」

二人が私にそんな事を言う。

……これが3年間この学校で過ごした経験による成果、という物なのだろうか。

私は、兄さんに……

思う所はやはり多々あるが、今は質問に答えなければ。

「いずれは生徒会に入るかもしれないけれど、今はまだその気は無いわ。まだこの学校のシステムを把握し切れてもいないのだし」

「そうか。昨日言ってたように、とりあえずは5月まで様子見ってことか？」

「まあ、そんなところね」

その後も、私は様々な事を考えながら綾小路君と松下さんと雑談を交わし、体育館を去った。

去り際にこちらを見ていた兄さんと目が合った気がしたが、私はその反応を示す事は無かった。

そして、入学3日目。

「綾小路君、少しいいかしら」

「どうした?」

私は例によって1人ぼっちでいる綾小路君に声をかける。

まだ3日目とはいえ、彼はあれから私と松下さん以外に話す人間を一人も作れていないらしい。

その私たちも別に常時彼と話すなんて訳はなく、朝に軽くやり取りしたくらいだ。

……友達が欲しいのならば少しくらいは自分で動くべきだと思うのだが……まあ、いい。

「放課後、学校の施設を見て回ろうと思っただけだけど」「それで?」

……この男、わざとやっているのだろうか?

「……察しが悪いわね。一緒に行かないか聞いているの」

「え、良いのか?」

……

「……やっぱり面倒だから1人で行こうかしら」

「是非一緒に行こう」

最初からそう言えばいいというのに。
本当に面倒臭い男である。

放課後になり、私は綾小路君と共に教室を出る。

「回る前に寮に戻って荷物を置いてこないか？ 荷物持って歩き回るのも疲れるだろ」

校舎を出た途端、綾小路君がそう提案してきた。

それ自体は特に変わった事のない妥当な提案だ。

とはいえ私が誘っておいてあれだが、彼は随分と探索に乗り気なように思える。

記憶において、綾小路君はそういうタイプでは無かったような気がするのだが……まあ、いい。

「そう。なら、その前にスーパーに寄ってもいいかしら？」

「ああ、オレは問題ない」

……？

一緒に施設を回ろうとは言ったが、スーパーにまで一緒に行く必要は無いのだが。

「別に付き合わなくていいのよ。後で合流すれば良いのだから」
「いいさ。特にやる事があるわけでも無いからな」

まあ、私としては綾小路君がスーパーについて来ようが来まいがどちらでも構わないから別にいいのだけれど。

「へー……結構種類あるんだな」

「……スーパー、来た事無いの?」

何やらやたらと物珍しげにキョロキョロする綾小路君に私は尋ねる。あまり人の目を気にしない方である私とはいえど、見ていて少し恥ずかしさを覚えるくらいである。

「ああ、こういう大きいところはな」

「……………」

前から思ってた居たが、やはり綾小路君は世間ずれをしている。

このくらいのスーパーならば別にどこにでもあるし、1度も来た事が無いというのはあまりにも不自然。

私は彼とまだそれを詮索出来る程の関係を築いてはいないから、今質問したりはしないが……彼と交友を深めるならばいずれ、明らかにする必要があるのでかもしれない。

「あれ、無料配布の食品じゃないか? 無料でも結構色々あるもんだな」

「……………そうね」

綾小路君の過去は兎も角。

これも、施設の確認と同様に私が見ておきたかった物の一つだ。

自炊を問題無く出来る分の食品が無料配布されている事を確認しておきたかった。

そうして、私は必要な分だけ食料を籠に入れていく。

「このくらいかしらね」

「いいのか？ まだ貰えるっばいけど」

「いいのよ、1日で食べられる量で。無料だからといって無駄にはできないわ」

「どうやら綾小路君には自炊に関する知識は無いらしい。」

私が食品を選ぶ中、綾小路君は一切それらに手をつけて居なかった事だし。

それを踏まえてふと考えてみると、私が記憶している限り綾小路君が自炊したという話は聞いた事が無かった。

こうして無料で配布されている以上、健康的にもポイント的にも自炊をした方が遥かに良いだろうに。

「あなたは何も貰わなくて良かったの？」

「ああ。別に貰っても料理しないからな」

「面倒と言つてないで作つてみたら？ 食堂で1人で食べなくて済むわよ」

「あー……考えとく」

言外に、自炊をすれば私や松下さんと一緒に昼食を取れるのだという意味を込めて言ってみる。

しかし、綾小路君はそれに気付いたか気付かないかはわからないにせよ、兎に角自炊にあまり乗り気ではないらしい。

ただ、彼は多数の食材の中でも特に保存の利く食品を眺めているような気はした。

まあ、別にどうでもいい事ではあるのだが。

「……じゃあ、10分後ここで」

一時解散し、自室に戻る。

私が私服に着替えてから下に向かうと、綾小路君は制服のままそこに居た。

「待たせたわね」

「着替えたのか」

「ええ。……何かしら」

何やら綾小路君が私をやたらとジロジロ見てくるのを感じ、それを指摘する。

……さつきから一体何なのだろうか。

昨日も思ったが、やはり記憶の綾小路君と今の綾小路君の間には随分と差異を感じる。

いや、実際には1年生の最初の頃の綾小路君はこのような感じだったような気もするのだが、2年間もの間彼とやり合った私としてはどうしても違和感が拭えないのだ。

「いや、何でもない。じゃあ行くか」

しかし綾小路君はそんな私の問いに顔を逸らして答える。

……まあ、いい。

予定通り、私たちは施設をひとしきり回った。

記憶のそれと変わらず、この学校の敷地内には随分と豊富な施設が完備されている。

ひとまず、それを確認する事が出来て良かった。

他者と、特に彼女と比べて私が持つアドバンテージは、この学校に

3年間通って生徒会長も務めた経験と、何よりも記憶による知識である。

だが、経験は兎も角として、以前言ったように記憶による知識にはこれからの出来事との差異があるのかもしれない。

だから、まずは私の持つアドバンテージを確たるものとするためにそれを1つ1つ潰して行く必要がある。そして、当然それは早ければ早いほど効果的。

そのため、入学3日目にして私は施設の探索を行ったのだ。

それはさておき。

施設をひとしきり回った後、私は同行人の綾小路君と会話していた。

「特に変わったものは無かったな」

「シヨップピングモールから娯楽施設まで学校の敷地にあるのは十分変わってると思うのだけれど」

再度の事になるが、やはり綾小路君は世間知らずだと思う。

ここまで充実した施設を初めて見た感想がそれというのは、全くおかしいとまでは言わないが……

「そうなんだけだな。この学校なら何かありそうな気がしてな」

「まあ、そうね……」

私は違和感を拭いきれなかったために思わず少し歯切れの悪い返事をしてしまう。

「堀北あれ、何かわかるか？」

「え？……どうやら銭湯みたいね」

そこには別に珍しくも何ともない、実に普通の銭湯があった。

「！ 銭湯っていうとあれか？ 複数人でデカイ風呂に入るっていう公衆浴場の事か？」

「……ええ。その公衆浴場のことよ……」

私はやたらと興奮した様子で銭湯について聞く綾小路君に対し、思わず引き気味に答えてしまう。

彼は銭湯の事すら知らないのだろうか。

そしてなぜこんなにウキウキしているのだろうか。

正直言つて少々……いや、何でもない。

「なあ堀北、入っていかないか？」

「……何を言っているの？」

今度は意味不明な事を言い出した。

一体どうして今この瞬間に私と銭湯に入るなどという選択肢が浮かぶのか。

「それに入浴は無料だけどタオルとかは購入しなきゃ駄目みたいね」

「うーん……」

……一体銭湯の何がそこまで彼を惹きつけるのだろうか。

はつきり言つて私には全く理解ができない。

「……諦めて後日一人で行きなさい」

「……そうだな」

綾小路君は何やらやたらと残念そうにして渋々私の意見を承諾した。

まったく……

「あなた本当に変なところに興味を持つのね」

私はそんな彼を見て思わず微笑を浮かべながら綾小路君にそう言った。

この学校では、4月の時点で水泳の授業がある。

それは恐らく夏休みに行われるであろう特別試験の対策にもなり得るものであり、重要度がそれなりに高いものである。

私は、この水泳の授業を利用してやりたい事がいくつかあった。

そんな朝。

登校してから本を読んでいると、記憶と同じく、とある話題に関する話し声が聞こえてきた。

「この学校は最高だよなー！　こんな時期から水泳があるなんてさー！」

「水泳って言ったら、女の子！　女の子と言えばスク水だよなー！」

池君と山内君が水泳と、それに付随する女子の格好についての話を他者の耳を一切気にせずに行っている。

「おーい博士ー。ちよつと来てくれよー」

そんな2人に外村君が加わり、女子の水着姿を記録するなどという話を教室中の女子に聞こえる程に大きな声で話している。

……まずは、1つ目。

私は席を立ち、何やらおろおろしている様子の綾小路君の姿を一瞥してから3人の元へと向かう。

3人は話に夢中となり、どうやら私が近づいて来ているという事実ですら気付いて居ないらしい。

「ねえ」

「!? ほ、堀北ちゃん!? ち、違うんだ! これは……」

私が話しかけてきた事実を認識したにも関わらず、この期に及んで何やら下らない言い訳を述べ出した池君の言葉を遮る。

安心するといい。

私はあなたたちをただ咎めに來ただけという訳では無いのだから。

「あなたたち、女性に好意を持たれたいのよね?」

「え!?! い、いやまあ……」

言い淀む池君たち。

誰が見てもわかりきった話なのだが、実に往生際の悪い事だ。

こんな惨めな姿を晒す今の彼らに一体誰が好意を持つというのか。

まあ、それでこそ池君や山内君、外村君ではあるのだが。

「なら、アドバイスしてあげる」

「まず、あなたたちの年代で性的な事に興味を持つのは恐らく仕方のない事なのでしょう。でもそれは秘める事。決して口に出してはいけないわ。それを聞いた女子からの幻滅は避けられないのだから」

そう言っただけで私は周囲をあからさまに見渡し、女子の反応を彼らに教える。

私が彼らをただ注意しに来ただけではないと認識した3人は、私の目論み通り話に耳を傾ける事にしたようだ。

「次に、女子に好意を持たれたいのなら、何でもいいから努力する事」
「で、でもよ。そんな事言っただけで……」

山内君が情け無い声を上げる。

こんな感想が出るという事は、私の言葉は現時点でもそれなりに彼の心に刺さっているようだ。

……このやり方は、怜山さんのそれを参考にした物だ。

一見突拍子も無い話のように思えるが、その内実は、ただ自分の言いたい事を言うのではなく、相手が興味を抱きそうな話を持ち出す事で思考を誘導し、望む結果に導こうとするやり方。

過去の経験からその有効性に疑いは無い。

「結果をすぐに出せなんて言っていないわ。勿論、それに越した事は無いのだけれど、一心不乱に努力をするその姿勢そのものに好意を抱く女子はそれなりにいる筈」

私は一瞬目を瞑り、間を作ってから話を続ける。

「例えば……それこそ授業を真面目に受けてみるだけでも、心変わりを理解し、認めてくれる女子は現れるでしょう」

「え、そんな事でいいのか？」

「勿論、それは触りでしか無い話よ。先程も言ったように、それに加えて成績を向上させたりすればより効果的でしょうね。ただ、少なくとも今よりは可能性は広がるはず」

話を聞いた池君は、興奮したかのような様子で

「な、ならよ。堀北ちゃんも俺たちが真面目に授業を受ければ好きになってくれるってことか!？」

……言うと思った。

「……好きになるとまでは言わないけれど、印象は良くなるわね。少なくとも、さっきのような話を大きな声でする今のあなたたちよりは」

「マジかよ！ それならやってやるぜ!!」

「俺もやるぞ!!」

3人は私の言葉に対して実に喜んだ様子を見せていた。

私がこのタイミングで彼らにこんな話をしたのは当然意味がある。

先日、ポイントの節約についての話をした際に私がある意味で少し突き放す様な発言をしたのにも重なる事だ。

何が言いたいのかと言うと……私は、この学校のシステムについての程度クラスに伝えるのかを考えていた。

その結論として、貰えるポイントが変動する可能性についてこの時点では特に言及しない事にした。

何故なら普通の人間は、1度痛い目を見なければ学習しないのだから。

いや、むしろ1度の失敗で学習する人間ならば、その人物はかなり優秀な人材だとすら言える。

少なくとも、私の記憶ではDクラスの生徒は1度の失敗程度では行動を改めない人間が多々存在していた。

例えば、須藤君は覚えている限り3回大きな誤ちを犯した。そし

て、それを反省した彼は私の頼れる味方となった。

例えば、かつての私はあれだけ苦渋を舐めさせられたにも関わらず1年時体育祭の段階でようやく他者の力を借りる必要性を認めた。

そのため私は、クラスメイトには5月の時点で自分たちの評価が最下位なのだと言いつけられる必要があると考えたのだ。

だが、そうだからといって注意喚起を何もしないというつもりも無かった。

それでは記憶にあった状況と何も変わらないのだから。

だから、私はこのタイミングで池君たちにこういった話をする事で、彼らだけでなく話を聞いていたクラスメイト全員が少しでもいいから生活態度を改めるようにと願った。

勿論、初日のポイント節約の話をした時と同様に、これだけで全員が態度を改めるようになるとは全く思っていない。

直接話を受けた池君や山内君、外村君も、今日1日くらいは真面目に授業を受けるだろうが、少し経つだけで直ぐに綻びが出るだろう。先程言ったように、人間は痛い目を何度も見ないと学習しないのだから。

ただ、私は彼らに気付く機会を、成長のきっかけを与えたかった。つまりはそういう事である。

そうして、すっかり教室が静まった中私が席に戻ると

「……堀北は、何にでも努力して全力を尽くすような男がタイプなのか？」

……よりによって、あなたがそれを言うの？

先程の池君たちへの発言は、勿論綾小路君に対しての言葉でもあつ

た。しかしそうだとしても、どうしても私はそんな風に思ってしまった。

「……………そうね。少なくとも、自分の実力を隠そうとする人間よりは」
「……………そうか」

話を終え、私は平田君と松下さんに後詰め of 指示を出してから読書を再開した。

「朝の堀北さん凄かったよねー！」
「うんうん！ 何というか、人の上に立つ人の風格？ みたいなのをすっごい感じた！」

更衣室にて。

私は着替えながら朝の池君たちへの言動を松下さんや佐藤さんを始めとした女子に称賛されていた。

これもまた、目論み通りの結果である。

初日と合わせてこれで、少なくとも私のリーダーの座は揺るがなくなつたと言つていいだろう。

松下さんはとりあえず私の指示通りに動いてくれるらしい。

それを確認出来たこともまた、収穫と言える。

「めちやくちやかっこよかったよー！ 堀北さんみたいな女の子、憧れちゃうなー」

私は称賛の声を聞きながら、一瞬だけ1人の女子生徒の姿を見た。

この状況下での彼女の表情は……

やはり、そうなるか。
だが、厳しいようだが今それはいいのだ。
それは彼女が味わうべき感情なのだから。

それはそうと、この水泳の授業にて、私にはもう一つ確かめたい事があった。

それはとある人物の事である。
その人物とは……

小野寺さんだ。

彼女は、1年生体育祭時には私より足が遅かった筈なのだが、2年生体育祭時には学年の女子トップの身体能力へと成長した極めて優秀な人材である。1年学年末時点ではそこまでの運動能力を持っていなかったと記憶している以上、彼女は2年になってからの数ヶ月で学年トップの身体能力に向上したと考えられる。

……正直言つて、明らかに不自然な伸び具合だった。いくら学校生活で成長したからと言つて、限度という物がある。

特に足の速さなどは1年走り続けても1秒タイムが伸びたらかなりの成長とすら言えるような物なのに。

その伸びは当然、元が速ければ速いほど、上に行けばいくほどに緩やかになる物で。

そして、彼女は陸上部ですら無く水泳部なのに。

男子3日会わざればとはよく言ったものだが……私は彼女についても気に掛ける必要があると思つた。

私は当時彼女も綾小路君と同様に実力を隠していたのかと疑つたのだが、彼女の性格上そんな事をするのか甚だ疑問だったし、何よりその時点で学年トップの実力を十全に出してくれるのなら、当時としてはそれまで力を隠していたのかそうではなかったのかは別にど

ちらでも良かったのだから。

とはいえ、今となると当時とは話が違ってくる。

何故なら実力を隠しているという事ならば、それを発揮してもらえた場合は少なくとも体育祭と学年末対抗試験の結果は大きく変わってくるのだから。

そのため、今日の授業にて彼女の実力を測る事も目的の1つだった。

彼女は実力を隠しているのか？

それとも本当に急激に伸びただけという話なのか？

見定める必要がある。

その結果……水泳の授業自体は拍子抜けする程記憶のそれと全く同じように進み、肝心の小野寺さんは、少なくとも私の観察眼では実力を隠しているようには見えなかった。

……小野寺さんが3年間で鍛え上げた私の観察眼を欺けるだけの能力を持っているのならば話は別なのだが、多分、そうではないと思う。

これでも、実力者を見る目は培われてきている自信はあるのだから。

どうやら、これ以上彼女を気にかけても杞憂でしか無さそうだった。

ちなみに、これは既にわかっていた事ではあるのだが、私の身体能力は1年時の物と変わっていない。知識は兎も角、肉体は1年時の物に戻っている以上は当たり前前の事だ。

技術面は向上しているため、水泳のタイムは記憶にある1年生の頃のそれよりは伸びていると思う。1年時のタイムなど注意して記憶している物でもないの、多分、という注釈は付くのだが。

とはいえ、正直言ってそれで何かが大きく変わるなんて事は無い。めどうでも良い話だ。

それはそうと、今日の授業と記憶の違いがあるとすれば、それは女子の見学者が圧倒的に少なかった事だろう。

これが私の行動の結果、という物だ。

こうして目に見える形で現れると達成感のようなものを感じる。

小野寺さんの話は兎も角、今日の行動における収穫は十分にあったと私は思った。

そして。

『明日、一緒にお昼を食べない?』

放課後、寮で私は怜山さんからそんなメールを受け取った。

いいだろう、受けて立つ。

今度こそ、私はあなたと対等になってみせる。

正直な話、未来の記憶という卑怯な力に頼るのは不本意だ。

だが、私は彼女を記憶における2年次以降のように退屈させる訳にはいかないのだから。

それこそが、私が見たい未来なのだ。